

〔表紙〕

家久公  
光久公  
寬永十三年

後  
編  
舊  
記  
雜  
錄  
卷八十九

894 「兵庫忠朗譜中」

寬永十三年 家久公賜加治木士及給地七千六百餘石、以故總計一萬七千六百餘石全併領之、

895 「家久公御譜中」

「正文在島津市之助忠祀」

896 「全御譜中」

「正文在彌殿仙十郎」

寶壽院

家久

新年之吉慶重疊不可有休期候、仍其地いづれも無事之由満足候、此方も同前ニ候、夏之初者、諸大名衆御暇可被出之由候之条、歸國之節万々可申談候、謹言、  
〔朱力キ〕  
〔寬永十三年〕正月五日  
〔島津忠廣、市正〕  
寶壽院  
家久〔御判〕

新春之吉兆重疊不可有際限候、仍其地無事ニ候覽、此方同前ニ候、夏初者、諸大名御暇可被出候由候間、歸國之節諸慶可申加候、謹言、

〔朱力キ〕  
〔寬永十三年〕正月五日

家久〔御判〕

根占七郎殿  
〔重水〕

897 「家久公御譜中」

「正文在伊集院内記久照」

新春之吉兆多幸々々、不可有盡期候、仍其許無事ニ候覽、此方同前候、夏初ニ者、諸大名衆御暇可被出之由候間、歸國之節万々期面候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕正月五日

家久〔花押〕  
〔御判〕

伊集院右衛門佐殿  
〔久照〕

898

「古御文書三拾卷卷中」家久公御譜中ニ在リ」

去冬者台書到來、開城宛若奉對 温顔珍重多幸、殊更爲御祝儀御太刀一腰・御馬代銀子廿枚并芳名一壺欽拜受、御恩恵不淺不知欣謝候、随而永々御在江戸何等之御遊興御座候哉、朝暮想像而已、次佐鋪長々違例氣候之処、漸近時致本腹如之、何幸哉欣然々々、萬縷讓于御使節之舌頭、不能詳候、誠惶誠恐敬白、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕正月十一日

琉球國王  
尚豊〔花押〕

進上 黄門家久尊公

899

▽○  
進上 黄門家久尊公  
琉球國王

尚豊  
△

「家久公御譜中」  
「正文在島津筑後忠置」

返く其方へ御入候女はう衆いつれニも申度候く  
かしく、

あら玉の御ことふき申いり候、式部との、するとなくこゝ元へまいりにて候、ことに御め見えのしあハせよく、めて度思ひ候へく候、其元ふしのよし、こゝ元同前の事にて候、式部との御内儀へも、文して申まいらせ候、やかて夏のはしめにくたり可申候間、よろつ又々申いり候へく候、かしく、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕正月十八日

中納言

おふくろ  
御返事  
いゑ久

「家久公御譜中」

「正文在琉球國司文庫」

條書

- 一其許爲御見廻野村大学助被差下候事、
- 一唐へ被遣候系船、前廉爲被相定趣、弥不可有相違事、
- 一從其地之出銀、前の年より次年九月を限ニ、可被相納之由、兼日申渡候、弥其首尾可有之事、
- 一其元之出銀未進分、早と可被相納候、去秋不慮之火事出來ニ付、思召外銀子過分ニ入候而、諸士大分之出銀仕候、惣別其元之儀者、出銀早晚かく被仰出候處、遅被納候儀、不可然候事、
- 一兼城身上如何様ニ被仰付候哉、最前從其元被仰候者、琉球へ被遣候人、於其地可被爲流罪候由、被仰候つれ共、其後者不及其沙汰、何ぞ深と敷科も無之候間、御暇可被下様に候、金按司達而被仰ニ付、暇被下候、定如最前者、被召仕間敷と存候事、
- 一去年系船無來着儀、以早船可有注進處、兎角無其儀事、

如何候而不通候哉、無心元候事、

- 一去々年北京へ被罷渡候使者、無違儀歸國候哉、北京之仕合之様子、細と被申入尤候事、

- 一日本國中南蠻宗御法度不大形候、連と諸國從其國主稱被相改候へ共、色とかくれ忍候而、何れ之國にても被改候時者、他之國へ行違たと仕候ニ付、去年霜月朔日より極月迄、日本國同時ニ被改候、國と殊之外難在氣遣共に候間、被得其意、其元へ若彼宗旨之者於有之者、日本國御改之趣、野村大学助へ被相尋、如其可有沙汰事、

- 一從薩摩其元へ參候船之船頭・水主ニ紛、他國之者可參候間、左様成者能と被相改被留置候而、此方へ可有注進候、日本國稱御改候条、如右之相紛、彼宗之者共可參事、

右條と無緩疎可有沙汰者也、

寛永拾三年正月廿日

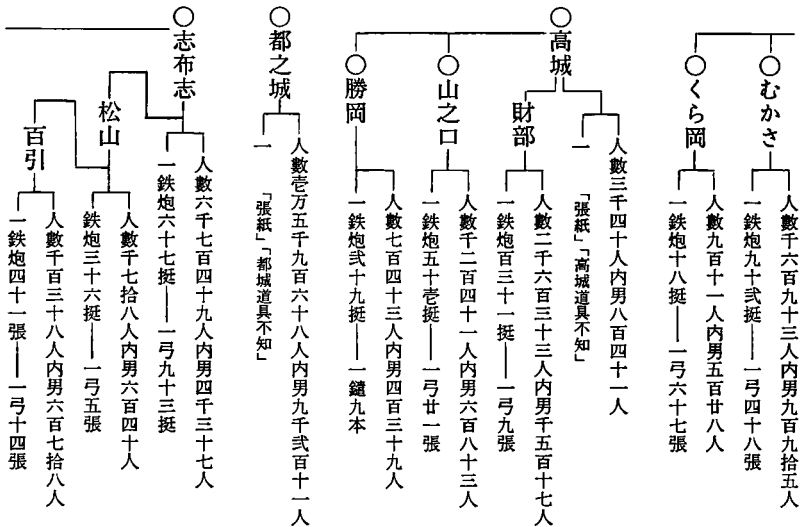
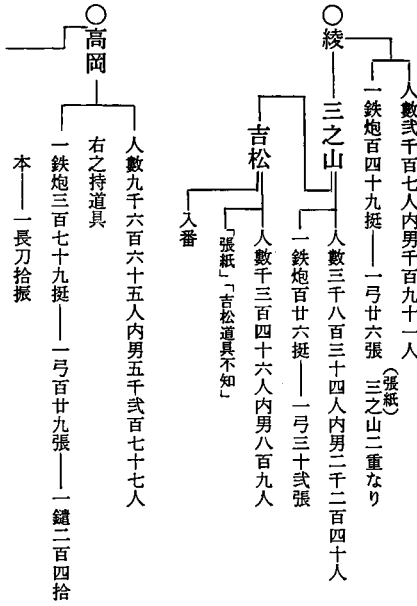
伊勢兵部少輔○(花押)

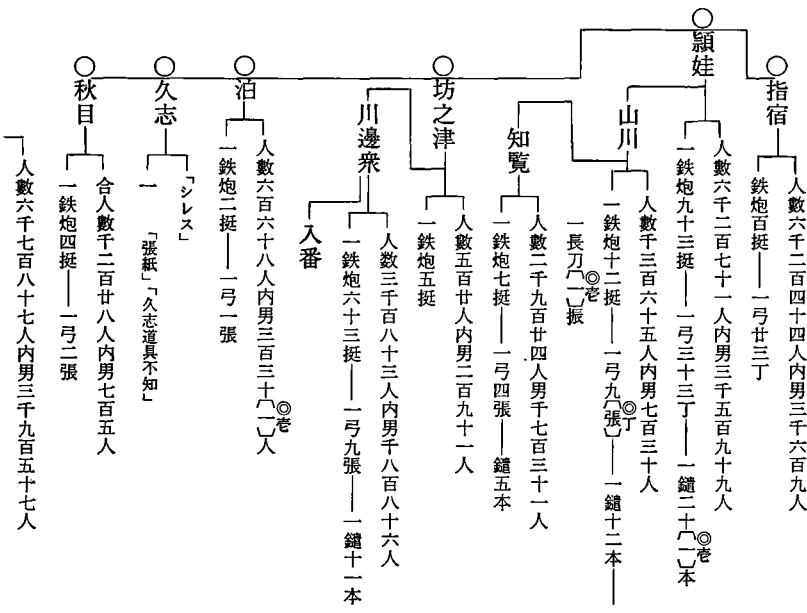
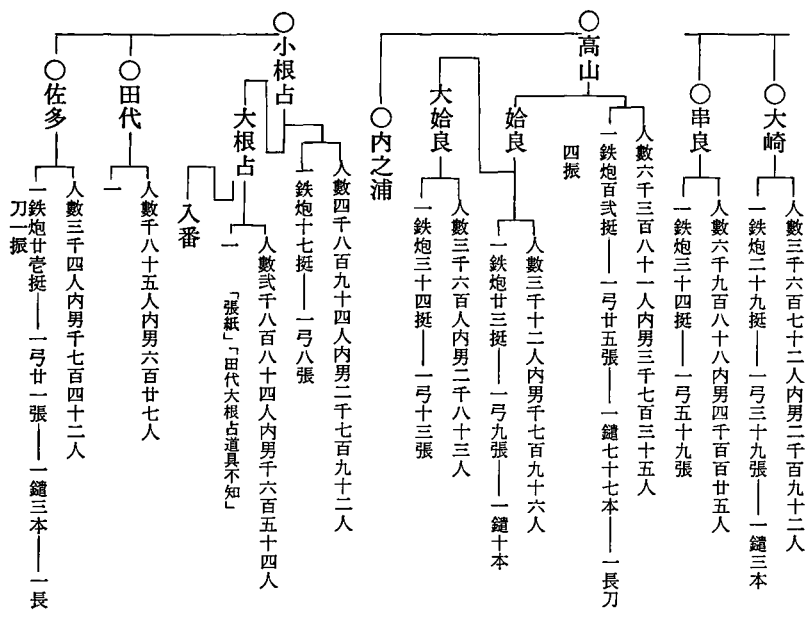
「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

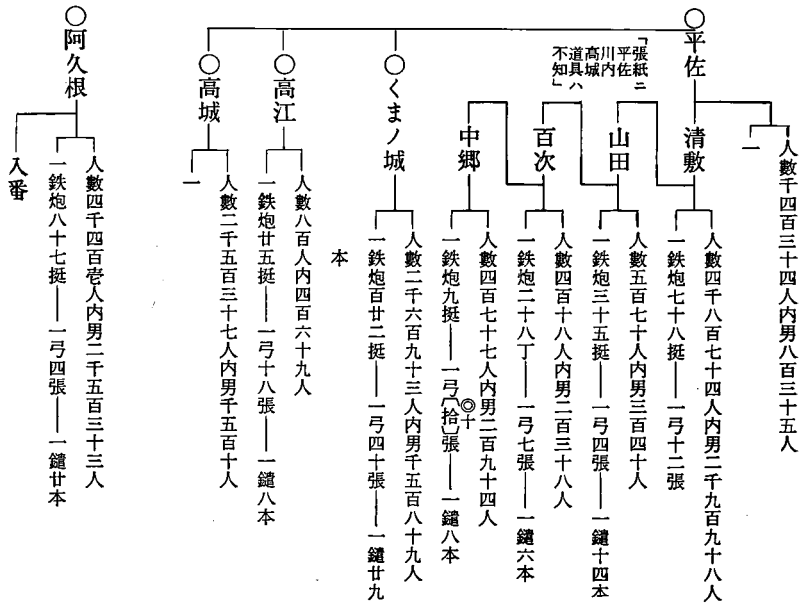
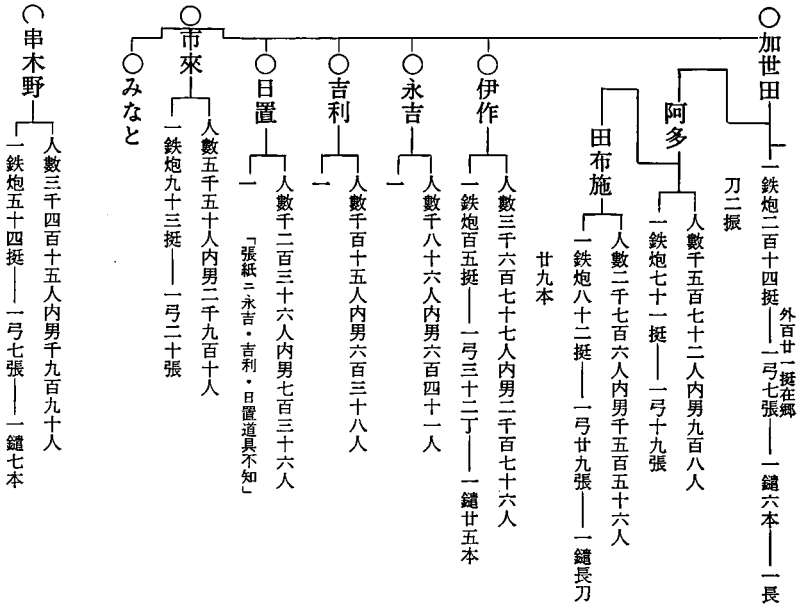
堺目

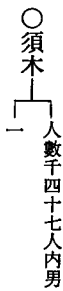
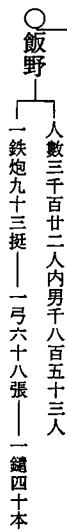
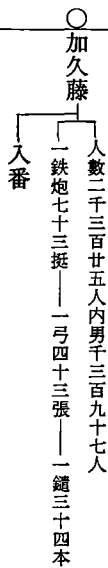
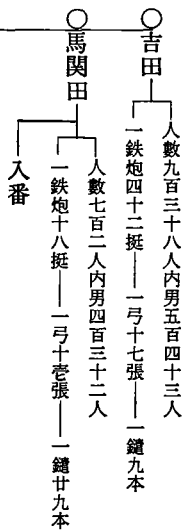
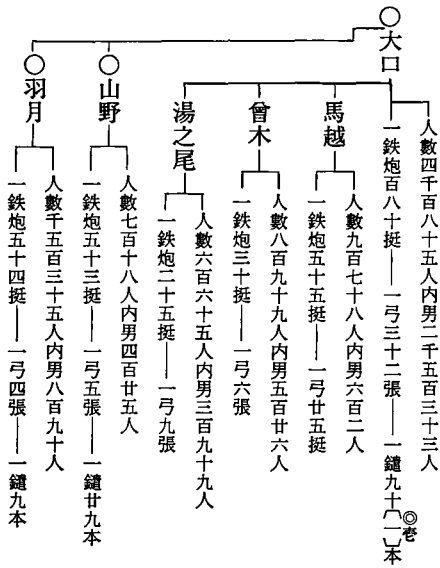
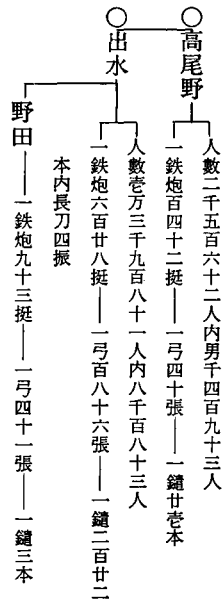
三司官中  
金武按司

川上左近將監判花押  
嶋津下野守判花押  
嶋津彈正大弼判花押

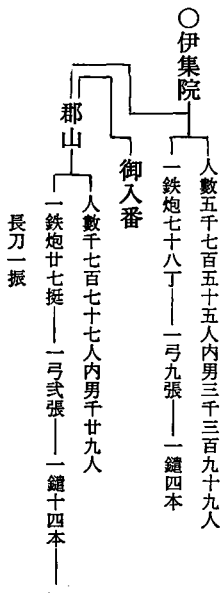




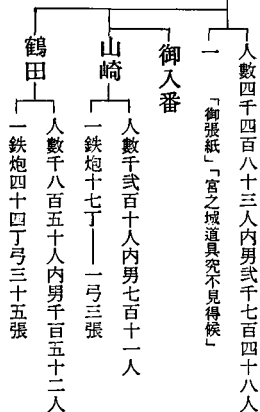




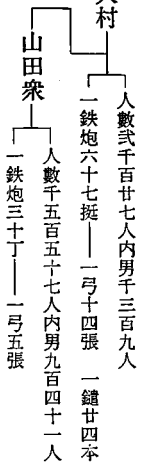
「以上一通年月ナシ」



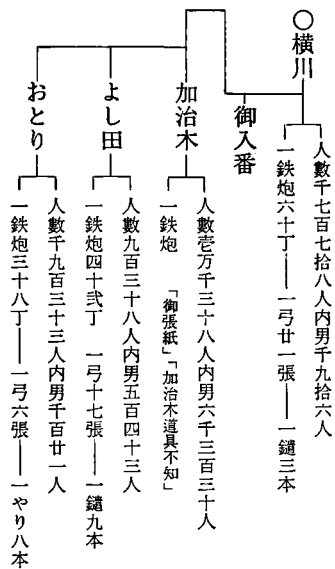
○宮之城



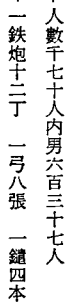
○大村



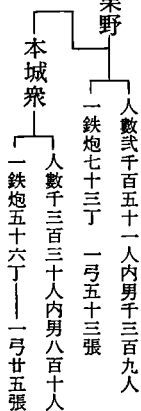
○横川



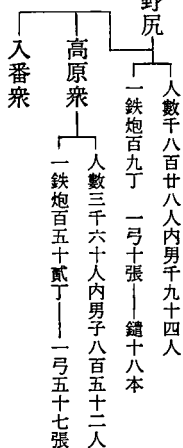
日當山



○栗野

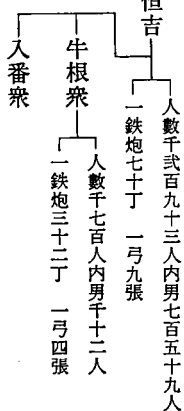


○野尻



○三之山—入番衆

○恒吉





○不吉  
 人數五千貳百四十三人内男三千四十六人  
 一鉄炮百十二丁 一弓百十二張

帖佐衆  
 人數三千十一人内男千七百四十八人  
 一鉄炮十三丁 一弓三張

入番衆

○敷根  
 人數千五百五人内男六百三十二人  
 御入番 「張紙」「敷根道具不知」

福山  
 人數千七百三十三人内男千七人  
 一鉄炮七十卷挺 一弓廿四張

○鹿兒嶋  
 人數三万三千四百三十貳人内男壹万八千六百廿四人  
 一鉄炮

谷山  
 人數五千四百七十七人内男三千貳百三十八人  
 一鉄炮九十二丁 一弓四十九張 一鑓四本

○蒲生  
 人數三千四百八十六人内男貳千四十二人  
 一鉄炮百廿一丁 一弓六張 一鑓三十八〇六本 一具足四兩

吉田  
 人數千九百九十四人内男千七百七十六人  
 一鉄炮三十七丁 一弓十四張 一鑓十八本 一具足貳兩

○國分  
 人數九千八百八十六人内男五千貳百三十二〇貳人  
 一鉄炮六十六丁 一弓三十六張 一鑓七十四本  
 一長刀四振 一具足七兩

清水  
 人數千八百七十八人内町千八拾〇貳人  
 一鉄炮六十九丁 一弓十九張 一鑓三十二本

曾於郡  
 人數貳千五百十四人内男千四百七十四人  
 一鉄炮六十六丁 一弓十八張 一やり六本

寛十三

正月吉日

右一通

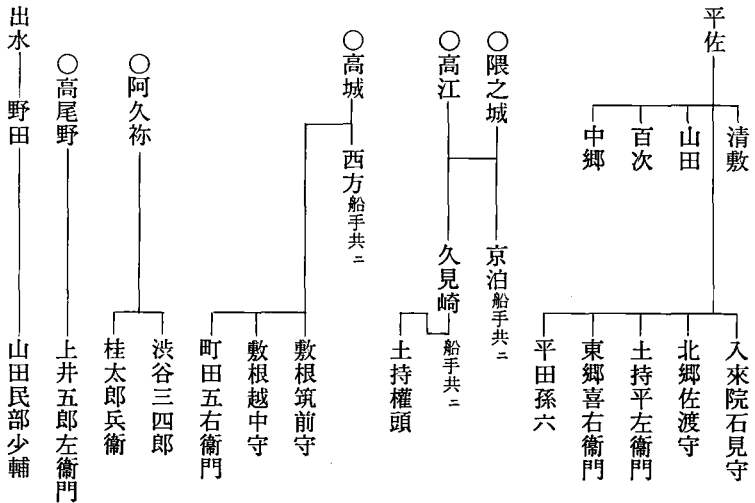
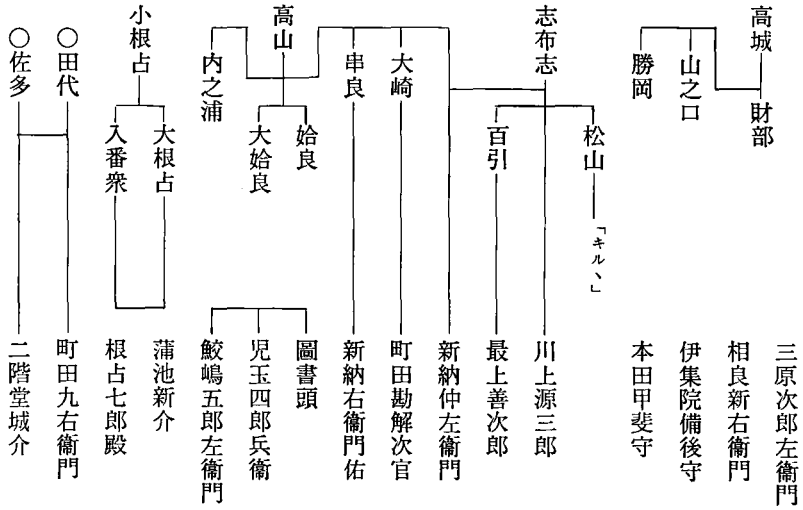
「張紙」  
 「以下家久公御膳中」  
 「綾ミハス」

綾  
 三ノ山 人數半分

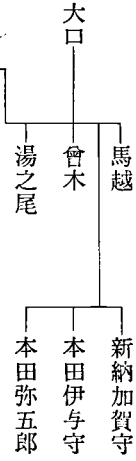
入番  
 吉松 川田助太郎

高岡  
 くら岡 伊地知佐渡守  
 むかさ 伊地知四郎兵衛  
 仁礼藏人

大野正右衛門



「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」



○吉田 弟子丸五右衛門

○馬関田 入番衆 川上上野守 曾木甚右衛門

○加久藤 入番衆 川上又左衛門

○飯野 大膳亮

○須木 村尾舍人佑

右一通

〔尚〕<sup>①</sup>以日光へ御社參之儀、大炊〔介〕<sup>②</sup>所方御内證申上通、かならず御行被成候様ニ可被仰上旨、拙者も能く可申上由被申事候間、其御心得可被成候、以上、

「家久公御譜中」 「正文在島津左衛門久道」

一書申上候、然者今朝之御振舞御機嫌能相濟、下と迄目出度奉存候、隨而 家久様日光へ御社參被爲成候儀、夜前如申上候、當月中ハ必御延引被爲成、二月まで御延可被成旨、大炊助被申〔入〕<sup>③</sup>候、内と今日御兩人様まで直と可申談と被存候處ニ、何角取紛失念被致、只今拙者より可申上由ニ御座候間、御心得のため重而申上候、何も面上ニ旁と可得尊意候、恐惶謹言、

正月廿四日

時岡〔判〕<sup>④</sup>〔花押〕

嶋津下野様 寺田与左衛門

伊勢兵部少様 時岡

人々御中

猶以伊勢羈へも下緒二具、銘と被入念、芳志之至候、已上、 爲當年之祝義、到遠路使者、殊太刀・馬代慰懃之至候、

從内義も樽肴重疊懇意之段、爲悦此事候、其方無事之由

令満足候、此方も無相替義候、定而其地へ相聞候はん、

此許者諸大名衆石墻普請にて、殊之外取籠之爲躰、可有

推量候、來ル四月者兼日如被 仰出候、いづれも御暇可

出候之条、其節者早々令歸國、万端期面会之時候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕二月八日

○〔花押〕  
家久〔御判〕

彈正大弼殿

〔在包紙〕  
彈正大弼殿

家久

904

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

返々近日中可令下向候間、くハしく可申候、已上、

此比承候、其元之はつと前に相替、きひしく何事も御座

候由取沙汰候、我等ハ少も不承候、其心得尤候事、又玄

番頭乗水法度きひしきよし候、肥前守・大久坊・十介な

とあらく敷申候故、彼浦之者共めいわくかり候由候、承

候間、我等申候ハ、それこそせいしの表にて候間、さう

く申いたされ候て可然由申候、兩条内儀に承候、如何

様公儀より被申へく候、心得尤候、たこん少も有ましく

候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕二月九日

○〔花押〕  
〔御判〕

霜州

まいる

▽○  
中納言

家久

905

〔御文庫三番箱五卷中〕

覺

一國分移ニ付始末之事、

一薩州來年下向可爲候哉、又來年者成間敷候哉、いか、

之事、付於下向者兵部少輔供可爲事、

一我等隱居之事、付居所之事、

一又八郎上洛之事、

『眞本兒玉氏家藏』(904号文書参照)

覺

國分移ニ付始末之事、

光久公

薩州來年下向可爲候哉、又來年者成間敷候哉、いかゞ之

一來年於上洛者、又八郎・玄蕃頭同心之事、

一東之丸縁結之事、

一安藝守之事、

一又八郎かちき役人之事、

一采俊之事、

一芦谷權左衛門尉兄之事、

一攝津守内儀、付新八郎内儀之事、

一犬追物之事、

一万部之事、

一來年於上洛者老中供之事、

已上

二月廿一日

事、付於下向者兵部少輔供<sup>『伊勢』</sup>爲<sup>『自昌』</sup>

我等隱居之事、付居所之事、

又八郎上洛之事、

來年於上洛者又八郎・玄蕃頭同心之事、

東之丸縁文之事、

安藝守之事、

又八郎かちき役人之事、

立野之事、

芦谷權左衛門兄之事、

攝津守内儀付新八郎内儀之事、

犬追物之事、

萬部之事、

來年於上洛者老中供之事、

已上

「寛永十三年」カ  
二月廿一日

『是 慈眼公親筆也』

「家久公御譜中」

「正文在島津内膳久兵」

返くかちきへも御こしのよしうけ給候、さいく

御こし候へく候く、かしく、

御しうそこのとをり、やうくこの比まいり、御返事申

候御こ、ちもよく御さ候よし、めて度候、刑部事ゆく末

御たのみのよし、尤にて候、我らもやかてくたり申候ま

ゝ、參候て、めて度申候よし、御いとまもやかてのよし

申候、又くかしく、

「朱カキ」三月十日 江戸より

ちうさ まいる返事 いゑ久

908

「全御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

一書啓入候、息女繁昌之由相聞、千秋万歳目出度候、其

方之満足令察候、即爲此等之祝義使進之候、委口上ニ可

申達候条、不能詳候、謹言、

「朱カキ」三月十日 家久○(花押)「御判」

種子嶋左近太夫殿

909 「家久公御譜中」

寛永十三年丙子、家久兼日奉訟使嗣子光久居隅州國府之

新城、則覃 台聽被許焉、詳見堀田正成・阿部忠秋・酒

井忠勝・土井利勝連署之奉書、雖然自今茲冬家久罹病、

故不及于營作之事矣、

910 「光久公御譜中」

寛永十三年、家久訟以光久之館構營于隅州國府府或作分城麓

爲隅陽之衙父子各別居城、達 家光公之台聽、同三月十

四日、蒙 恩許、賜執政之奉書矣、雖然、未及其事、會

家久養痾疾、遂不起、故徒空 恩免而已、

911 「雜抄中」「家久公御譜中ニ在リ」「光久公御譜中ニモアリ」

以上

大隅○(ナシ)之國之内國府之城、追手裏口に建門、城内ニ作番

屋、少く番之者計差置、山下に構屋敷、薩广守被有之候様  
に被仕度之由、被差上繪圖候、右之趣達上聞候之処、  
可被申付之旨被仰出候、可被得其意候、恐と謹言、

寛永十三年子

三月十四日

堀田加賀守 ○(花押)  
正成(判)

阿部豊後守 ○(花押)  
忠秋(判)

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝(判)

土井大炊頭 ○(花押)  
利勝(判)

「此原文古文書十一番箱三拾卷中ニ在リ、誤字乱合ス」

薩摩

中納言殿

人々御中

912

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」「光久公御譜中ニモアリ」

覚

大隅國之内國府之城、追手裏口ニ(御)門をたて、城内ニ  
番屋をつくり、少く番之者計差置、山下(ニ)屋敷をかま  
へ、薩广守有之(候)様(ニ)仕度之由申上候処ニ、右之通可  
申付之旨御奉書之趣畏奉存候、以上、

「朱カキ」三年  
「寛永十三年」  
「月日無之」

嶋津下野守

伊勢兵部少

913

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

爲年首之祝義、下野守所迄之書狀、殊更太刀一腰・馬一

疋致祝着候、猶永日中諸慶可申加候、謹言、

「朱カキ」三月廿九日  
「寛永十三年」  
家久(御判)

種子嶋左近太夫殿

914

「家久公御譜中」

「正文在森岡孫之進」

返く御きにあひ申候ハ、めて度候く、かしく、

御琴いてき申候間、しんし候、音も一たんよく御入候まゝ、まんそく申候、御ひき候て御らんし候へく候、かな物・ふくろなど、いまたいてき不申候、こゝ元にて御たんかう申候へく候、先はやくと御ひき候はんとしんし候、又くかしく、

「朱カキ」寛永十三年「卯月廿三日

中納言

くわな

まいる  
申給へ

いゑ久

「雑抄」

物定三十五条

一諸人憑ニて致申候儀之内、後日例ニ可惡儀者、能くしらべられ、必被取次間鋪事、  
一前之例を曳、扶持方之御詫被申候儀、多く有之事情、其理ニ不叶儀共候ハ、雖爲先例用ニ不被立、其時との可爲理次第候、就中、及數年不被立申御侘を、御使衆餘多を願替、折くニ申出人、可被相改事、

一連く御奉公方被仰付候刻、侘かましき儀停止之由、前より御法度ニ而候を乍存、每事後者領掌之儀も先御侘被申候、相應之儀見合を以被仰付候間、縦申方候共、必く被取次間鋪候、併其人との不叶儀、無案内ニて被仰渡、又者當病などにて候者、可被相替候、表裏之御侘ハ會而被請付間鋪事、

一賦方出入之儀、家老衆不及承、物奉行衆・賦衆談合を以可被相究候、自然物定帳ニ無之、新儀にて候者、家老衆可承事、

一相納銀子之善惡并欠米賣買物之直成等之沙汰、家老衆不及承物之儀者、物奉行衆沙汰之上ニて可被相定事、  
一切米其外御扶持可相渡刻 家老衆不及承候条、如御定可有沙汰候、若つくろひ普請、毎日用仕等之儀者、普請奉行可申付候、若普請奉行手前ニ而可難濟儀者、物奉行衆以談合可被相究事、  
一諸役所之下代筆者之儀、家老衆不案内ニ而付置候共、於大形之人者、奉行前々内談被申、可被相替事、



一 在江戸三替御供立、二替ニ今度被相定候衆之内、差合候者、上洛前之御使衆より沙汰ニて、家老衆へ被申可被定置候、又江戸ニて御用ニ不被立衆者、御使衆より家老衆へ内證被申、可致差下事、

一 諸士知行之賣買之儀、高奉行・算用奉行被聞候て、出物之未進押前など手前ニ無御坐由、沙汰落着ニて可被申刻、家老衆承高を可相直候付、如先例町人あかりの類の衆、手前成候として知行を買取、餘過分之高ニあかり候義、弥御法度ニ候間、三百五十石より上者堅可爲止事、

一 諸士へ知行被遣、當毛可被相添刻者、其地納之代とシテ不及沙汰、田畠引合三斗二升代之米可被遣事、付知行已下之由爲被仰出年々、可被下衆も可有之事、

一 江戸上御屋敷・中屋鋪江被罷居候衆、歸國之跡明合候者、借屋へ被召置候人を、物奉行衆方明合候宿へ、則可被移候ニ付、從公義賦之宿をはつし、合手くニ被罷居候由候間、一ヶ月ニ一度も屋形方被改、自然人

數不足之宿於有之者、早々可被移人事、

一 江戸中屋敷御買屋・借屋賃之儀、壹ヶ月ニ一度ツ、被改、賃銀被請取候様ニ、屋形奉行へ從物奉行衆、節々可被申渡候事、

一 歸國仕人者、被仰渡候衆、或役掛或少之煩ニ付、打立被取延候間、物奉行方無油断可有沙汰候、若其上ニても氣任之人於有之者、早々家老衆へ可承事、

一 自今以後、在江戸十五ヶ月詰之替番ニ被仰定候条、其間之賦被下被召仕儀候条、何役ニても賦銀之外、御扶持銀被遣ましく候、陸御供衆星帳ニ付候而、此中御扶持銀被遣候故、諸人も御侘被申候、向後者星ニ而御供疎略之人者、曲事之段可被仰付候、衣裳扶持者、應時々可給事、

一 物定帳ニ在之事も數々之儀候間、多分相紛儀茂可有之候、左様成刻者、御使衆者不及申、其外取噉之衆よりも御爲ニ可成様ニ可被申出事、

一 惣而歴々付又小者共、喧嘩口論仕出候時者、走者衆者命

衆可成程、噯を以可被事濟候、若下ニテ難濟事者、御  
使衆迄内證可被申出事、

一直ニ目安を輕く敷差上候儀、可爲停止候、乍去、有訴  
訟之儀而、誰くへ申入候へ共、依無御取止不及了簡、

目安指上申候儀者、左も可有之歟、内くニテ各へも不  
申候ハ、聊尔ニ目安差上候輩ハ、可被處嚴科事、

一諸外城よりの口事諸沙汰之儀、尤其所ニテ可被相濟候、  
若公儀ニ而不及御沙汰候て、於難濟者、其様從地頭委  
披露之上を以、可有其沙汰候、自然爲指儀なき事を、

其所ニ而ハ不果、鹿兒鳴へ申出候者、曲事ニ可被仰付  
候事、

一町中口事之儀者、町奉行沙汰ニテ可被相濟候、若公儀  
へ申入候ハて不叶儀候者、從町奉行可有披露事、

一御分國中、扶持人之外ニ懸目候者を、一所衆・諸土衆  
・諸寺家外城之諸地頭噯衆中など、内之者之様ニい  
たされ、其所之諸役相遁之儀、以之外不可然候、向後  
可爲停止候、然者在郷ニ有之者之儀者、其所之百姓ニ

相付、知行を作、或殿等之儀も百姓並ニ可仕候、町濱  
ニ可有之者ハ、其町濱の役儀を可仕候、在郷ハ其所之  
庄屋を致沙汰、町濱ハ其所の役人を致沙汰、少も私成  
儀申者於有之者、公儀へ可致披露事、

一御家中歴と衆之内身躰不罷成候ニ付、上方・江戸ニ參、  
町屋などへ致堪忍、色と縁取を以御賦被給衆并御奉公  
相勤替合之時分、如御國被參事も不罷成候間、左様之  
衆能く可被相改儀、御使衆中連と覺悟可有之事、付此  
ケ条之趣、諸地頭へ被届置、向後衆中之内暇申人雖有  
之、不可有承引由、堅可被仰渡事、

一御小者衆・御中間衆、御赦免之後五年過候ハ、主從  
之賦可被出候由、先年より之御法度弥不可有相違候、  
然者、御小者衆之内、或料理小番、或次之包丁人、或  
臺所付、或酒部屋付、或久鋪以食焼之類、士ニまきれ  
名字を名乗罷出候儀、曲事深重候条、惣別物之役ニ被  
仰付候時分、其人之由來を能く可被相尋究事、

一御小者、御中間、無御赦免衆之名字、公儀之日記など

に書載儀、往古方無之儀候、其上侍ニ紛候之条、寛永十三年卯月方被相改候、自今已後名字被書間敷候、我々私之儀ニハ、名字を書候共不苦候事、

一 自身之士養子被仕候而、御目見得仕度由被申候刻者、

其養子之先祖之沙汰被成、或町人又同或他國之者或百姓之子類ハ被指留、年寄中へ可被申達事、

一 從御前御使衆へ直ニ被承候儀共候時者、御意之趣早くと可被申付候、若年寄中へ談合可入、於子細者可有其心得事、

一 上方御滞留中色々御用物、藏奉行被調候、是者可爲御急用之間、何時も納殿衆之内其時々之御使共仕候衆より、公儀之御使衆へ被申達、彼衆之手形ニテ取掛、尤たるへき事、

一 物定之外ニ、俄ニ不叶入目可有之時者、家老衆へ不及御理、相應之儀ハ從御使衆被申付、尤たるへき事、

一 物毎、年寄衆者事多候へ者、不存付事耳候之間、何事ニても延々ニ成立、御爲不可然儀共於有之者、御使衆

中無用捨節くと可承候事、

一 籠ニ入置候もの、惣別科人いともなく召置ニ付、賄等御造作ニ成候間、口事聞之月行司より、月々ニ被致沙汰、科人之噫早くと可被相濟事、

一 歴々衆諸事御奉公方被仰付候時、前之役か、りなどにかこつけ、當日のあたり事を可遁、無左程事も種々御侘被申候間、能く御使衆可有其沙汰事、

一 諸細工人何そ一色之御細工ニ取付候へハ、隙明ニても其内ニたつさわり、或御番或御供其外御奉公方ニ申分共候、御急用之御細工ニテ無之候者、先差當候儀可被相勤候之由、堅御使衆より可被申渡候事、

一 諸役人其役をのかり候ても、御算用ニ隙入など、候て、御奉公方難渋候間、其役所をはつし、御臺所御舟手御普請方ニ相付候衆ハ、三ヶ月限ニ帳可被出候、御進物藏ハ五ヶ月限ニ帳可被出候、外城出物役人庄屋衆之日記ハ、壹ヶ月限ニ可被出候、如此相定候間、難渋之輩ハ御使衆より其沙汰候て、家老衆ニ可承事、

寛永十三年丙子、家光公賜告於家久上使、不傳、時白銀千葉

〔家久公御譜中〕

〔張紙〕  
此畫家久公御譜中ニ無之

一諸科物并闕所之物之代、御物同前ニ御藏へ被入置候へ者、何色ニも被召仕儀候間、向後者別ニ被納置、神社・佛閣・橋建立、又八人へ被下候入目等ニ被相拂、尤たるへき事、

右条々以御談合被定置候間、向後此趣不可有違変者也、

寛永十三年丙子 卯月廿六日

鎌田出雲守

三原左衛門佐

山田民部少輔

伊勢兵部少輔判

河上左近將監判

下野守

彈正大弼

・時服百領拜戴之、登營拜謝如先蹤、既而五月日不發江府、家老島津久元從駕、同月二十四日到京師、六月十八日入寛城矣、

〔御文庫三番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

爲端午之祝儀、帷子単物數十到來、欣悅候、猶土井大炊

頭可述候也、謹言、

〔朱カキ〕  
「寛永十三年」五月三日 秀忠 ○ (墨印)

薩摩  
中納言殿

〔御文庫拾八番箱廿九卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

御条書之尊答

一今度野村大学助殿・被成御下向候、萬事可得御意候事、  
一唐へ被遣候糸船、前廉如被仰付候、無相違様ニ可奉御奉公事、

一爰許出銀、前之年より次年九月を限可相納之由被仰

出候、雖然遠方之儀ニ御座候間、十二月限ニ御用捨可

被成候様ニ御仕之事、

一此元之出銀未進分、早ニ無油断可奉皆濟事、

一兼城身上之儀、去々年御用就無御座、被成御下候条、

出仕計仕候様ニ申渡候事、

一去年糸船歸朝之儀、若七八月ニ歸朝可申かと相待候而、

飛脚延引、我々油断罷成候事、

一去々年北京ニ罷渡候使者、歸國次第ニ様子細々可申上

事、

一日本國中南蛮宗御法度不大形御座候之由、奉得 尊意

候、爰許茂野村大学助殿へ得御意、稱相改可申候事、

一爰許へ罷下候船頭・水主ニ相まされ、他國之者彼宗之

者共罷下候者、隨分相改留置、可奉御注進之事、

右御条書逐一奉拝見候、聊不可存疎略候、以上、

寛永拾三年五月六日

豐見城(花押)

勝連(花押)

金武(花押)

野村大学助殿

参

919

「家久公々北郷式部太輔久直へ御教訓御条書」

「家久公衛三男ナリ」

條々

一諸事仲左衛門尉并嘉左衛門尉などへ無談合、そこつ成

儀共直ニ被申付由聞及候、氣任之至と存候事、付重而

公義立たる所へ、何事にても使など可被遣時者、河上

將監・伊勢兵部少輔へ被相尋、以其上如何様ニも可有

分別事、

一於國元何篇心之儘ニ候つるには可相替候間、物毎無堪

忍、心之儘ニ可有之儀、不可然候事、

一諸藝嗜方之儀など、一興に候て、少取付候而者又別事

ニうつり候様ニ聞及候、左様に候てハ、何之稽古も成

間鋪(花押)候、早竟是も心中之不正と存候事、

一学文を第一(に)被懸心、以其道修身齊家君臣之道を正、

向後薩州へ忠節之志可爲肝要之處、學文之道ニも不入、

任所私情之欲被行候者、一(も)善事無之、ゆくゆくハ

身を可被亡と、笑止ニ存候事、

一 餘力之時、哥道をも被懸心尤候、風流之心なき人〔は〕、  
非待之類、〔万〕<sup>〇萬</sup> いやしく候間、能く可被相嗜事、

一 家中之侍至下と迄、能く被加憐愍候て、行儀法度之儀  
ハいかにも稱可被申付事、

一 従何方欵大犬爲來由聞得候、於爰許者連と心〔安〕<sup>〇易</sup>爲被  
相馴人有之間〔鋪〕<sup>〇敷</sup>候、大犬〔者〕<sup>〇ハ</sup>小身之人へハ無之者ニ

て候間、定而御歴と方所望候欵、左様之儀何と被申談  
候哉、笑止千〔万〕<sup>〇萬</sup>ニ存候、惣別犬ハ何之役ニ立候哉之  
事、

一 先日従加治木之使〔に〕<sup>〇ニ</sup>參會之時、無面目様被仕懸、爲  
失外聞由、其使之者かけく爲申由聞及候事、

一 上屋敷芝之輕業被近付之由聞及候、是又不入事欵と存  
候、惣而輕業などの申事ハ、一〔茂〕<sup>〇モ</sup>後学ニ可成儀〔者〕<sup>〇ハ</sup>  
無之、道にいたらぬ事迄ニて候間、左様成衆とこいれ  
候ハ、早竟其方之心に爲似故欵と存候事、

一 薩州之舍弟と申、北郷家之事も従本とおもく爲有之由、

聞及候處、小姓・奉公人などのやうニ、かろく敷、  
身をもちなし候様ニ聞及候、無念之至候事、

一 先年大龍寺喜入久右衛門尉を以申渡条目之趣、曾而無  
承引と見及候間、以卵打石様成吳見、不入儀候へ共、  
爲薩州候間、萬一可立用儀も哉と存、如〔斯〕<sup>〇此</sup>候事、

一 横目を付置候間、如〔此〕<sup>〇斯</sup>加吳見候儀、少ハ用ニ茂立候  
哉、又曾而左様ニも無之候哉、後日委聞届用ニ不立様  
ニ候〔ハ、ハ〕<sup>〇者</sup>、重而者<sup>〇少茂</sup>吳見かましき儀申間鋪候事、

以上

〔朱力キ〕  
「寛永十三年」子五月十五日

伊勢兵部少輔殿

川上左近將監殿

下野守殿

「此一書家久公御譜中ニ在リ」

「正文在島津筑後忠置トアリ」

「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申入候、先日江戸より將監殿・兵部少輔殿同前ニ申入候、一天下鳥目相替儀、弥諸國も其通ニ被仰付之由候、御國本之儀者、從往古遺來候錢を遣候てハ、可有如何哉、

江戸五月十六日御打立被成候而、同廿一日濱松へ御着被

成候、我等も無爲御供申候而、満足申候、其外召烈候者

とも迄息災候間、少も念遣入間敷候、六月十四日五日頃

者、かならず鹿へ御着可爲候間、其心得可有之候、定而

むかへなどの事、無御油断被仰付候而可然候、奉頼候、

我等馬も、海道無事通候間、少も心遣あるましく候、恐

と謹言、〔按是賜馬〕

〔寛永十三年〕

五月廿四日

同筑後守

利昌〔花押〕

兄玉四郎〔利實〕兵衛殿

返く拙宿  有之候哉、

併御法ニ者迦レ申間敷と、酒井讚岐守殿内深柄九郎右衛

門尉殿へ、兵少老我等爲内證右之段申置候、然處〔關字〕御打立

急ニ御座候而、其返事をも不承罷立候へハ、此狀昨朝

かなやにて令披見候、文牒致披露候へハ、早々御國へ可

中越由被 仰出候間、此飛脚遣候、鳥目相替儀なにと可

被成御才覚哉、爰元ニ而各談合申候様子者、今度被成〔關字〕御

下ニ付而も、細嶋より御國之鳥目つかひ申事、不罷成候

間、少々大坂ニ而新錢調可罷下候、とかく大分ニ不罷下

候てハ成間敷候間、御藏衆へ談合申、御物之銀子にても

鳥目買下可申候、又大坂堺町人衆へも頼可申欵と存候、

鳥目相替儀、六月朔日よりと御座候条、余日も無御座故、

如此談合申候、但其元ニて被成やうも候ハ、早々可被

仰登候、江戸參候狀則遣申候、猶期後音候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十三年〕

五月廿二日

下野守

久元〔判〕〔花押〕

三原左衛門佐棟

鎌田出雲守棟

山田民部少輔様

彈正大弼様  
人々御中

彈正大弼様

山田民部少輔様

久元

三原左衛門佐様

鎌田出雲守様

參

下野守

子五月廿二日ノ狀六月一日鳥目相替由候間、御國も早々被相替可然由候、

922 「古御文書三拾卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

追而此楊梅一折令進入候、以上、

爲御見舞以使札令啓達候、然者久明王御參詣無之候間、

今度思召立於御光儀者、可爲恐悅候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」五月廿二日

観助

松平大隅守殿

人々御中

923

「家久公御譜中」

「正文在森岡孫之進」

其方いかと存候、せめてえい<sup>「本マ、」</sup>にても御なくさきとおもひ申候、御うら山しく候、おまんさま御ゆかし

くこそ思ひ候へく候、心しつかにくハしく申候へく

候、又とくかしく、

わさと申候、ろしなに事なく、きのふ廿四日、こ、元ま

てまいり候事候、くわなへ參候、いつもながら御ちそふ

申計なく候、さりながら、そもし御入候おりふしにハ、

かハリ候て、ものたらぬやうにこそ思ひまいらせ候、お

ひめさまへ御めにかゝり申候、一たんとうつくしき事にて候、

ことの外御せいしんの事にて候、御ふくろ事ハは

つらいのよし候て、御めにハかゝり不申候、てなどはれ

申候よしうけ給候事候、さてくろしのめいわく御すも

し候へく候、としハわかかく御入候が、此たひほととをき

事ハおほえ不申候、はいなと、申候事申く申計なく候、

くわなよりこの方にハすこしも御さなく候、



「朱カキ」五月廿五日

きやうより

くわな

いゑ久

誰にてもまいる

申給へ

924

「正文在伊地知藏之丞」

將又此夏菊任到來進入候也、

今日吉日候間、此尊像令開眼進之候、然者來月四日五日

之比、太現明王可有御拜之由、得其意候、就其地坊御同

道候て、立花之儀尤存候、御隙次第必く待存候、猶西池

主膳可申入候、かしく、

「朱カキ」

寛永十三年五月廿八日

(良恕法親王)

(元持)

松平大隅守殿

925

「雜抄中」

御札致拜見候、外科慶祐當月廿日其地へ致着、則腫物療

治有之由承届候、最前久志本式部被差遣之、其上又於京

都可然下料罷成候様ニと、板倉周防守迄相達候付、慶祐

下りも重疊忝候由、得御意存候、被入念蒙仰之趣、被達  
上聞候、恐惶謹言、

寛永十三

五月廿九日

阿部豊後守

忠秋

松平伊豆守

信綱

酒井讚岐守

忠勝

土井大炊守

利勝

薩

中納言殿

貴報

(張紙)  
「此書御譜中ニ見えず」

926

定

一寛永之新錢并古錢共ニ金子壹兩ニ鑄四貫文、勿論右部

考ニヨル

ニハ可爲壹貫文之賣買、若違背いたし、高下のうりかい

仕ニ「三」おひてハ、双方より其賣買之代一倍、爲過料

惣同

可出之、其町之年寄貳百疋、其外家一間より十疋ツ、  
爲過上書〔怠〕可出之事、  
○料(同上書)

一 大かけ・割錢・かたなし・ころ錢・なまり錢・新○鑑(同上書)〔惡〕  
錢此外不可撰、若えらぶ者六錢をおしてつかふ者有之  
者、或其所○に〔三〕三日さらし、或十日籠舎たるへし、其  
町之過料右同前之事、

一 新錢江戶并近江阪本○に〔二〕て被仰付候間、兩所之外、惡  
錢○に〔一〕至迄一切不可鑄出、若相背族ハ可爲曲事之事、

一 今度新錢被 仰付之上、縱雖爲有來惡錢、或礼○物(同上書)〔儀〕或  
散錢等にも不可取扱事、

一 御領・私領共ニ年貢取納等ニも、此御定之通不可相背  
事、

右條と堅可相守者也、

寛永十三年六月朔日

奉行

「家久公御譜中正文在伊勢兵部貞榮トアリ」

「御文庫拾八番廿九卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」  
光久公御譜中ニモ在リ

以上

追而令啓候、如仰 薩州樣國分ニ被成御住宅度由、以酒  
井讚岐守殿被成御披露候處、御免許被成候由、御奉行衆  
御連署之御奉書出申、誠目出度奉存候、 黃門樣御下國  
被成候ハ、追付此段○可被仰出由候間、御承可被成候、巨  
細者野州老可被仰之間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」六月十五日  
「寛永十三年」

川上左近將監○(花押)  
久國〔判〕

伊勢兵部少輔○(花押)  
貞昌〔判〕

彈正大弼樣

山民部少樣

鎌出雲守樣

三左衛門樣

貴報

▽  
彈正大弼樣

山田民部少樣

鎌田出雲守様

貞昌

以上

三原左衛門様

伊勢兵部少輔

一書申入候、

川上左近將監

一頃者被成御下着、其元上下御満足之儀奉察候事、  
一此方兩御屋敷、皆々無事ニ御座候條、可御心易◎候事、

『兄玉氏家藏』

從伏見之御狀慥ニ相届、披見申候、仍從『家久公』黃門様被成下

御書、殊ニ當年之御茶壺一拜領被仰付、誠々忝儀存程難

申上次第御座候、即『光久公』薩州様申請候を切申候、誠ニ走藥

有之不申候、被思召寄候段、返々恐悅至極ニ候、定頃者

可爲御下着候、去年以來之御休息、目出度奉存候、此等

之旨能々可預御取成候、猶期後音候、恐惶謹言、

『疑覽永十三年』

伊勢兵部少輔 貞昌判

六月十五日

兄筑州様

御宿所

『御文庫拾八番箱廿九卷中』、『家久公御譜中ニ在リ』

一今度 黃門様御歸國前ニ被 仰出候趣、野州老如御存

知、長々在江戸衆者、被致歸國尤之由ニて、大崎左

衛門殿・市來備後殿、又夫婦之衆・黒田百左衛門尉・

伊東勝右衛門尉・竹内伊左衛門尉・女房召列致歸國候

内ニ、勝右衛門尉儀者、散々相煩候て、今度者不罷成

候、從 黃門様被仰出候つる処、延引如何之由可思召

候間、以御仕合可被仰上候事、

一 從其元銀子御もたせ候御道具衆、今月七日於下津井

御船ニ參逢申たる由候て、從野州老之御狀致持參候間、

委 薩州様・伊勢鶴殿御懷へも申入候事、

一 御歸國之時分も如申談候、燒酒を大坂迄可成程可有御

上候、就中御歸國候て 上様又御年寄衆へ之御音信も

可爲燒酒候間、大坂方爰元へ早々參候様ニ可被仰遣候

事、

一 琉球之糸舟之儀、先書從其元被仰越候、無何事唐へ罷

居たる由候条、定頃者琉球へ可爲歸帆候、何程糸參候

哉、早々承度候、猶期後音候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十三年

六月廿八日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

川上左近將監◎〔花押〕  
久國〔判〕

山民部少様

鎌出雲守様

三左衛門佑様

下野守様

彈正大弼様

參人々御中

彈正大弼様

久國

下野守様

參

川上將監

伊勢兵部少輔

〔シレス子カ〕  
〳〵七月廿八日之狀、八月五日松山鹿右衛門尉持下候、

930 「光久公御譜中」

爲當年之御祝儀、到鹿兒嶋、具志川就渡楫、預芳墨、殊  
太平布三十疋・蕉布三十端・燒酒五甕送給候、至遠境御懇志

難申謝候、仍御太刀一腰・糸・馬一疋并宇治茶一壺令進  
入候、聊補慶事計候、恐惶謹言、

「寛永十三年」六月廿八日

進献 中山王 薩摩守光久○(花押)〔御判〕

931

「家久公御譜中」  
「正文在島津内膳久兵」

返くやかてかちきへこし候するまゝ、御いて候ハ  
、被爲申候、かしく、

くたり申候てよりハ、御うとく敷候、かちきまでハマ  
いり候へとも、御めにかゝらす候、この比ハ一しほしん  
てんの時分にて候、やかて秋のかせもたち候ハ、空も  
よく候するまゝ、まいり候て申まいらせ候、此ひとへか  
たひらよくも候ハね共、くたし申候まゝ、しんし候、御  
酒ひとつ参候ハ、ほんもうたるへく候、よろつ又とか  
しく、

「朱力キ」  
「寛永十三年」七月十三日

中納言

ちうき  
誰にても  
まいる  
申給へ  
いゑ久

932

「家久公御譜中」  
「正文在佐々木勘右衛門」

一書令啓上候、先以使申上候、六月十八日ニ御國元へ御  
着之由、目出度奉存候、然者兵部少所へ参候書狀ニ、御  
氣色御脈あしき由承候、無心元奉存候、定而被成御養生  
候ハ、可爲御快氣候と存候、誠惶誠恐敬白、

「朱力キ」  
「寛永十三年」  
七月廿日  
薩摩守○(花押)  
光久〔御判〕

進上黄門様

933

「御文庫拾八番箱廿九卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

尚以爰元ニて鎌田源左衛門殿・相良全助殿其外二三  
人被相添問付共候処ニ、大事成儀にて候故、兩人之  
外ハ不存由堅申候、蒲地掃部事同宿にて候故、ちと

存たる儀共候間、小判金五十兩遣候、其外ハ兩人にて分取たる由申候、其金子之拂様共穿鑿候へ者、大形他へハ不渡算用ニ候、然時ハ強問ニも及申間敷哉、乍去宇多と主計、口御引合候て、其上にて御談合尤候、

一書令啓入候、仍坂元織部佐此元隙明候而罷下候、野州老如御存、織部今度之手柄、前後無比類儀共候、御兩殿様も殊外被成御感、一稜御褒美御座候へてハと被成御詫候、先書ニ如申、責而知行百石程も被下候而、尤ニ存候、乍然御身ニ被成御入、御意次第可被仰出哉と存候、就其此元にて主計方へ、今度御藏之金銀盜取候儀、御藏衆も被存候哉と尋させ申候へ共、御藏衆ハ不被存候、宇田六右衛門一人へ談合爲仕由申候、主計事、大廻之舟歸帆之刻差下申候、六右衛門も爲被擲置由候間、兩人へ相言之者共御尋させ被成、御藏衆必定不被存由申候者、如本々之被召直、尤ニ存候、萬一別ニ相言有之儀も御座候覽、乍不申強問などにて、能く御究させ可爲肝要候、猶

期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十三年」  
七月廿二日

川上左近將監◎(花押)  
久國(判)

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌(判)

三原左衛門様

鎌田出雲様

山田民部少様

下野守様

彈正大弼様

參人々御中

▽◎  
彈正大弼様

下野守様

山田民部少様

鎌田出雲守様

三原左衛門様

參

貞昌

伊勢兵部少輔

川上左近將監

「末紙」

八月十八日坂本織部佑持下候、

一織部へ知行可被下由候事、

一別府主計と宇田六右衛門事、



934

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

返く御使まんそく申候事候、かしくなから、御も

しも御心得まいらせ候、く、かしく、

此ほとハこれよりそこ申候すると思給候、この中のと氣

をはつらい、さんくくの事にて候、やうく三日ちとよ

く御さ候、いろくこ、かしこと然くなく候て、おも

ひなから音るん申、うへかたのたうらいもしつかなる事

にて候、七月廿日のたうらい御さ候、めつらしき一色を

くり給候、まんそく申候、よすかにまかせ一ふて申いり

候、めてかしく、

「朱力手」  
「寛永十三年」八月六日

しやうない

中納言  
いゑ久

おふくろ

まいる

935

「家久公御譜中」

「正文在寺山太郎左衛門」

返く上方も別儀なきよし候、

あまりく御ことふきも申候ハて、心之外候ま、御見

まい申候、我等も、のと氣然くともなく候て、やうし

やう申候事候、此たき物我等ちうかう申候ま、送進之

候、この方かハる事御入候ハす候、よろつく此人申候

へく候ま、あなかしくくかしく、

「寛永十三年」

八月廿二日

中納言

御もし

いゑ久

まいる

936

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

其後者久々無音相過候之処、今度我等煩ニ付使被指越、殊願書共被入念候旨、別而爲悦之至候、氣色も于今すき

く共無之候、折角致養生事候之条、近く可致快氣候、從内義も色々懇祈之由、是又祝着之義共候、尚期來喜之時不具候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」九月八日

家久〔花押〕  
〔御判〕

種子嶋左近太夫殿

937

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返く別に爲何事共見え不申候、生りやうはかりにて候、夜前も久しくよりも、心うせ候計の躰候く、かしく、

夕へ申候様に、かちきより先見舞としてこし候て可然候、時分之儀ハ廿日比ハ如何候はん哉、さ様候ハ、先あハち守をめしよせ候て、申聞せ度候、廿日より内にけんさ

も一みち可有之候、下野守へも内談可申候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」九月十二日

家久〔花押〕  
〔島津家久御判〕

〆

〔在包紙〕

たん正との

まいる

家久

938

「雜抄」

引付

高式百六拾式石六升式合三夕壹才

新納加賀殿

右者境目地頭ニ付、替地爲返地大口之内木氏村被爲給候、彼村不足分者大口之内江、相應之地を以相足可有支配者也、

寛永十三年丙子九月十八日

民部少輔印

左衛門佐

出雲守



仁禮右近將監殿

吉利下総守殿  
まいる

下野守印

彈正大弼印

939 「兒玉氏藏」

態一書令啓候、然者伊勢鶴殿御懷、去月御産月ニ而御座

候処、相延候而未無其儀候、御もち越候ほと、御産も輒

御座候由申候間、目出度候、其上御占形も一段能御座候、

御藥者連々爲差上被申候、細々御脈の様子尋申候へハ、

御脈もよく御座候由申候、乍去、前方終ニ無御座、御喉

氣出合、又痔病も指発候、御舌も腫候而、あまた所はれ

申由候、如此御座候ニ付、以之外御痛ニ而候、御食など

ハ參候、御煩も別ニハ無之候、右之様子ニ付、御草臥ニ

ても候哉、御休候而計御座有度心持ニ御入候、物などを

も被仰事もなく御座候と被仰由候、御喉氣・御痔病など

指出候而こそ、四位五郎左衛門へ申候而、時々御藥參候、

五郎左衛門事ハ、産後産前之養生能仕候而、其竟共御座候間、御前様など御産之時分も、御藥參候つる間、御脈など伺せ申候、御脈ハ能候由申候、御煩何も珍敷様子ニ候間、治部卿・三川なともちと申上度由被申候間、飛脚申付候、定巨細ハ從奥方可達貴聞候、御喉氣、先日之比ハ、物など參候へハ、火などを御のみこみ被成候様ニ、

難儀ニ御入候、此比ハそれほとニハ無御座候と相聞得候へ共、于今御痛之由候、御痔も此頃又痛出申候、色々右之様子ニ候間、御祈念など無油断候、先日も愛岩之圓福寺を申請、二夜三日護摩御執行候、又明日方叶法印申入、二夜三日御祈念有之儀候、此等之趣細々被申上尤候、御産候ハ、早々御左右可申上候、恐々謹言、

「寛永十三年丙子」  
十月三日

伊勢兵部少輔  
貞昌判  
川上左近將監  
久國判

兒玉筑後守殿

御宿所

尚々從 黃門様先日兵部少輔江被下候御條書、奥川

十兵衛尉殿其元之御屋敷之氣を見せ申候而、可申上

由被仰聞候、今程ハ遠所へ被罷越留守之儀候間、被

罷歸次第、氣を見せ候而、重而可申上候、是又可被

仰上候、以上、

〔是年十月十八日 公之女嶋津圖書久竹妻、生母崎山八右衛門盛秀女、

貞昭一腹也〕

940 「家久公御譜中」

寛永十三年丙子十月六日、家光公以御鷹之鶴賜家久、

故老中副書傳驛、以到于薩府、因家久拜戴之、依之差比

志島監物義之於江都奉謝之、則召義之於 御前、御口降

丁寧之尊言、事見松平信綱十二月九日之書中矣、

941 「正文在文庫」

昨五日 「云々末ニミユ」

「古御文書三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

昨五日、御鷹野被爲成御とらせ候鶴、被遣之候、委細從

薩「守殿可被仰達候、恐々謹言、

〔朱カキ  
寛永十三年〕

十月六日

阿部豊後守 忠秋〔判〕

松平伊豆守 信綱〔判〕

土井大炊頭 利勝〔判〕

薩摩 中納言殿

人々御中

▽◎

薩摩 中納言殿

人々御中

土井大炊頭

松平伊豆守

阿部豊後守

封

〆

△

942 此鶴羽以下不損之様、從江戸到薩摩國松平大隅守殿迄、

急度可相届者也、

寛永十三年

十月六日

豊後 ○(印)

伊豆 ○(印)

大炊 ○(印)

右宿中

943 「家久公御譜中」

今茲之冬家久有病、故願使典醫下于薩摩療治之、則達

家光公之台聽、十月八日忝賜 御内書、今典醫久志本式

部少輔下于薩州、且副以阿部忠秋、松平信綱、土井利勝

十月九日連署之奉書、因十一月八日式部少輔到于薩府、

療養有日于茲矣、

「朱力キ」十月八日 家光(花押)

薩摩

中納言殿

945 「古御文書三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書致拜見候、隨而 公方様例今程御鷹野御鉄炮被遊ニ被爲成付而、去年も御國之火繩被成御上候故、當年も式百曲御進上候、右之旨達 上聞、火繩遂披露候處、一入御仕合共御坐候、將又御所勞之由承、一段無御心許奉存候、寒天ニも罷成候間、弥無御油断御保養簡要ニ奉存候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

「朱力キ」

十月八日

土井大炊頭 ○(花押)

利勝(判)

松平大隅様

貴報

944 「家久公御譜中ニ在リ」

所勞之由無心許候、就其久志本療治望之由候、則式部少

輔遣之候、能く養生肝要候、謹言、

▽◎ 松平大隅様

貴報

封

利勝

土井大炊頭

△

「家久公御譜中」  
「正文在島津左衛門久道」

薩摩  
中納言殿  
人々御中

阿部豊後守 忠秋◎(花押)  
松平伊豆守 信綱◎(花押)  
土井大炊頭 利勝◎(花押)

「朱カキ」  
「寛永十三年」  
十月九日

「古御文書三拾卷卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
所勞之通達 御耳、一段無御心元被思召候、然者久志本  
藥服用有度候由承候之趣、遂披露候之處、則式部被遣之  
候、養生之儀無油断様ニと、思召以 御内書被仰候、委  
細者、從御同名薩摩守殿、可被相達候之間、不能詳候、  
恐々謹言、

「光久公御譜中」  
光久  
男女二十五人略  
女子  
寛永十三年丙子十月十八日生、崎山盛秀女  
島津図書久竹室  
宝永五年戊子十月廿七日死  
「御子廿七人之内御末子也」

「朱カキ」  
「寛永十三年」  
十月十一日  
松隱岐守 定行◎(花押)  
嶋津彈正殿 御宿所

態令啓候、然者此比中納言殿御口中氣ニ御座候而、御胸  
痛、御食も然々共不罷成候由承候、一段無御心元存候、  
我等儀江戸へ致下向ニ付而、豆州三嶋ニ而御氣色之儀承、  
驚以使者申入候、早速清々と御快氣被成候哉、承度存候、  
委細者此者ニ口上申含候、恐々謹言、

「家久公御譜中」

「正文在川上式部久重」

猶以下屋敷普請最中之由候、涯分被入念可被申付事

肝要候、

我等煩ニ付、色々懇念之義共令祝着候、氣色も次第輕成候様覺え候へ共、喉之内于今殘氣候て、すぎく共不致、分腹殊之外草臥候之間、折角致養生候、如何様可得驗氣候之条、追而様子可申越候、尚期後喜之時候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」十月廿四日

家久〔御判〕

川上左近將監殿

「雜抄」

所勞如何無御心元被思召候、漸及寒氣、其上長々之煩候之間、能々療養肝要之旨御意候、依之爲 上使新庄右近被仰付、御内書并御鷹之鶴被遣候、委曲可被述口上候、恐々謹言、

「寛永十三」

十月廿九日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

酒井讚岐守

忠勝判

土井大炊頭

利勝判

薩

中納言殿

人々御中

「雜抄」

猶以是ハ貴殿迄内乘之、大坂ニ大隅殿舟有之候付而者、右近殿乘被申候様ニ被申越、可然存候、以上、明朝者種々得御意候、仍内々申候、松平大隅殿へ御使之儀、新庄右近方昨夕被仰付、御内書并御鷹之鶴迄被遣候、右近方今朝未明被罷立候、併路次迄緩々と被參候、此由薩守殿へも可被申達候、恐々謹言、

「寛永十三」

霜月朔日

忠勝判

我等煩ニ付典藥業之義申越候処、從御奉行業被達 上聞、

「正文在伊勢兵部貞榮」

「家久公御譜中」

伊勢兵部様

酒井讚岐守

忠勝

「久保公御譜中」

女子

島津豊後守朝久室

天文廿三年甲寅誕生、母北郷左馬助忠孝女、

寛永十三年丙子十一月十一日死去、年八十三、法

號實清正眞

鶴壽丸

母廣瀬氏女實園田清左衛門尉女也、

久保

又一郎

「家久公御譜中」

「正文在島津内膳久兵」

しはし候くかしく、

此くき念佛、ほう州ふくろのためになへ、則心成佛のことハリ、阿弥陀佛のせいくわんあさからさるよし候まゝ、御申候て可然候、誰も別に無御座候、心しつかに御

謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」十月廿六日

家久○花押「御判」

伊勢兵部少輔殿

申候へく候く、かしく

イ

いもし

まいる

いゑ久

「朱カキ」  
寛永十三年十一月

955

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

「從中納言様御使者、殊御國之駒式疋并卷物三端被懸貴意、誠御病中ニ被思召出、忝次第ニ御座候、随而爲御養生久志本式部少輔殿御下、追付可被成御快氣と目出度奉存候、將又從御手前七嶋之鯉節一箱被懸芳意、遠路御懇意之段、過分至極ニ候、猶重而可申述候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」

十一月八日

有馬左衛門佐○(花押)  
直純(判)

嶋津彈正忠殿

御宿所

956

「正文在島津左衛門久道」

尚々寒中之儀ニ御座候条、乍恐御養生專一ニ奉存候、

以上、

任幸便一書致啓上候、其地御無事ニ御座候哉、此表相替儀無御座候、公方様御機嫌能被成御座、節々御鷹野へ被爲成候、随而先日者貴公様御所勞之由承申候、如何無御心許奉存候、自爰元御送者被指遣候条、定而可被得御驗と奉存候、尤節々以書狀可申上之処、遠方故乍存御無沙汰背本意奉存候、此地御留守一段御無事ニ御座候、玆敷儀御座候ハ、川上將監殿迄可得御意候、猶御吉事奉待候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」

十一月十日

高山主水正○(花押)  
盛聰(判)

大隅守様

人々御中

957

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

958

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

其後其許之到來共無之、如何と無心元候処、芝之懷輒繁昌之由、早と注進令満足候、我等氣色之義先札如申候、于今然と共不致本復、喉之中殘氣共候て、散と草臥入候、乍去頃久志本式部少輔殿下着候て、種と藥共被成調合、療治最中候之条、定而次第可得快驗候、猶追と吉左右可申越候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」霜月十三日 家久○花押「御判」

伊勢兵部少輔殿

尚以從御船も先日預御音信、忝存候、以上、  
一書令啓上候、中納言様御氣色弥能御座被成候哉、無御心元存候、定而久志本式部少殿御藥ニ而可爲御快氣と、目出度存知候、中納言様へ以使札可申上候へ共、結句御六ヶ數可被思召と存、各迄用飛札候、將又先日者預御使者、殊駒式疋被下候、御病中被入御念之段、忝奉存候、

959

「正文在島津左衛門久道」

以上

一段見事ニ御座候、何様可致秘藏候、能様ニ被仰上候而可給候、頼存候、猶期後音候、恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」霜月廿日 有馬左衛門佐○花押直純「判」

嶋津彈正忠殿

御宿所

一書令啓上候、中納言様御氣色弥能御座被成候哉、無御心元存候、定而久志本式部少殿御藥ニ而可爲御快氣と、目出度存知候、中納言様へ以使札可申上候へ共、結句御六ヶ數可被思召と存知、貴殿迄用飛札候、將又先日者預御使者、殊駒式疋被下候、誠御病中被入御念候段、忝奉存候、一段見事ニ御座候、何様可致秘藏候、能様ニ被仰上頼存候、猶期後音候、恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」霜月廿日

有馬左衛門佐○花押直純「判」



嶋津下野守殿  
人々御中

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

返くこれよりこそ申候するを、まんぞく申候く、  
かしく、

このほどハこれよりこそうとく敷候、おほしより御音  
しん、うれしく思ひ候へく候、のと氣も然くともなく  
候て、くしもと殿くすりをのミ申候へとも、けんなく候、  
いかさまやかてよく候ハんと存候、たひく御心さしと  
思ひ候へく候、せんとハおふくろこしにて候つれ共、は  
つらいのゆへ心より外候、春ハ御こし候て、あやつりも  
よほし可申候く、又くかしく、

「米カキ」十一月廿二日 中納言

おふくろ  
まいる  
申給へ  
いゑ久

「古御文書三拾壹卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御札致拝見候、就御所勞今度被遣 御内書候儀、忝之旨  
示給候之趣、達 上聞候、弥保養肝要ニ被 思召候、恐  
く謹言、

「米カキ」寛永十三年  
十一月廿二日

土井大炊頭  
利勝（元花押）

薩摩

中納言殿

御報

▽◎

薩摩

中納言殿

御報

土井大炊頭

〆

封

△

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

鷹御挑前ニ御見廻衆

兩度御見廻

松平河内守殿

右同 伊勢兵庫頭殿

右同 木下左近殿

一度御見廻 水野藤右衛門殿

御振舞之日御勝手迄も御見廻ニて候、

鈴木喜左衛門殿

一度御見廻 長生院

度々御見廻 嶋津但馬守殿

御振舞之日御勝手迄も御見廻ニて候、

神尾備前守殿

右之通ニ候間、其元方以御狀御礼被仰入可然奉存候、

以上、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕霜月廿三日

〔包紙ニ在リ〕



山田民部少輔

伊勢兵部少輔

彈正大弼様

下野守様

川因幡守様  
參

963

〔家久公御譜中〕

〔正文在佐々木勘右衛門〕

從彈正大弼・下野守去月十二日之飛札、同晦日到來候、  
然者久志本式部少輔殿其許へ去月八日下着之由候、定細  
と御脈共被爲取、可爲御養生候間、頓而可爲御快氣与奉  
察候、久志本殿下着之由、大炊頭殿迄申入候、此中 公  
方様も早と 聞召度之由、節々爲被仰出由、從大炊頭殿  
被仰候、御脈躰などの様者未相知候条、不申達候、有馬  
次右衛門尉參之由候間、定彼參候時分委敷可相知与奉存  
候、尚奉期後音候、誠惶誠恐敬白、

十二月二日

松平薩摩守 ○(花梅)  
光久〔御判〕

進上

黄門様

964 「正文在佐々木勘右衛門」

追而申上候、豊州之懷御遠行之由、御老後与者乍申、御殘多可 思召候、就其吾等儀も大炊頭殿へ内意申入、朔日にも不致出仕候、公方様御前之儀、ケ様成忌一段深御沙汰有之由候間、則火を忌申事候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」  
「寛永十三年」

十二月二日

松平薩摩守 ○(花押)  
光久〔御判〕

進上

黄門様

965 「正文在島津左衛門久道」

尚々久志本殿へ以書狀申入候間、御届候而可給候、  
以上、

態申入候、其後大隅守殿御氣色如何候哉、承度候、御煩之様子從各可示預候、此菊池苦海茸當國之物にて候間、令進入候、可預御心得候、必々大隅殿方御狀など不被下様ニと存候条、各可有其御心得候、次先日ハ肥後島出來

付、御使者被下候、御病中ニ被懸御心、別過分存候、是

又御心得頼申候、尚期後首候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」

十二月三日

嶋津彈正殿

嶋津下野守殿

御宿所

細越中  
○(花押)  
忠利〔判〕

966 「兒玉氏家藏」

謹而呈愚翰候、黄門様御不例之由承候處、此頃被爲成御快氣之旨、玆重多幸何事加之歟、雖其恐憚多候、以御

次宜預御披露候、恐惶謹言、

「疑寛永十三年」

十二月二日

朝貞

御老中衆

967 「全」

受取

「后島津市正忠廣」  
一寶寿院様御衣裳とシテ奥しゆ才壹端、

一千鶴様御衣裳とシテひりんす壹端、

一万寿様御衣裳とシテひちりめん壹端、

合三端慥受取候而、加治木奥方江上申候、爲後日墨付

如斯ニ候、以上、

〔寛永十三年〕  
十二月七日

有川淡路守 (花押)

児玉筑後守殿

参

968

「古御文書三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆令啓達候、然者久志本式部其元参着、七日八日之分  
藥進候へ共、御同篇候之間、今少藥ニても進、然と無之  
候ハ、療治御かへ候様ニいたし、式部ハ可罷上かと爰  
元へ言上候、右之通達 上聞候処ニ、所労同篇之義、一  
段無御心元被思召候、久志本逗留候義者、大隅達而望候  
ハ、心次第滞留可仕候旨被仰出候間、可被成其御心得  
候、猶追々御吉事待入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十三年〕

十二月九日

阿部豊後守 (花押)

忠秋 (判)

松平伊豆守 (花押)

信綱 (判)

酒井讚岐守 (花押)

忠勝 (判)

土井大炊頭 (花押)

利勝 (判)

薩

中納言殿

人々御中

▽◎

薩摩

中納言殿

土井大炊頭

酒井讚岐守

△

969

「古御文書三拾貳卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

幸便之間一筆致啓上候、然者久志本式部致参着、藥御服  
用候得共、御同篇之様ニ久志本式部所方承候、一段無御

心許奉存候、公方様切と被成御尋、不大形御機遣被思  
食候、寒ニも向候間、弥無御油断御保養簡要奉存候、追  
と御吉事奉待候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十三年

十二月九日

土井大炊頭  
利勝判〔花押〕

松平大隅守様

人々御中

▽

松平大隅守様

貴報

利勝

土井大炊頭

封

△

970

〔古御文書三拾卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

一筆致啓上候、然者御鷹之鶴拝領被成候付而、各迄比志  
嶋監物方を以御礼被仰上候、則大炊頭被立調字御耳候處、御  
前江被召出、遠路被入御念候段御機嫌御座候、殊貴殿所  
勞無御心元被思召之旨、御直ニ被仰含候、將又砂糖五拾  
斤入二桶被懸御意、誠以每度御懇情之段、過分忝奉存候、

猶奉期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十三年

極月九日

松平伊豆守  
信綱判〔花押〕

大隅守様

人々御中

971

〔古御文書三拾卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

尊書致拝見候、如仰私儀今度御暇被下、在國仕候儀被爲  
間、彼地へ爲御見廻御使礼、殊焼酒一壺并御國之赤貝之  
成物一壺被送下候、拙者儀先月中旬國元罷立、去晦日ニ  
參府仕候故、御使當御地迄被罷下候、誠遠路之処御懇情  
之至忝奉存候、然者貴様頃御氣分惡御座候付而、醫者之  
儀薩摩守殿迄被仰越候通、土井大炊頭被達御耳、則久志  
本式部方被遣、其上御内書被成下候之儀、忝被思食之由  
尤奉存候、就中御鷹之鶴御拝領、重畳恐悅不殘思召之由  
奉存其旨候、將又御氣色いまた耽共無御座之由、一段無  
御心元存候、寒天之時分ニ候間、折角御養生肝要奉存候、  
猶期來慶之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十三年」

十二月九日

酒井讚岐守

◎忠勝(花押)  
判

松平大隅守様

貴報

972

「古御文書三拾式卷中」  
「御譜中ニナシ」  
(張紙)

今度御鷹之鬮拝領被成、忝被思召ニ付、御使者被差越之旨令得其意候、隨而爲御音信白砂糠五拾斤入二桶被懸御意候、誠遠路寄思召、別而忝奉存候、猶重而可得御意候間、不能詳候、恐惶謹言、

極月九日

堀田加賀守  
◎(花押)  
正盛(判)

松平大隅守様

人々御中

973

「家久公御譜中」

「正文在佐々木勘右衛門」

已上

鶴御拝領之爲御礼、比志嶋監物へ御使被仰付、此方仕合

能致 御目見得目出度候、然者頃者弥御草臥増申之由承、

氣遣千萬ニ奉存候、久志本殿能時分被參候条、御心静ニ

於御養生者、次第ニ可爲御快氣候、仍御藥も致相應御本

腹候様ニ与存、將又致御立願候、御願文進上候間、可被

成御頂戴候、頓而御願致結願、御札等重而進上可申候、

次者一段見事之御腰物被下候、誠々毎々之儀別而辱奉存

候、尚委細者後便ニ可申上候条、不能詳候、誠惶誠恐敬

白、

「朱力キ」  
「寛永十三年」

十二月十一日

松平薩摩守 ○(花押)  
光久(御判)

進上

黄門様

974

「雜抄」

覚

先年加藤主計頭隣國を催水俣迄打入、出水被取懸申候時分、惟新様爲 御意、本田六右衛門尉を以被仰付候者、水俣城江忍「本ノマ、」入土を取候而可參之由承候之間、取り罷歸り

則差上申候、其後爲御意被仰聞せ候、主計頭引陣候者、

此節之爲忠節、知行百石可被下之御約束候、然處本田六

右衛門尉殿御仕合悪敷候而、左様之首尾無之候、知行可

被下と證跡野村美作守殿にて候、于今失念被申間敷与存

候、土取申候案内者、村田六左衛門尉・久米六左衛門尉

ニ而候、無餘儀辛勞申たる由申上候得者、則彼兩人江者

六左衛門尉殿を御褒美被成候、拙者事者知行百石御約束

之御意候而、其節者免角之儀無御座候、先年之有筋御仕

申上候、可然様ニ奉頼候、以上、

寛永十三年十二月十一日 細谷田九左衛門尉判

新納加賀守殿

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

歳暮之祝義爲可申越、税所但馬守遣之候間、一書令申候、

先以其地皆く無事之由、節に相聞満足之至候、我等所勞

之義も于今無相替儀候、久志本式部少輔殿藥令服用、折

角致養生事ニ候、次第ニ藥も可致相當様覚候間、如何様

可得驗氣候、追而委曲可申越候、仍古銅之花入并巻物一

端其方へ進之候、内義へも緋沙綾一、白ちりめん一、祝

義之驗迄候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」極月十二日

伊勢兵部少輔殿

家久〔花押〕  
〔御判〕

976

「古御文書三拾式卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚く御煩も少つ、よく御さ候よし、式部殿を〔之御狀カ〕

御さ候キ、目出度存候く、以上、

追而之御狀拜見仕候、紀伊國大納言殿二番目之御息修理

大夫殿御他界之儀ニ付而、使者ニ而可然候、又飛脚ニ而

茂可進候哉、我等同前可被成由、得其意存候、いかにも

軽使者を御宿老中迄可進候、御香典など我等者不及候、

國中へ罷出御報延引仕候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」  
十二月十三日

細川越中守  
忠利〔判〕

「家久公御譜中」  
「正文在島津市之助忠規」

松大隅様  
御報

「家久公御譜中」  
「正文在島津左衛門久道」

追而是式候へ共、漆一貫目入式桶進覽之候、書音之  
驗迄ニ御座候、以上、

一筆令啓達候、然者大隅守様御在國候處ニ、餘御物遠ニ  
罷過候間、爲御見舞喜平次令進上候、其許万端可然様ニ  
御取成所希候、猶喜平次可得御意候条、不能具候、恐惶  
謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」  
十二月十四日

嶋津彈正様  
人々御中

相良左兵衛佐○(花押)  
長毎〔判〕

返と花入も忘申候まま進之候也、

此茶はん昨日忘申候間、只今進之候、然くとも無之候  
へとも、先御らんしまいらせ候、其元へむめの花御座候  
ハ、可給候、恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」十二月廿一日

家久○(花押)  
御判  
中納言

「在口裏」  
寶寿院との  
まいる

家久

「雜抄」  
覺

高九斗五升八合三夕三才

重久佐左衛門尉殿

右者、川内新田村之内鬮取ニて被仰候得共、江川久右衛  
門尉殿居屋敷ニ而候故、御住被申上、弥右衛門尉殿高之  
内ニ被給、二重ニ罷成候、寛永十二年と不足被仕候間、  
此度可有御支配候、已上、

寛永十三年十二月廿一日



土井大炊頭  
◎(花押)  
利勝(判)

山田民部少輔印  
新納加賀守印

吉利下総守殿

仁禮右近將監殿

まいる

薩摩  
中納言殿  
人々御中

薩摩

中納言殿

人々御中

土井大炊頭  
酒井讚岐守

封

980

「古御文書三拾式卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

一筆申入候、所勞之様子一段無御心元被思召候、寒氣之節候間、能く保養肝要之旨 上意候、將又於爰元御同名薩尸守被申上候者、久志本式部事暫抑留有度之由ニ付而、其趣達上聞候之處、弥令逗留可致養生之旨被仰出候、則其段式部所へ申越候、可有其御心得候、恐く謹言、

981

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

返く一たんのとしの暮と、其元同前たるへく候

く、かしく、

せいほのゆわひとして小袖しんし候、たうねんハめつらしきとしをこし申候で、まんそく申候、春ハやがて御こし候へ、あやつりを申度候、此たき物おりふしあハせ申候ま、しんし候、たひくの御使ともまんそく申候、猶

「朱カキ」  
「寛永十三年」  
十二月廿七日

阿部豊後守  
◎(花押)  
忠秋(判)

松平伊豆守  
◎(花押)  
信綱(判)

酒井讚岐守  
◎(花押)  
忠勝(判)

又とめて度くかしく、

「朱カキ」  
「寛永十三年」十二月廿八日

中納言

おふくろ

まいる

いゑ久

982  
「正文在文庫」

猶と五十日餘藥進之候間、我等も随分工夫仕候へ共、  
遮而御快氣無之故、如此申事ニ御座候、以上、

一筆令啓達候、仍而大隅守様御氣色之儀、先日時分者御  
脉も御病症も能相見へ候故、一段之儀与目出度奉存候處、  
去廿四日夕、又御脉も御氣色も滞申候、我等儀早五十日  
余藥をも進上仕候、然共急度御快氣無之處ニ不相替候、  
藥之進候、各御心中も如何、其上か様之貴人へ以 上意  
罷下候付、すきくと相當も無之、藥ヲ緩くと進之候と、  
自然達 上聞候へハ、我等も迷惑仕候間、私藥之儀者、  
今日迄ニ被爲指置、正月四日五日比ニハ爰元罷立候様ニ  
被成可被下候、不及申候へ共、大隅守様御心ニ障不申候  
様ニ、御次而を以被仰上可給候、常々御目被下候御家之

義御座候故、只今迄者達而御理をも不申入候、若御草臥

なとも増候て、藥被替候へハ、還而如何ニ候間、只今少

御機嫌も能候、時分御養生之処、余仁江被仰付候而者、

又藥之分別も可有かと存候て申入候、猶期後音之時候条、

不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十三年」

極月廿九日

久志本式部少輔

（常侍）  
（花押）

鳴津下野守様

鳴津彈正様

人々御中

鳴津下野守様

久志本式部少輔

鳴津彈正様

まいる

家久公 寛永十三年

後編 舊記雜錄 卷九十

後迫

下屋敷五畝拾五分

浮所 圓心坊下屋敷

新字 中屋敷五畝六分

添田与二郎殿 段八畝

右同 下屋敷四畝六分

御中間大迫四兵衛殿 慶幾

右同 中屋敷四畝廿七分

浮所

中屋敷五畝拾五分

守梅

下屋敷八畝廿分

黒葛原千兵衛殿

下屋敷五畝六分

宇宿治部左衛門殿跡

下屋敷五畝十八分

鎌田出雲守 桐野益右衛門殿 下屋敷

下屋敷四畝

澁谷如兵衛殿

下屋敷八畝二分

税所李之丞殿

中屋敷六畝十六分

関九郎左衛門殿

田尻嘉兵衛

岩元清左衛門

新字 下屋敷壹反六畝廿一分

劍次郎殿 有川助兵衛殿

寛永拾三年子

上

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

右同  
下屋敷五畝二分

長崎勘兵衛殿

下々屋敷二畝十二分

山田弥兵衛殿

右同  
下屋敷六畝十八分

大山豊前兵衛殿  
木原七郎三郎殿

下々屋敷三畝六分

右同人  
次喜左衛門殿  
枝喜左衛門殿

下屋敷八畝三分

宮原囚獄佐殿

下々屋敷三畝六分

右同人

新竿  
中屋敷八畝

市左衛門殿  
渡辺五郎左衛門殿

下々屋敷二畝

右同人

新竿  
中屋敷四畝十五分

浮所  
肥後志广丞殿

下々屋敷廿四分

右同人

右同  
上屋敷五畝六分

御小者肥後大左衛門殿

下々屋敷二反三畝廿六分

枝次彦左衛門殿

新竿  
屋敷四畝廿四分

「本ノマハ」  
渡邊六左衛門殿後わき浮所

下々屋敷壹畝廿七分

春成勘解由左衛門殿

新竿  
中屋敷六畝七分

不笠彦左衛門殿

下々屋敷二畝廿分

右同人

右同  
下屋敷三畝十八分

浮所

下々屋敷四畝八分

右同人

下々屋敷貳畝

山田弥兵衛殿

下々屋敷三畝廿二分

右同人

新竿  
上屋敷四畝廿四分

浮所  
大迫種兵衛殿

中屋敷九畝拾八分

井尻和泉守殿

下々屋敷二畝十二分

山田弥兵衛殿

下々屋敷五畝三分

井尻勝左衛門殿  
伊東新介殿

下々屋敷十八分

座主屋敷ニ成ル

右同人

中屋敷五畝十分

石切

与右衛門

下々屋敷廿分

右同人

新竿

海江田次左衛門殿

下ノ屋敷五畝拾分

中屋敷六畝拾八分

新卒

上屋敷七畝十一分

右同

中屋敷七畝六分

右同  
下ノ屋敷三畝六分

中屋敷六畝十二分

中屋敷八畝

揚有略ス

清水

上屋敷一反壹畝

上屋敷一反十九分

新卒

中屋敷七畝廿八分

右同

中屋敷四せ十六分

下屋敷六畝四分

中屋敷六畝十二分

中屋敷二段六畝

石塚五郎左衛門殿

根占少吉殿

中馬五郎兵衛殿

肥後因幡守殿

安藤藏右衛門殿

石塚目出左衛門殿

黒木主税介殿

塚田表右衛門殿

宅万与左衛門殿

松田監介殿

中嶋孫左衛門殿

森乘左衛門殿

折田權五左衛門殿

松田七左衛門殿

彦四郎殿  
河田助四郎殿

上屋敷九畝十五分

上屋敷一反三畝廿八分

上屋敷七畝六分

上屋敷七畝廿八分

上屋敷九畝十分

中屋敷七畝十四分

中屋敷一反三畝九分

中屋敷一反四畝十七分

中屋敷五畝十二分

下ノ屋敷三畝十分

下屋敷九せ式分

下屋敷六畝廿七分

中屋敷(七カ)畝六分

上屋敷七畝十四分

伊地知吉右衛門殿

有川喜左衛門殿

鮫嶋与一兵衛殿

藤井九郎右衛門殿

平田二兵衛殿

井尻覚兵衛殿

長次郎殿  
大嶋久左衛門殿

町田勘解由次官殿

長左衛門殿  
肥後長二郎殿

同人

松本孫右衛門殿

江田市右衛門殿  
中村志广丞殿

右京亮殿  
本田源四郎殿

春山權之介殿跡

左京亮殿

上屋敷七畝六分

新竿

上屋敷八畝

新竿

上屋敷四畝

上屋敷六畝十二分

新竿

上屋敷七畝十一分

右同

上屋敷四畝十分

中屋敷七畝

上屋敷五畝十二分

新竿

中屋敷五畝

右同

中屋敷四畝廿分

中屋敷七畝

中屋敷六畝十分

上屋敷七畝十分

上屋敷六分

川上彦四郎殿

河村半左衛門殿

折田兵左衛門殿

坂本孫左衛門殿

新納四郎三郎殿

中村七右衛門殿

廻九郎兵衛殿

井尻左近兵衛殿

平野休兵衛殿

順仙

市後崎長右衛門殿

湯田淡路守殿

川の治部左衛門殿

岩切縫助殿

別府金右衛門殿

千左衛門殿

中屋敷八畝

下屋敷六畝十二分

下屋敷四畝十五分

下屋敷五畝十分

下屋敷三畝九分

上屋敷八畝

中屋敷七畝十四分

中屋敷八畝十二分

上屋敷五畝十八分

上屋敷四畝

中屋敷三畝十分

中屋敷三畝十分

上屋敷四畝八分

下屋敷四畝廿四分

中屋敷五畝四分

嘉兵衛殿  
東郷和泉守殿

茂左衛門殿  
田中四郎兵衛殿

高野勤左衛門殿

市来惣兵衛殿

木佐貫四郎右衛門殿

村田藤左衛門殿

江田源介殿

川上彦十郎殿

藤内左衛門殿  
調所内記殿

別府主水佐殿

井尻藤七左衛門殿

伊東伊兵衛殿

肥後弥右衛門殿

阿多源左衛門殿

宮之原内藏助殿

中屋敷六畝十六分

横山仲兵衛殿

中屋敷七畝十四分

川嶋新左衛門殿

上屋敷六畝廿四分

丸尾隼人佐殿

中屋敷九畝十分

川上後藤兵衛殿

中屋敷四せ廿三分

萩原九郎右衛門殿

中屋敷一反一畝六分

伊集院長右衛門殿

上屋敷四畝十六分

田上利兵衛殿

下屋敷六畝

土橋六衛門殿

下屋敷五畝

有田大炊左衛門殿

中屋敷七畝十分

竹迫大藏丞殿

下屋敷一反五畝廿六分

川上彦左衛門殿

中屋敷四畝廿分

日高喜兵衛殿

下屋敷五畝十五分

西之原利左衛門殿

中屋敷一反一せ六分

本田治部左衛門殿

下屋敷四畝廿分

立石基介殿

下屋敷四畝

伊十院清右衛門殿

下屋敷三畝六分

伊十院加左衛門殿

下屋敷四畝八分

貴嶋源兵衛殿

下屋敷一反三畝廿六分

黒葛原吉左衛門殿

下屋敷五畝十分

東之坊

下屋敷五畝四分

西之原強右衛門殿

下屋敷三畝六分

川邊次郎介殿

下屋敷九畝二分

宮原宇兵衛殿

下屋敷九畝九分

川崎主計助殿

下屋敷三畝九分

別府種左衛門殿

中屋敷五畝十分

川野又右衛門殿

揚有略ス

中屋敷五畝十分

山口甚九郎殿

新堀方上

中屋敷六畝廿分

奥山藤太夫殿

新卒  
中屋敷一反五畝十二分

森喜右衛門殿

上屋敷五畝四分

田代助左衛門殿

下屋敷七畝十一分

主馬允殿  
向井弥右衛門殿

中屋敷四畝廿四分

相良堅介殿  
紹泉

下屋敷四畝六分

貴嶋内記殿

下屋敷三畝六分

宅万樂右衛門殿跡

新卒  
中屋敷五畝十九分

竹崎四郎左衛門殿

下屋敷六畝

川越三右衛門殿

新卒  
中屋敷三畝廿分

南光院

下屋敷七畝廿分

川野伊右衛門殿

下屋敷五畝十分

大山善右衛門殿

下屋敷六畝廿八分

坂本与左衛門殿

新卒  
下屋敷五畝

川野治十郎殿

下屋敷二畝十二分

坂本喜右衛門殿  
同兵左衛門殿

右同  
下屋敷九畝

邊見流右衛門殿

下屋敷三畝

山田慶兵衛殿

右同  
下屋敷五畝十五分

萩野伴右衛門殿

下屋敷二畝廿分

別府助右衛門殿

中屋敷五畝十分

阿蘇主殿助殿  
皿郎善介殿

上屋敷九畝

中江主水佐殿

中屋敷四畝廿四分

竹内伊左衛門殿

上屋敷一段五畝廿五分

大田四郎三郎殿

下屋敷四畝廿分

宮内喜右衛門殿跡

上屋敷一段十二分

相良舍人佐殿

上屋敷一反

重久佐左衛門殿

上屋敷二段五畝六分

作左衛門殿  
本田又次郎殿

下屋敷四畝六分

岩切仲左衛門殿

上屋敷一段五畝廿六分

伊東九左衛門殿

上屋敷六畝

西主馬允殿

上屋敷二段九畝十四分

中務少輔殿  
北村越中守殿



上屋敷一段七畝十五分

山口内藏助殿

下屋敷一段四畝

市来惣左衛門殿

上屋敷一段廿分

鎌田權右衛門殿跡

中屋敷一段二畝四分

深野主膳正殿

「張紙にて」

上屋敷五畦十八分

川上主膳正殿

中屋敷一段一畝廿分

伊東孫左衛門殿  
井尻利左衛門殿

内

上屋敷五畦十八分

鎌田權右衛門殿跡

上屋敷一段五畝廿六分

小兵衛殿  
税所弥右衛門殿

中屋敷一段五畝

新納四郎左衛門殿  
二右衛門殿

上屋敷八畝

伊集院五郎左衛門殿

中屋敷四畝六分

福嶋備前守殿  
川上五次右衛門殿  
下屋敷

上屋敷二反四畝八分

東郷若狭守殿

下屋敷六畝廿四分

川上早右衛門殿  
半兵衛殿

「張紙にて」

内一反六せ廿三分

東郷若狭守殿

中屋敷五畝十八分

日高大左衛門殿

七畝十五分

関權左衛門殿但買地

中屋敷四畝八分

御小者  
長田作右衛門殿

七畝

川上織部佐殿

中屋敷四畝

池元金兵衛殿

寛永七四月朔日

上屋敷一段二せ四分

町田休右衛門殿

下屋敷一段廿四分

伊地知壹岐守殿跡

上屋敷八畝廿分

伊地知大炊左衛門殿

中屋敷一段三畝

千吉殿  
鈴木權兵衛殿

上屋敷一段三畝六分

田原主殿助殿

中屋敷一段四畝廿八分

遠矢金兵衛殿

中屋敷一段六分

弁官新兵衛殿

下屋敷三畝廿分

市来与次郎殿

屋敷八畝十二分

米良縫助殿

下屋敷三畝十八分

山本十郎右衛門殿

中屋敷一段二畝

四郎兵衛殿  
児玉筑後守殿

中屋敷四畝

児玉主水佐殿

下屋敷三畝廿二分

寶珠院  
座頭当代

中屋敷四畝六分

飯牟礼弥左衛門殿

中屋敷二畝十分

竹内慶右衛門殿

下屋敷一畝六分

永長永与  
座頭屋しき

中屋敷七畝六分

山口平兵衛殿

下屋敷三畝廿二分

石塚權兵衛殿

中屋敷三畝廿二分

高崎正左衛門殿

中屋敷四畝八分

鎌田弥右衛門殿

中屋敷五畝二分

堅介殿  
木之上和泉守殿

中屋敷一反二畝廿分

肝付甚右衛門殿

下屋敷四畝

清左衛門殿  
田口勝吉殿

下屋敷三畝六分

市存坊

新卒  
中屋敷一反五畦十分

連光坊跡

下屋敷四畝廿分

分之介殿  
有田与左衛門殿

下屋敷六畝

里村乘左衛門殿

下屋敷五畝十分

道敬  
本田新右衛門殿

下屋敷六畦十二分

谷山覚左衛門殿

下屋敷七畝六分

藤崎喜右衛門殿

下屋敷一反二せ十二分

沖長門守殿

下屋敷五畝十八分

蘭牟田主殿助殿

上屋敷七畝十六分

長井休右衛門殿

上屋敷六畝

覚右衛門殿  
津曲内膳正殿

上屋敷六畝廿分

伊地知清左衛門殿

上屋敷三畝廿分

千右衛門殿  
伊東利左衛門殿

下屋敷三畝十分	次左衛門殿	上屋敷二段八分	大休坊
下屋敷五畦十八分	税所三兵衛殿	上屋敷七畝十分	平兵衛殿
上屋敷六畝廿八分	山下神藏殿	上屋敷二反四畝八分	市来長左衛門殿
上屋敷七畝十四分	落合八郎右衛門殿	上屋敷一反四畝十分	新納四郎殿
上屋敷一反三畝廿二分	宮里老岐守殿	中屋敷九畝十分	德永源兵衛殿
上屋敷六畝廿分	中村石見守殿	中屋敷四畝廿七分	丸田伊豆守殿
上屋敷七畝六分	山口早左衛門殿	中屋敷六畝	岩城七兵衛殿
上屋敷七畝六分	鎌田宇兵衛殿	中屋敷一反三畝六分	松田与右衛門殿
上屋敷七畝十分	鈴木宇左衛門殿跡	上屋敷一反一畝六分	相模守殿下屋敷
上屋敷四畝十二分	酒匂惣兵衛殿	上屋敷一反二畝廿分	後醍院喜兵衛殿
上屋敷五畦十分	猪俣小左衛門殿	上屋敷一反四畝廿分	安右衛門殿
上屋敷五畦十分	中村久兵衛殿	上屋敷九畝十八分	右松加兵衛殿
上屋敷二畝廿八分	新右衛門殿	上屋敷九畝十分	土持平左衛門殿
中屋敷二畝廿八分	木田李之介殿	上屋敷一段十二分	土持伴三郎殿
右同	新穂藤吉殿	上屋敷一段四畝廿分	村岡鹿右衛門殿
中屋敷四畝	宮里与兵衛殿		市来五兵衛殿
			西俣弥太郎殿

上屋敷一段四畝

龜山又兵衛殿

中屋敷四畝六分

永田藤左衛門殿

中屋敷七畝十八分

白坂市郎兵衛殿  
以益

中屋敷五畝四分

新納三河守殿

上屋敷一反三畝六分

二階堂城之介殿  
阿波守殿

中屋敷七畝六分

浦川金左衛門殿  
内藏丞殿

中屋敷二反四畝六分

右馬頭殿假屋地

中屋敷一反一畝十二分

瑞仙

下屋敷九畝十八分

野村織部佐殿  
吉五殿

中屋敷八畝

自休

中屋敷八畝

杉山右京亮殿

新卒  
中屋敷一反五畝

國分帶刀長殿  
伊十院備後守殿

右同  
中屋敷六畝

筑右衛門殿  
伊知地平三郎殿

下屋敷三畝

長命新九郎殿  
(有之)

下屋敷六畝十五分

石原佐渡守殿

下屋敷五畝

三雲權之介殿  
鹿野三五郎殿

中屋敷一反六分

貴嶋仲兵衛殿

下屋敷四畝廿四分

加藤金右衛門殿

上屋敷二反

野村兵部少輔殿

中屋敷一反一畝一分

谷山九兵衛殿

中屋敷六畝十八分

有馬次左衛門殿跡

上屋敷二反六畝

惣右衛門殿  
高崎伊豆守殿

下屋敷一段二畝四分

寺山四郎左衛門殿

中屋敷二反三畝十四分

新納右衛門佐殿

中屋敷四畝六分

作右衛門殿  
休左衛門殿  
かさりや

中屋敷六畝

野田喜兵衛殿

中屋敷七畝十一分

六弥太殿  
鳥丸長右衛門殿

中屋敷三畝十五分

有川伊豆守殿

中屋敷三畝十五分

石原長左衛門殿

中屋敷四畝十二分

三原舍人佐殿

下屋敷七畝十分

池上源六左衛門殿

中屋敷六畝

村田源介殿

下屋敷一段八分

中村作左衛門殿

中屋敷二畝廿四分

蒲地四左衛門殿

下屋敷三畝六分

岩崎主殿助殿

中屋敷四畝十二分

榊主馬首殿

上屋敷二畝廿分

大圓坊  
上野吉左衛門殿

中屋敷三畝六分

毛利与一兵衛殿

上屋敷一段九畝四分

山田主殿助殿

下屋敷四畝

田中志广丞殿

中屋敷一反二畝

猪俣伊右衛門殿

中屋敷六畝廿分

田中八兵衛殿

中屋敷一反六畝

壹岐主水佐殿

中屋敷四畝

長崎次右衛門殿  
別木伴兵衛殿

中屋敷四反廿分

源介殿  
伊十院松千代殿

上屋敷五畝三分

鳥丸主膳正殿

中屋敷二反三畝廿五分

田原主膳正殿

中屋敷一段四畝十分

平田九郎右衛門殿

中屋敷一反七畝廿二分

伊地知四郎兵衛殿

八畝十四分

壹岐源左衛門殿

中屋敷九畝廿九分

柳元喜左衛門殿

五畝廿八分

山之城新介殿

上屋敷三反八畝廿二分

鎌田出雲守殿

下屋敷四畝六分

次郎兵衛殿  
次郎仲左衛門殿

中屋敷一反四畝

上井采女正殿

下屋敷五畝

善俊  
山内勘兵衛殿

下屋敷二畝十六分

喜庵

下屋敷六畝廿九分

永田四郎右衛門殿

中屋敷六畝十分

菱刈縫殿介殿

中屋敷七畝十四分

神戸平右衛門殿

下屋敷八畝十五分

肥後永右衛門殿

中屋敷五畝十八分

染河奎左衛門殿

下屋敷四畝八分

二渡与右衛門殿

中屋敷一段八分

同名伊与守殿

下屋敷六畝十二分

小佐七左衛門殿

下屋敷二畝廿四分

甚兵衛殿  
洲村源吉殿

下屋敷五畝十八分

ゑや彰右衛門

新卒中屋敷一反六畝十五分

市来新左衛門殿

下屋敷四畝廿分

武松權右衛門殿

内七畝

和田平右衛門殿

新卒下屋敷八畝十五分

星山仲次郎殿

下屋敷三畝六分

岩切与一兵衛殿

下屋敷一反四畝

同人

下屋敷九畝十分

長崎助左衛門殿

下屋敷三畝十四分

六左衛門尉  
寺師孫右衛門殿

下屋敷四畝七分

川崎龍之介殿  
大乘坊

新卒下屋敷四畝

村岡城之介殿

中屋敷三畝廿七分

坂本吉左衛門殿

新卒下屋敷四畝廿四分

相良對馬守殿

下屋敷四畝十五分

長崎佐渡守殿

中屋敷一反六畝四分

伊地知少次郎殿

下屋敷四畝十六分

溝口太兵衛殿

中屋敷五畝十八分

木村源右衛門殿

下屋敷五畝六分

塩津市右衛門殿

中屋敷一反八分

伊地知三河守殿  
献右衛門殿

下屋敷四畝廿七分

上村孫三郎殿  
壽宅

中屋敷一反二畝八分

野添對馬守殿

下屋敷四畝八分

谷山嘉兵衛殿

中屋敷六畝十二分

御小者  
大山真藏殿

(諸カ)  
介な子

中屋敷四畝  
孫左衛門殿  
川北猪之介殿

中屋敷五畝廿分

紙ひき  
藤右衛門尉

下屋敷三畝十分  
下屋敷一段十分

田中市左衛門殿  
弁官

下屋敷五畝

橋口次右衛門殿  
五代平右衛門殿

新竿  
下屋敷八畝廿四分

立野  
夫屋

下屋敷五畝

下屋敷五畝

御小者

大山宇右衛門殿  
主計助殿

中屋敷四畝

瀨戸山佐吉殿

新竿  
下屋敷三畝廿七分

長尾  
浮所

中屋敷六畝廿分

火多宮内左衛門殿  
与左衛門殿

中屋敷四畝十分

蘭田善兵衛殿  
蘭田佐渡守殿

中屋敷五畝四分

徳田大兵衛殿  
吉井郷右衛門殿

中屋敷四畝十五分

運八殿  
二階堂利右衛門殿

新竿  
中屋敷一反二畝

「本マ」  
碗介

下屋敷五畝廿六分

いち、越後守殿  
重信弥右衛門殿

右同  
中屋敷五畝十分

右同な子善兵衛尉  
つほやき  
大山長左衛門殿

下屋敷三畝六分

肥後十兵衛殿  
市来助左衛門殿

中屋敷三畝廿二分

喜右衛門殿  
大迫万左衛門殿

下屋敷四畝廿分

奈良原大右衛門殿  
二見大煩兵衛殿

下屋敷五畝十分

岩切監右衛門殿  
弥左衛門殿

下屋敷五畝十五分

丸田惣左衛門殿

下屋敷一反二畝八分

肥後格右衛門殿

市兵衛殿

隼人佐殿

下屋敷五畝十分

有馬孫右衛門殿

下屋敷一反四分

肥後主膳正殿

新竿  
下屋敷二畝十分

自慶

下屋敷六畝十二分

宇都長兵衛殿

下屋敷六畝廿八分

安藤仲左衛門殿

下屋敷六畝十二分

久留伴五左衛門殿

下屋敷八畝

愛甲次兵衛殿

下屋敷一反一哇六分

川上与左衛門殿

下屋敷五畝廿六分

岡村次右衛門殿

新竿  
中屋敷一反

大野舍人佐殿

下屋敷八畝廿分

慶阿弥

右同  
下屋敷六畝

有馬六左衛門殿

下屋敷九畝十五分

安藤次郎右衛門殿  
左近將殿

右同  
下屋敷五畝四分

有川二閑  
新右衛門殿

下屋敷一反

宮原五兵衛殿  
主計助殿

右同  
下屋敷三畝廿七分

御小者  
有馬算左衛門殿

下屋敷八畝十六分

為善清

右同  
中屋敷四畝十六分

御小者  
吉井市左衛門殿  
為右衛門殿

下屋敷六畝十二分

新村久八左衛門殿

新竿  
下屋敷四畝十二分

御小者  
染川九右衛門殿

下屋敷八畝

加治屋六兵衛殿  
真左衛門殿

右同  
下屋敷六畝

池田甚右衛門殿

新竿  
下屋敷四畝一分

土橋弥兵衛殿

右同  
下屋敷五畝

留坊

右同  
下屋敷四畝一分

田中善丞殿

右同  
下屋敷四畝

浮所



右同  
下々屋敷壹段

浮所

上屋敷五畝廿六分

上村九郎兵衛殿

中屋敷一段七畝十分

正介殿  
五代舍人佐殿

中屋敷六畝

玉田弥八郎殿

中屋敷一反四畝十分

平田盛右衛門殿

上屋敷二反十六分

内記殿  
大野藤次殿

中屋敷一段三畝

有我

上屋敷二段十六分

新納刑部太輔殿

新竿  
下々屋敷二畝十分

鯨嶋慶右衛門殿

上屋敷五畝

大寺内膳正殿  
北郷佐渡守殿

中屋敷四畝六分

空七右衛門殿  
山口采女正殿

上屋敷八段二畝四分

三原左衛門佐殿

中屋敷三畝六分

崎本休右衛門殿

中屋敷二反九畝廿九分

市来八左衛門殿

中屋敷五畝十五分

七郎殿  
永吉嘉左衛門殿

下屋敷二反三畝十四分

六郎左衛門殿  
伊勢内記殿

下屋敷九畝十八分

新納左京亮殿

新竿  
上屋敷七反八畝十分

種子左近將殿

上屋敷一段三畝五分

弥吉殿  
税所長右衛門殿

下屋敷一段九畝廿八分

左京亮殿  
因分十右衛門殿

上屋敷九畝十六分

折田勘解由次官殿

下屋敷一段九畝六分

别府長次郎殿

上屋敷一段三畝六分

善慶坊  
川上右衛門佐殿

下屋敷一段七畝三分

桂又十郎殿御樓  
桂山城守殿

上屋敷一段三畝

岩切彦兵衛殿

下屋敷二段二畝十五分

桂又十郎殿  
伊勢右京亮殿

上屋敷五畝廿六分

中村主計助殿

下々屋敷二反九畝五分

新納加賀守殿

新竿  
下屋敷一段五畝十二分

右同  
下屋敷五畝廿六分

下屋敷一段二畝

下屋敷一段二畝

下屋敷一段二畝

下屋敷一段十二分

中屋敷一段九畝六分

下屋敷一段四分

新竿  
中屋敷三反六畝廿分

内丸  
中屋敷四反四畦廿分

右屋敷返地ニ出候故、如前々御藏入ニ相籠ル故ニけシ

申候、

右屋敷惣拵有略ス、

寛永十三年九月廿日

有川右近將殿

相良主計助殿

白坂仲兵衛殿

本田内膳正殿

華田作兵衛殿

新納勘解由次官殿

喜左衛門殿  
大寺主計助殿

税所孫市殿  
一和

中西長門守殿

鎌田出雲守殿

田尻嘉兵衛

岩元清左衛門尉

984

寛永十三年子

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛  
岩元清左衛門

御城内

東福

下々屋敷四畝十二分

荒屋敷五畝十分

新竿  
荒屋敷一反四畝廿分

荒屋敷二畝

荒屋敷五畝

下々屋敷四畝十二分

浮所  
日高吉右衛門殿

浮所  
川上治部右衛門殿先

浮所  
豊後守殿先

同入下屋敷

同入下屋敷

次兵衛殿  
肝付孫三郎殿

下々屋敷五畝十八分  
家村采女正殿

下々屋敷六畝十八分  
同入下屋敷

下々屋敷一畝五分  
同入下屋敷

下々屋敷二畝十二分  
不動院

下々屋敷二畝廿四分  
同入下屋敷

下々屋敷四畝十八分  
同入下屋敷

荒屋敷七畝十四分  
本田与三兵衛殿先

荒屋敷一畝十八分  
同人先

荒屋敷壹畝  
同人先

下々屋敷二畝十二分  
伊東八兵衛殿先

下々屋敷二畝十二分  
同人先

下々屋敷五畝  
蒲地新介殿  
折田六左衛門殿先

右者先年大田丹波守殿高奉行之時、爲足地被仰候へ共、  
其時分取込ニテ屋敷帳不相直候処、此中浮所ニテ候間、

納方可被成御申候ニ付、如右丹波殿方證文被出候間、

未七月十九日如此書付也、

下々屋敷九畝六分  
同人先

下々屋敷三畝  
豊後守殿

下々屋敷五畝廿分  
次兵衛殿  
肝付孫三郎殿

荒屋敷一反十二分  
川上治部右衛門殿

下々屋敷三畝廿二分  
吉村甚兵衛殿  
本田与三兵衛殿先

荒屋敷四畝廿分  
日高吉右衛門殿下屋しき

荒屋敷五畝四分  
伊東八兵衛殿先

下々屋敷四畝十分  
豊後守殿下屋敷

座主屋敷返地ニ出ル

下々屋敷五畝十二分  
蒲地新介殿  
同人先

荒屋敷壹畝十五分  
六畝  
御茶屋番所  
屋敷五畝  
豊後守殿

座主先友野久兵衛入道殿

右揚有略ス

御城内并新勝院

下屋敷六畝七分

川上与左衛門殿

下屋敷二畝廿四分

同人菌屋敷

荒屋敷二畝十二分

丹生助右衛門殿先

下屋敷八畝

神五郎殿  
日高与一左衛門

荒屋敷五畝十分

浮所  
奈良原狩野介殿

下屋敷八畝

同人下屋敷殿

荒屋敷六畝十六分

浮所  
伊十院九郎殿先

下屋敷七畝十四分

市来次十郎殿  
喜入吉兵衛殿

下屋敷四畝十五分

浮所  
遠矢金兵衛殿先

下屋敷六畝

新納弥兵衛殿  
新納民部左衛門殿

下屋敷七畝十四分

伊東肥前守殿下屋敷

下屋敷七畝六分

高目仲右衛門殿

下屋敷五畝廿六分

同人下屋敷

下屋敷五畝十二分

同人下屋敷

下屋敷七畝十分

伊東肥前守殿  
新納弥兵衛殿下屋敷

下屋敷五畝十六分

市来次十郎殿  
喜入吉兵衛殿

荒屋敷三畝六分

浮所  
川上彦左衛門殿先

下屋敷九畝

主殿介殿下屋敷  
関渡左衛門殿跡

下屋敷六畝廿分

浮所  
田代刑部少輔殿

新卒  
中屋敷六畝十二分

新納民部左衛門殿下屋敷  
弥兵衛殿

下屋敷八畝廿分

浮所  
伊地知与兵衛殿先

新卒  
中屋敷一反一畝六分

浮所  
伊東肥前守殿下屋敷

下屋敷一反一畝廿二分

浮所  
川上上野守殿

荒屋敷三畝廿二分

浮所  
谷山左衛門殿先

荒屋敷一反四畝

浮所  
鎌田源左衛門殿先

荒屋敷二反二畝廿四分

中務殿先

荒屋敷三畝六分

浮所  
川上志广丞殿先

下屋敷一反一せ十二分

德永神兵衛殿  
少左衛門殿

下屋敷一反廿四分

同入下屋敷

下屋敷六畝

川上志广殿

下屋敷一畝十分

川上治部右衛門殿  
宮之原六兵衛殿

下屋敷五畝廿分

比志嶋大監物殿

下屋敷七畝

同人

下屋敷七畝廿八分

同人

下屋敷五畝四分

添田仲右衛門殿

中屋敷八畝廿四分

宮之原六兵衛殿下屋敷

中屋敷五畝四分

伊勢弥六殿  
下屋敷

中屋敷四畝廿三分

右同人

下屋敷六畝七分

高崎甚左衛門殿

右同  
下屋敷六畝十二分

添田喜藏殿  
代心坊

上屋敷八畝十五分

久木田權右衛門殿

上屋敷三畝八分

同人

上屋敷八畦

永田与八左衛門殿

下屋敷一反六畝六分

新兵衛殿  
益滿外記殿

下屋敷三畝三分

友野七郎殿  
伊東盛右衛門殿

右同  
下屋敷三畝六分

橋口万右衛門殿

右同  
下屋敷九畝九分

勝部志广介殿

新卒  
下屋敷四畝壹分

永田清兵衛殿

下屋敷四畝廿七分

石神善右衛門殿

中屋敷五畝

山内喜兵衛殿  
比志嶋監物殿下屋敷

中屋敷一畝

浮所

新卒  
中屋敷一反四畝

北郷久二郎殿  
伊集院久兵衛殿

張紙

下屋敷四畝十三分

川上土野守殿先浮所

下屋敷八畝十二分

平山五郎右衛門殿

下屋敷九畝廿四分

新納弥兵衛殿下屋敷  
大迫權右衛門殿先

下屋敷一反三畝十分

浮所  
添田次右衛門殿先

下屋敷一反二畝廿四分

浮所  
永金先

下屋敷二反二畝

浮所  
釘田權右衛門殿先

荒屋敷七畝十分

浮所  
田代刑部少輔殿下屋敷

荒屋敷六畝十二分

浮所  
伊地知与兵衛殿下屋敷

御前帳ニ者四石與ニ入由之押札有之、  
新卒  
中屋敷三畦廿二分

浮所

右同  
中屋敷四畝

御小者  
張紙  
仙田勘左衛門殿

右同  
中屋敷三畝廿七分

浮所

長田主馬允殿

新卒  
中屋敷四畝十分

右同  
中屋敷四畝十分

寛永拾三年九月廿日

浮所  
重久平兵衛殿  
岩元清左衛門  
田尻嘉兵衛

985

寛永拾三年子

四札之内  
下

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左衛門

新堀方下

下屋敷二反二せ廿四分

甚兵衛殿  
小嶋壹岐守殿

下屋敷一反五せ六分

蕪庵  
喜阿弥

中屋敷壹反八畦

新卒  
中七せ十四分

右同  
中一反三畦廿六分

中壹反五畦六分

中一反六畦廿六分

中一反式畦

中一反壹畦六分

上屋敷六畦

新卒  
上屋敷八畦十二分

張紙<sup>二</sup>而  
岩崎番口新御廐

一ヶ所四せ廿一分

一ヶ所五せ十一分

一ヶ所六せ十分

一ヶ所六せ十分

合二段二せ廿三分

但馬市兵衛殿

二階堂拾左衛門殿

淡路守殿  
財部傳右衛門殿

留連

福岡清右衛門殿

富春  
自圓

伊集院左近將殿

相良彦八郎殿

橋口渡兵衛殿跡

木脇休兵衛殿

金田清兵衛殿

主膳正殿  
川上甚左衛門殿

新納狩野介殿

道慶先

卯十一月十五日

新卒  
上屋敷六せ十六分

上屋敷壹反四せ廿分

新卒  
上屋敷九せ廿四分

上屋敷五反二せ

上屋敷三反二せ

上屋敷二段八畦

中屋敷七反一せ十二分

中屋敷九反一せ廿八分

下屋敷六せ廿四分

下屋敷三反

下屋敷五せ四分

下屋敷六畦

下屋敷五せ六分

下屋敷四反一せ廿八分

安心

門司安右衛門殿

安藤織部佐殿跡

川上上野守殿

主計助殿  
仁礼右近將殿

御廐  
大膳亮殿

玄番様

下野守殿

町田出羽守殿

伊十院右衛門佐殿

喜入休右衛門殿

家村全介殿

喜入丹後守殿

新右衛門殿

案崎孫右衛門殿

洪谷石見守殿

下屋敷三反七哇六分

大和守殿

下屋敷三反二哇廿六分

山田民部少輔殿

新卒  
下屋敷四反一せ十二分

伴兵衛殿  
肝付三郎四郎殿

下屋敷二反十二分

本田作左衛門尉殿

右同  
下屋敷一反五せ

御普請夫屋

中屋敷一反七せ十二分

鎌田左京亮殿

下屋敷二反

兵庫守殿  
上原太郎五郎殿

下屋敷一反九せ十九分

阿多掃部佐殿

下屋敷六せ五分

北郷神左衛門殿  
同人

下屋敷一反八分

宮之原長介殿

下屋敷一反

山田民部少輔下屋しき  
大窪備前守殿

下屋敷一反二せ廿四分

高城喜右衛門殿

下屋敷四せ一分

妻屋善兵衛殿跡

下屋敷一反廿四分

鎌田治部少輔殿下屋敷中心

下屋敷一反五せ十四分

い十院新兵衛殿  
中嶋新左衛門殿

下屋敷三反廿二分

同人  
菌田覚右衛門殿

下屋敷七哇廿二分

大工  
柴山土佐守殿

下屋敷三反廿二分

山口助之允  
長谷場兵右衛門殿

下屋敷一反二せ十四分

桂外記殿  
今井市兵衛殿

下屋敷八せ七分

鎌田治部少輔殿

下屋敷二反一せ十六分

鬼塚少右衛門殿

新卒  
下屋敷五せ二分

岩下与右衛門殿

下屋敷二反五せ

東郷肥前守殿

下屋敷三段五せ

豊前守殿

下屋敷三反廿八分

東市正殿  
理心

下屋敷四せ

いち、一角殿  
上野正右衛門殿



下々屋敷六せ十五分

下屋敷五畦廿分

下屋敷三せ廿二分

下屋敷五せ十分

割候而相良殿被給候  
中屋敷九反六反一せ六分

主人介六月廿三日被給候  
中屋敷二反八せ廿四分

上屋敷七段七畦

中屋敷九反三せ

新卒  
中屋敷五反四せ

右同  
上屋敷九反九せ十七分

上屋敷二反九せ五分

上屋敷二反四せ五分

上屋敷三反八せ十二分

破屋

江嶋五郎右衛門殿

次郎兵衛

三右衛門殿  
敷根越中守殿

藥丸伴左衛門殿

式部様

相良内藏丞殿

安藝守殿

彈正大弼殿

張紙ニ而  
下々 治部少輔殿  
鎌田出雲守殿

安千代様

川上左近將監殿

本田伊与守殿

左馬頭殿  
顯娃娃左衛門殿

渋谷四郎左衛門殿

上屋敷三反廿四分

中屋敷一反六せ

中屋敷一反九せ八分

上屋敷一反三せ廿六分

上屋敷一反

中屋敷四せ廿八分

中屋敷四せ廿八分

上屋敷一反二せ三分

中屋敷一反六せ

中屋敷一反三せ十八分

中屋敷一反二せ十四分

中屋敷七せ六分

中屋敷七せ廿八分

中屋敷五せ廿六分

敷根筑前守殿

同人

伊十院休右衛門殿  
有馬次右衛門殿

彈正殿  
御袋

筑前守殿  
大田新左衛門殿

中野甚左衛門殿

有馬主殿助殿

長井十郎左衛門殿

有川仲右衛門殿

相良日向守殿

蘭田縫殿介殿

弟子丸越中守殿  
伊地知覚右衛門殿

武藏  
滿坂巳介殿

与兵衛殿  
中村源之允殿

中屋敷六せ二分

浮所

中屋敷一反一せ

家村長右衛門殿

下屋敷三せ六分

中村爲右衛門殿  
正印

新卒  
中屋敷八せ九分

民部左衛門殿  
重田彦右衛門殿

新卒  
下屋敷一反二せ十四分

穎娃治右衛門殿

右同  
下屋敷五せ十一分

牧之瀬清左衛門殿

張紙

大手之邊

下屋敷四せ八分

御小者  
水間茂兵衛殿

中屋敷七せ

重信長兵衛殿

下屋敷七せ十八分

伊東肥後守殿

新卒  
下屋敷八せ十二分

御小者  
堀切平右衛門殿

中屋敷一反九せ六分

伊十院左京亮殿

中屋敷六せ十六分

御小者  
児玉助之允殿

中屋敷一反三せ六分

三原七左衛門殿

中屋敷三せ廿七分

右同  
立山助兵衛殿

中屋敷八せ二分

種子嶋六兵衛殿跡  
舍人佐殿

下屋敷四せ

采女佐殿  
安樂六右衛門殿

中屋敷一反九せ廿四分

町田縫殿助殿  
右京亮殿

中屋敷四せ廿四分

休齋  
児玉次介殿

中屋敷九せ十六分

上原喜左衛門殿

中屋敷二せ廿八分

木柴羽右衛門殿

中屋敷一反一せ六分

次左衛門殿  
村瀬長右衛門殿

下屋敷五せ十分

御小者  
山内主税介殿

中屋敷一反二せ四分

川上十郎左衛門殿

中屋敷六せ

おなつ  
田中捨右衛門殿

中屋敷九せ廿一分

長仙坊

本田清右衛門殿

下屋敷六せ二分

新竿  
下屋敷五せ十二分

中屋敷二せ廿四分

中屋敷二せ廿四分

新竿  
下屋敷一反五せ廿五分

右同  
下屋敷七せ十七分

新竿  
下屋敷三せ八分

中屋敷四せ十二分

右同  
中屋敷四せ十分

右同  
中屋敷四せ八分

中屋敷四せ十二分

中屋敷三せ廿分

中屋敷四せ

新竿  
中屋敷六せ十五分

周栗

御小者  
長田清左衛門殿  
益山蘇兵衛殿

清三郎殿  
菌田主税介殿

田中主税介殿

川村伊豆守殿

新次郎殿  
佐々木勘右衛門殿

林松

淵邊兩右衛門殿

関弥吉殿

久兵衛殿  
中馬三吉殿

加治木監物允殿

雲房

次郎兵衛殿  
坂元主計介殿

佐谷田九右衛門殿

上屋敷四せ十六分

新竿  
上屋敷三せ廿二分

上屋敷六せ十六分

上屋敷六せ十八分

上屋敷七せ十分

新竿  
上屋敷五せ二分

新竿  
上屋敷三せ十八分

右同  
上屋敷四せ十二分

上屋敷六せ

上屋敷四せ六分

中屋敷三せ廿七分

新竿  
中屋敷三せ廿九分

右同  
下屋敷四せ廿二分

中屋敷三せ

御小者

肥田休五郎殿  
仙右衛門殿  
竹山友兵衛殿

川口覚兵衛殿

色紙六右衛門殿

田尻嘉兵衛殿

惣左衛門殿  
武井傳右衛門殿

覚右衛門殿  
海老原神兵衛殿跡

益満内藏允殿

有馬爲兵衛殿

勝部才右衛門殿

益山五兵衛殿

菌田与七左衛門殿

宥泉坊  
善覚坊

菌田主計助殿

上屋敷三せ十八分

野瀬彦左衛門殿

上屋敷四せ

内山新兵衛殿

中屋敷三せ十八分

御小者 上床七兵衛殿

下屋敷四せ

山路城右衛門殿

新竿  
中屋敷一反四分

蒲生宮内少輔殿

下屋敷四せ

村田佐左衛門殿

下屋敷四せ十分

砂官 山口戸右衛門殿

中屋敷八せ十二分

弥三左衛門殿

中屋敷三せ六分

田尻隼人佐殿

中屋敷三せ九分

肥田源右衛門殿

中屋敷四せ廿分

文右衛門殿  
案原大炊左衛門殿

下屋敷三せ十八分

疊さし 茂吉

下屋敷二せ廿四分

張紙ニ而 具足屋  
福留之 源右衛門家  
平次兵衛殿

下屋敷三せ十八分

有馬善右衛門殿  
五兵衛殿

下屋敷四せ

延壽院

下屋敷八せ廿四分

久壽坊

上屋敷九せ廿四分

爲阿弥  
有馬掃部左衛門殿

上屋敷八せ廿

三弥殿  
益山茂右衛門殿

上屋敷七せ廿四分

田中西市丞殿  
山田内藏助殿

上屋敷六せ廿

張紙ニ而  
傳弥左衛門親  
稻津因幡守殿

上屋敷六せ

内記殿  
椎原与右衛門殿

中屋敷四せ六分

佐久間助右衛門殿跡  
岸良内藏助殿

中屋敷三せ十八分

さや師  
木場猪右衛門殿

中屋敷三せ六分

御小者  
田中李介殿  
二宮勘解由左衛門殿

中屋敷三せ十八分

御中間  
山口仲兵衛殿

中屋敷三せ十八分

御中間  
山口彦十郎殿

中屋敷三せ廿四分

御中間  
前田七郎左衛門殿  
牧野對馬允殿

中屋敷三せ廿七分

野崎十兵衛殿

中屋敷四せ十分

熊岡弥兵衛殿

中屋敷四せ廿三分

佐土原八右衛門殿

中屋敷四せ

横山大藏丞殿新介殿

中屋敷四せ十分

川南康心  
宮原長次郎殿

中屋敷四せ十分

俊作

中屋敷三せ廿七分

山下長右衛門殿

中屋敷四せ

四本藤七兵衛殿

中屋敷三せ十八分

不笠与左衛門殿跡

中屋敷四せ

弓削惣助殿  
九右衛門殿

中屋敷一反一せ六分

丹生助右衛門殿  
弥五右衛門殿

中屋敷四せ廿三分

吉井孝右衛門殿  
織右衛門殿

中屋敷五せ十八分

竹ノ内弥右衛門殿

中屋敷六せ十一分

八木隼人佐殿

中屋敷一反

權左衛門殿  
折田善兵衛殿

上屋敷一反二せ廿分

大野外記殿

上屋敷六せ十八分

郡山茂右衛門殿

上屋敷五せ廿四分

竹之内七右衛門殿

上屋敷八せ

川上九郎右衛門殿

上屋敷四せ廿分

根占市右衛門殿

上屋敷五せ

山路太郎右衛門殿

上屋敷六せ廿八分

田尻才之丞殿

中屋敷八せ廿分

伊十院六左衛門殿

上屋敷八せ十二分

良存坊

上屋敷七せ十分

川内織部佐殿

上屋敷六せ廿分

大井二右衛門殿

中屋敷四せ十二分

岩本弥右衛門殿

中屋敷四せ十二分

同清兵衛殿跡

上屋敷七せ廿四分

野村与兵衛殿

中屋敷一反六せ十四分

平山藏人殿

上屋敷七せ廿四分

押川西市允殿

中屋敷三反九せ六分

伊東二右衛門殿

中屋敷四せ

色紙彦左衛門殿

上屋敷一反三せ四分

周防介殿  
伊地知治十郎殿

中屋敷四せ廿分

牧野二郎兵衛殿

上屋敷一反二せ四分

平田吉左衛門殿

上屋敷一反三せ十分

肥後内藏介殿

上屋敷一反二せ四分

刑部左衛門殿  
同名与九郎殿

上屋敷四せ廿一分

休右衛門殿  
福崎小左衛門殿

上屋敷一反一せ八分

阿多源右衛門殿

中屋敷八せ廿分

伊地知志广介殿

上屋敷一反二せ四分

上井五郎右衛門殿

中屋敷三せ十一分

木村平右衛門殿

上屋敷二反二せ十五分

岩切六右衛門殿

新竿  
中屋敷一反六せ十八分

半兵衛殿  
本田隼人佐殿

(張紙)  
本田周粟

孫三郎殿  
菱刈伴右衛門殿

上屋敷九せ十分

桑畑藤右衛門殿

下屋敷二段六せ四分

御客屋

上屋敷八せ十二分

白濱分右衛門殿

中屋敷二段五せ四分

本田孫五郎殿

新竿  
上屋敷四せ十分

米良主税助殿

中屋敷八段九せ十八分

喜入攝津守殿

上屋敷一反一せ四分

次郎左衛門殿  
鮫嶋大藏丞殿

中屋敷二段二せ十二分

監物殿  
平田孫六殿

新竿  
上屋敷二反廿三分

五郎左衛門殿  
鮫嶋孝右衛門殿

中屋敷三段

助六殿  
川上千徳殿

中屋敷四せ六分

八木助右衛門殿

中屋敷二段八せ壹分

右衛門佐殿  
本田甲斐守殿

上屋敷二反二せ十五分

市来和泉守殿

上屋敷二段四せ九分

鹿嶋傳左衛門殿

上屋敷一段五せ廿五分

相良權兵衛殿

上屋敷二段四せ九分

鎌田源左衛門殿

上屋敷一段八せ十二分

但馬守殿  
野村吉次殿

上屋敷二段四せ十九分

權左衛門尉殿  
柁山采女正殿

中屋敷一反六せ廿分

堀甚左衛門殿

上屋敷一段一せ八分

有馬治右衛門殿

中屋敷一段八せ十一分

税所右衛門兵衛殿

上屋敷二段三せ廿五分

又四郎殿  
佐多長次殿

中屋敷一段六せ六分

川上又左衛門殿  
猿渡新助殿

上屋敷二段五せ六分

吉利下総守殿

上屋敷二段三せ六分

猿渡新助殿

上屋敷二段六せ廿八分

神左衛門殿  
諏訪神六殿

上屋敷一反六せ一分

五右衛門殿跡  
相良長三郎殿  
喜之助殿  
猿渡嘉左衛門殿

上屋敷二段五せ六分

毛利肥前守殿

上屋敷一段二せ十四分

猿渡嘉左衛門殿

上屋敷二反四せ五分

中將殿  
桂太郎兵衛殿

上屋敷二段六せ四分

市右衛門殿  
野村監物殿

上屋敷二反一せ八分

吉田貞左衛門殿

上屋敷二段六せ四分

柁山又九郎殿

新竿  
上屋敷七せ廿分

始良三郎兵衛殿

上屋敷七せ廿八分

相良因幡守殿

右同  
上屋敷二段四せ五分

平田豊前守殿  
弟子丸藤左衛門殿

上屋敷二反二せ十六分

川上彦三郎殿  
吉田次郎兵衛殿

上屋敷一反九せ十九分

伊勢美濃守殿

上屋敷一段八せ

重存坊

上屋敷一段八せ廿分

平田藤右衛門殿

上屋敷一反三せ廿分

有馬調兵衛殿

上屋敷六せ九分

門松与三兵衛殿跡

右同  
上屋敷六せ廿六分

林六左衛門殿

上屋敷一反六せ廿分

岸良内藏助殿  
佐久間勘右衛門殿

右同  
上屋敷六せ十六分

指宿助左衛門殿

上屋敷一段四せ

三介殿  
山田拾右衛門殿

上屋敷四せ廿五分

利介殿  
山本帶刀長殿

上屋敷一段四せ廿分

甲斐掃部佐殿

上屋敷四せ十五分

長山藤太兵衛殿跡  
小濱助太郎殿

上屋敷一段七せ二分

北条甚四郎殿

新卒  
下屋敷二せ八分

中村爲右衛門殿

上屋敷一段一せ廿五分

野間孫兵衛殿

中屋敷二せ十八分

中村調右衛門殿  
長田李右衛門殿

上屋敷一段六せ

阿多勘解由次官殿

中屋敷二せ十七分

御小者  
陽左衛門殿  
森益助殿

上屋敷一段六せ廿四分

平田狩野介殿  
藤六郎右衛門殿  
〔本ノマ〕〔輪カ〕

上屋敷八せ十二分

和田孫左衛門殿

上屋敷三せ廿五分

田中五右衛門殿  
玠阿弥

中屋敷三せ

御小者  
小濱 右衛門殿

上屋敷四せ一分

かわら焼孫右衛門

上屋敷七せ十四分

勸介殿  
山本新右衛門殿

上屋敷四せ廿四分

芦谷喜左衛門殿

中屋敷三せ十四分

靄丸七右衛門殿

新卒  
上屋敷八せ廿一分

平山五郎右衛門殿  
伊十院宮内左衛門殿

中屋敷一せ十四分

新齋

右同  
上屋敷八せ十二分

上井仲右衛門殿

中屋敷三せ十五分

東郷仲左衛門殿



中屋敷四せ十六分

加藤与兵衛殿

中屋敷三せ十八分

武彦左衛門殿  
山口少兵衛殿

中屋敷三せ十八分

日高豊前兵衛殿

中屋敷四せ六分

吉留とお箸や  
名乘 囚獄左衛門

中屋敷五せ三分

木藤『不分明』

中屋敷三せ十七分

大工 津曲龍兵衛殿

中屋敷三せ廿四分

藤左衛門殿  
築瀨内藏助殿

中屋敷三せ六分

御小者 折田幅左衛門殿

中屋敷三せ廿二分

御中間 蘭牟田彦左衛門殿

中屋敷三せ廿七分

小木仲右衛門殿  
五兵衛殿  
大田彦左衛門殿

新竿  
下屋敷四せ十一分

築瀨二左衛門殿

上屋敷一段四せ廿二分

張紙面高真連坊

上屋敷八せ十二分

丹後守殿  
国分民部少輔殿

上屋敷七せ四分

不笠治左衛門殿

中屋敷九せ二分

酒生利左衛門殿

中屋敷七せ廿八分

市右衛門殿  
渡邊安房介殿

中屋敷六せ七分

岩本清左衛門殿

下屋敷八せ廿分

佐早次殿  
加藤民部左衛門殿

中屋敷九せ十分

野村内藏助殿

久保田諏訪之後邊

中屋敷一段五せ十八分

谷山孫右衛門殿

中屋敷五せ廿六分

東郷覚右衛門殿

下屋敷八せ廿分

永山覚兵衛殿

下屋敷一段五せ十八分

傳左衛門殿  
三原清右衛門殿

下屋敷五せ廿九分

鎌田吉兵衛殿

下屋敷五せ十九分

大迫喜三右衛門殿  
永山新左衛門殿

中屋敷一反一せ八分

野村盛右衛門殿

下屋敷四せ廿四分

會所屋敷

下屋敷一段廿五分

徳尾藤兵衛殿

下屋敷六せ十二分

中屋敷一反三せ二分

中屋敷九せ廿九分

下屋敷八せ七分

下屋敷九せ十八分

上屋敷八せ廿六分

中屋敷一段十二分

上屋敷一段三せ十五分

上屋敷二段一せ廿分

中屋敷二段四せ八分

中屋敷七せ廿八分

中屋敷一段一せ六分

三光坊  
大泉坊

平田新兵衛殿

大山伊与守殿  
平田盛兵衛殿

宮之原傳左衛門殿跡

入佐仲左衛門殿  
四郎左衛門殿

和田讃岐守殿  
藤右衛門殿

勝目与左衛門殿  
東郷左衛門殿跡

八木長次郎殿

村尾源左衛門殿  
肥後宗兵衛殿

鎌田盛次郎殿  
与五郎殿

肥後内膳正殿  
町田孫兵衛殿

中屋敷二段二せ七分

中屋敷二段五せ六分

新卒  
上屋敷一段三せ十二分

中屋敷二段九せ廿七分

下屋敷二反四せ八分

下屋敷七せ四分

下屋敷二段一せ廿四分

下屋敷一段九せ六分

下屋敷四せ廿分

下屋敷三せ十分

下屋敷五せ六分

下屋敷二せ十分

下屋敷三せ四分

太郎左衛門殿  
野村源四郎殿

最上善次郎殿

美作守殿  
又五郎殿

根占七郎殿  
蒲地新介殿

三原次郎左衛門殿  
爲左衛門殿

藤井助左衛門殿  
東郷喜右衛門殿

琉球飯屋

檢崎喜兵衛殿

野元主右衛門殿  
七右衛門殿

肥後平右衛門殿  
仁礼百介殿

四位五郎左衛門殿  
西郷甚介殿

継存

下屋敷二せ十八分

紹爲

下屋敷三せ一分

藥丸惣兵衛殿  
右衛門殿

下屋敷二せ廿四分

弥右衛門殿

下屋敷二せ廿分

栖木市右衛門殿

下屋敷二せ十二分

一庵

下屋敷二せ十一分

肱岡隼人佐殿

下屋敷五せ廿一分

長野主水佐殿跡

下屋敷四せ十四分

川上甚右衛門殿

下屋敷三せ

爲足

下屋敷二せ十一分

内藏助殿  
四本弥太左衛門殿

下屋敷二せ廿一分

鬼塚喜右衛門殿

下屋敷二せ廿一分

井尻龍右衛門殿

下屋敷二せ十二分

小倉孫左衛門殿

下屋敷六せ

久保七兵衛殿

下屋敷三せ十八分

塩官長介殿  
泰官

下屋敷六せ十分

相良新兵衛殿

下屋敷四せ廿四分

長倉藤五兵衛殿

下屋敷四せ十五分

有川采女正殿  
瀬介殿

下屋敷三せ廿七分

勝右衛門殿  
桑原新右衛門殿

下屋敷三せ十分

相良彈兵衛殿

下屋敷一せ十五分

伊東清左衛門殿

下屋敷一せ十七分

田中内膳正殿

下屋敷六せ十分

奈須五左衛門殿

下屋敷四せ廿分

池上市兵衛殿

下屋敷三せ廿分

源五右衛門殿  
三坂次郎左衛門殿

下屋敷三せ廿分

傳介殿  
折田傳右衛門殿

下屋敷二せ廿八分

長秀  
月山

下屋敷四せ八分

源兵衛

下屋敷二せ廿分

児玉七右衛門殿

皮や

〔本マ、(杆カ)〕

〔本ノマ、〕

左衛門カ

皮や

新竿

右同  
下屋敷四せ

下屋敷九せ二分

下屋敷六せ廿分

下屋敷五せ廿一分

下屋敷一段八せ四分

下屋敷二せ十八分

下屋敷三せ廿二分

下屋敷二せ十八分

下屋敷三せ廿二分

下屋敷四せ廿四分

下屋敷二せ六分

大工

下屋敷八せ廿六分

下屋敷一段五せ

中村權右衛門殿

常徳院

川野盛介殿

家村六左衛門殿

左近允壹岐守殿

古後七郎右衛門殿

大山九郎兵衛殿

橋口萬右衛門殿

寺師次郎左衛門殿

權兵衛殿  
佐伯爲仙

次郎兵衛殿  
田中助次郎殿

筑後殿  
竹下長吉殿

津曲新左衛門殿

新竿  
下屋敷七せ十分

右同  
下屋敷七せ一分

下屋敷五せ十八分

下屋敷五せ

下屋敷四せ廿分

下屋敷一反廿分

新竿  
下屋敷五せ四分

右同  
下屋敷一反六せ十四分

右同  
下屋敷一段八せ廿七分

新竿  
下屋敷一段五せ六分

下屋敷一段七せ十八分

新竿  
下屋敷一段五せ

下屋敷一段一せ廿七分

下屋敷五せ十二分

藤井助四郎殿

藤井内藏助殿

喜右衛門殿  
荒田幾助殿

左近允八右衛門殿跡

家村与兵衛殿

上原仲左衛門殿

池田覚左衛門殿

相良丹後守殿

飯熊別當

菱川縫殿介殿  
熊假屋

相良奎之助殿

村田藤兵衛殿

野村大学助殿

鎌田嘉左衛門殿

八木戸左衛門殿

下屋敷一段六せ十三分

福崎新兵衛殿

中屋敷九せ廿四分

廣瀬善次郎殿

下屋敷一段二せ壹分

新二郎殿  
八木民部左衛門殿

下屋敷四せ廿分

倉野主水佐殿

下屋敷一段一せ廿七分

左右衛門殿  
諏訪甚七殿

下屋敷三せ十四分

大迫大学介殿

中屋敷一反二せ一分

黒田三左衛門殿

下屋敷五せ六分

大田丹後守殿

中屋敷一反一せ十二分

相良滿右衛門殿

下屋敷三せ十分

戸敷喜之介殿

新卒  
中屋敷一町八せ九分

隼人佐殿  
伊勢兵部少輔殿

中屋敷五せ十二分

勝目新三郎殿

右同  
中屋敷一反四せ廿八分

村田九郎左衛門殿

中屋敷七せ六分

長濱弥右衛門殿

「張紙」此外四せ中村吉右衛門殿屋敷へ相加

合一反八せ廿八分

中屋敷四せ十分

主殿助殿

下屋敷五せ六分

松田民部左衛門殿

中屋敷六せ十五分

平田次左衛門殿

中屋敷一段廿五分

福屋五郎兵衛殿

下屋敷四せ廿三分

永山用右衛門殿

中屋敷一段六分

久永六左衛門殿

新卒  
下屋敷一反一せ八分

大迫藤左衛門殿

下屋敷六せ

鎌田治部左衛門殿

下屋敷四せ

大迫清右衛門殿

中屋敷八せ廿四分

吉田六右衛門殿

下屋敷四せ

田中後藤兵衛殿

肥後惣兵衛殿

意順  
中馬吉兵衛殿

下屋敷四せ

長濱案右衛門殿

本ノマ、  
染川与兵衛殿

下屋敷四せ

長濱案右衛門殿

下屋敷五せ十八分

下屋敷六せ

下屋敷四せ

下々屋敷四せ廿三分

下々屋敷四せ十分

下屋敷五せ十八分

下屋敷六せ十八分

上屋敷八せ廿分

上屋敷一反五せ廿四分

新卒  
下屋敷四せ廿四分

中屋敷六せ十二分

新卒  
上屋敷六せ十二分

上屋敷一段一せ六分

甚兵衛殿  
長野助左衛門殿

相良傳右衛門殿

松崎采女正殿

御小者

滿坂里介殿  
松崎小十郎殿

吉田五郎兵衛殿  
神宮司藤七殿

川崎大右衛門殿  
大玄坊

長田内藏丞殿

五右衛門殿  
田畑左兵衛殿跡

肥後与左衛門殿

仲佐衛門殿  
長谷場少右衛門殿

児玉次郎兵衛殿跡

善四郎殿  
湯地主膳正殿跡

湯地嘉兵衛殿

中屋敷三せ十分

中屋敷三せ

中屋敷四せ十分

中屋敷四せ十二分

中屋敷二せ廿四分

中屋敷二せ廿四分

中屋敷一せ十四分

中屋敷四せ六分

中屋敷六せ二分

中屋敷二せ廿四分

中屋敷三せ十八分

中屋敷三せ廿六分

中屋敷三せ十四分

中屋敷三せ廿七分

御小者

藤崎尺右衛門殿

右同

新左衛門殿  
門松助右衛門殿

四本五右衛門殿

源右衛門殿

宮田源藤殿

五郎左衛門殿  
川野宮内左衛門殿跡

御小者

田代五郎介殿

境源右衛門殿

尾上龍右衛門殿

谷山喜左衛門殿

貴嶋藤兵衛殿跡

永田左右衛門殿

弥左衛門殿  
小倉主殿助殿

小倉由右衛門殿

岩下傳右衛門殿

中屋敷四せ廿分

上屋敷七せ

上屋敷二せ十分

上屋敷四せ六分

上屋敷四せ六分

上屋敷三せ十八分

上屋敷五せ十八分

上屋敷三せ十四分

上屋敷四せ六分

上屋敷四せ廿分

上屋敷六せ

上屋敷八せ十二分

上屋敷四せ六分

上屋敷三せ廿七分

岩下傳七兵衛殿左衛門殿

石神善吉殿

石神彦彦左衛門殿左衛門殿

大山筑後守殿

木場弥本ノ左衛門殿

野村利四郎兵衛殿右衛門殿

鎌田半右衛門殿

女目くら小春

伊地知甚左衛門殿左衛門殿

上村万万兵衛殿五郎殿

木場清左衛門殿

黒田主水佐殿

津曲久右衛門殿

宗慶

竹内伊与守殿

上屋敷八せ十二分

上屋敷三せ十八分

下屋敷四せ

下屋敷六せ廿四分

下屋敷三せ一分

下屋敷三せ廿七分

下屋敷七せ十五分

中屋敷三せ十八分

中屋敷八せ十二分

中屋敷四せ

中屋敷三せ廿七分

中屋敷七せ十四分

下屋敷六せ廿四分

下屋しき一段廿二分

岩切八兵衛殿

梅北与休右衛門殿左衛門殿跡

長田長兵衛殿

中保平(保カ)平左衛門殿

濱田内藏丞殿

杉元茂右衛門殿

森与三右衛門殿

森与五郎殿与右衛門殿

築瀬六右衛門殿

竹之内清清兵衛殿左衛門殿

高山備後守殿左右衛門殿

山崎久右衛門殿跡

新原道益

大馬場吉右衛門殿

中屋敷四せ十二分

(小)木森隼人佐殿

下屋敷六せ廿四分

妹尾勳右衛門殿

中屋敷四せ十二分

本マ長三郎殿  
臼井孫兵衛殿

下屋敷三せ十八分

松方和泉守殿

中屋敷三せ廿五分

四位五郎左衛門殿  
仁礼六左衛門殿

下屋敷五せ十八分

敷根左近將監殿

中屋敷四せ

為兵衛殿  
吉井藤兵衛殿

下屋敷七せ廿四分

日置吉兵衛殿

下屋敷三せ十八分

大工  
野村主水佐殿

中屋敷四せ十分

染郷新兵衛殿

中屋敷四せ

主水左衛門殿  
川野次郎九郎殿

中屋敷五せ六分

長田軍右衛門殿

中屋敷四せ

岩本彦右衛門殿

中屋敷五せ六分

長野善右衛門殿

下屋敷三せ十八分

大窪主税助殿

中屋敷四せ六分

野村李之介殿

中屋敷四せ十二分

東郷宗兵衛殿

中屋敷五せ十二分

黑田新右衛門殿

中屋敷四せ

川野監物丞殿

中屋敷五せ二分

仁礼盛右衛門殿

中屋敷三せ

染川源之丞殿

中屋敷五せ十分

有馬高右衛門殿

下屋敷四せ六分

小川喜兵衛殿  
傳兵衛殿

中屋敷四せ

木佐貫万兵衛殿



中屋敷五せ三分  
 中屋敷六せ  
 中屋敷四せ三分  
 中屋敷四せ六分  
 中屋敷七せ十四分  
 中屋敷六せ十分  
 下屋敷七せ六分  
 下屋敷四せ七分  
 下屋敷二せ三分  
 下屋敷五せ十分  
 下屋敷五せ八分  
 下屋敷七せ十一分  
 下屋敷四せ  
 右同  
 下二せ十二分

大工

〔本ノマ〕平太之允殿  
 萩原孫八殿  
 黒田百左衛門殿  
 鐘学坊跡  
 高嶋吉兵衛殿  
 海老原主計助殿  
 四本彦兵衛殿  
 四本覚左衛門殿  
 志賀介殿  
 常嘉  
 光紹  
 松崎久左衛門殿  
 勝部足右衛門殿  
 与二郎殿  
 澁谷次郎兵衛殿  
 〔不知〕山本奉兵衛殿  
 大藏助殿  
 安田作右衛門殿

同  
 下屋敷三せ十二分  
 右同  
 下屋敷七せ十一分  
 下屋敷五せ六分  
 中屋敷四せ  
 中屋敷三せ廿分  
 新竿  
 下屋敷四せ廿九分  
 同  
 下屋敷四せ三分  
 中屋敷三せ十分  
 中屋敷五せ三分  
 中屋敷三せ十分  
 中屋敷八せ十八分  
 中屋敷三せ十八分  
 中屋敷六せ廿分  
 中屋敷三せ二分

竹之下与左衛門殿  
 助之允殿  
 和田郷左衛門殿  
 辻爲左衛門殿  
 根占舍人佐殿  
 野崎甚右衛門殿  
 白石仲兵衛殿  
 源左衛門殿  
 野村治兵衛殿  
 赤崎吉右衛門殿  
 稻留久右衛門殿  
 竹之内与七殿  
 伊地知久兵衛殿  
 重信監介殿  
 上原鞆介殿  
 郷左衛門殿  
 武元兵衛門尉殿  
 長十郎殿  
 谷山宮内左衛門殿

下屋敷三せ二分

吉井長左衛門殿

下屋敷三せ十八分

小倉源右衛門殿

中屋敷三せ十八分

吉井次郎兵衛殿

下屋敷四せ廿三分

三原善右衛門殿

中屋敷三せ廿分

武元藤兵衛殿

下屋敷四せ

大工

松元右近將殿

下屋敷七哇十分

佐土原兵衛門殿

中屋敷三せ十八分

長瀬八右衛門殿

新竿  
下屋敷四哇

大坊

中屋敷三せ十八分

大浦善左衛門殿

右同  
下屋敷七せ十一分

橋口少兵衛殿

中屋敷四せ

新兵衛殿

右同  
下屋敷三せ六分

順慶

中屋敷三せ十八分

大工

牧太兵衛殿

下屋敷三せ六分

橋元助右衛門殿

中屋敷四せ六分

谷本佐介殿

中屋敷四せ十分

川畑隼人佐殿

中屋敷四せ十分

茂平衛殿

下屋敷三せ六分

河原与兵衛殿

中屋敷四せ十分

上村平右衛門殿

下屋敷三せ六分

小倉三左衛門殿

上屋敷四せ

張紙にて

健軍内記殿

下屋敷三せ六分

竹之内六右衛門殿

上屋敷六せ十五分

種子田八兵衛殿

下屋敷三せ六分

白石利左衛門殿

中屋敷五せ十九分

上野掃部助殿

砂官

壁右衛門

新竿

川野弥六殿

下屋敷三せ十八分

卯兵衛

上屋敷五せ十二分

西郷八郎右衛門殿

同 中屋敷三せ一分 御小者 新左衛門殿  
同 山口市左衛門殿

同 中屋敷三せ一分 御付奥方へ奉公 長田内藏助殿

同 中屋敷八せ七分 西田継介殿

同 中屋敷四せ廿四分 高城正左衛門殿

同 中屋敷五せ六分 青山監介殿

同 中屋敷三せ十八分 爲右衛門殿  
黒木喜右衛門殿

新卒 中屋敷三せ十四分 種子田水右衛門殿

同 上屋敷二せ廿四分 休庵

同 上屋敷二せ廿四分 石友明

同 上屋敷三せ廿二分 御中間 野崎平介殿  
藤七殿

新卒 上屋敷四せ十分 御中間 九郎右衛門殿  
色紙喜兵衛殿

中屋敷三せ八分 御小者 治右衛門殿  
山下六右衛門殿

新卒 上屋敷四せ 池田竿右衛門殿  
慶坊

同 上屋敷四せ八分 松山塵右衛門殿

同 上屋敷五せ六分 御小者 添田傳右衛門殿

同 中屋敷四せ六分 松山甚兵衛殿

中屋敷四せ六分 休五郎殿  
三坂善右衛門殿

中屋敷四せ廿三分 山下源助殿  
甚右衛門殿

同 上屋敷四せ八分 御中間 松山太郎兵衛殿

同 上屋敷五せ六分 右同 西田五郎兵衛殿

中屋敷四せ六分 地蔵屋敷六せ余有之由 下ニ名前有之候得共、不相知

中屋敷四せ六分 大工 山本八兵衛殿

中屋敷四せ廿四分 大工 大野盛右衛門殿

中屋敷五せ四分 吉井早左衛門殿

中屋敷四せ廿二分 二松地藏馬場

中屋敷四せ廿分 中屋敷六せ二分 六兵衛殿  
三代五兵衛殿

中屋敷四せ六分 大工 川崎弥兵衛殿

上屋敷四せ十分

「張紙」  
与倉源兵衛殿跡伊与倉源平殿  
「本ノマヽ」

隠岐右衛門殿

上屋敷三せ廿七分

助左衛門殿 野元

上屋敷四せ

御臺所付  
勅左衛門殿  
萩原仲右衛門殿

上屋敷三せ十八分

御小者  
横山弥右衛門殿

上屋敷四せ十分

御小者  
水間市兵衛殿  
金右衛門殿

中屋敷八せ

三原平兵衛殿

中屋敷三せ廿二分

甚之介殿  
川畑志广之丞殿跡

中屋敷四せ廿分

竹之下彦  
爲左衛門殿

中屋敷一段十二分

新納大内藏丞殿

中屋敷一段四せ廿二分

中村主水佐殿

上屋敷四せ十分

原口吉兵衛殿

上屋敷五せ

不審  
木藤与右衛門殿

上屋敷四せ十五分

大迫小右衛門殿

下屋敷七せ六分

中屋敷七せ

中屋敷四せ廿分

中屋敷四せ廿分

下屋敷七せ廿四分

上屋敷三せ十八分

上屋敷三せ一分

上屋敷四せ十分

松方兵衛門殿  
本田外記殿

中屋敷九せ十分

与兵衛殿  
有川主膳正殿

中屋敷五せ十分

奈良原带刀長殿

上屋敷八せ廿六分

江川孫左衛門殿

下屋敷八せ

助十郎殿  
野元源左衛門殿

下屋敷七せ六分

加治木松右衛門殿

大工

郡山六七左衛門殿

中村与左衛門殿

本村左近兵衛殿

梅北助右衛門殿跡

梶原善左衛門殿

三郎兵衛殿  
吉利織部助殿

大山豊前兵衛殿

上山少兵衛殿

下屋敷四せ廿分  
 下屋敷四せ廿分  
 下屋敷九せ十分  
 下屋敷三せ十八分  
 下屋敷四せ廿分  
 下屋敷三せ廿七分  
 下屋敷三せ廿七分  
 下屋敷四せ廿三分  
 下屋敷八せ  
 下屋しき三せ廿七分  
 下屋敷三せ十八分  
 下屋敷四せ八分  
 下屋敷六せ十二分  
 下屋敷七せ十五分  
 同  
 下屋敷五せ十二分  
 下屋敷一段九せ六分

長田納右衛門殿  
 有馬主殿助殿  
 市来備後守殿  
 上原与一右衛門殿  
 鬼塚「本ノマ」(孫カ)左衛門殿  
 弥右衛門  
 弥介かさりや  
 い十院弥左衛門殿  
 染川勘左衛門殿  
 權兵衛殿  
 美代主殿助殿  
 邊麥平右衛門殿  
 児玉彦左衛門殿  
 赤松宮内左衛門殿  
 留田内匠丞殿  
 有川治部左衛門殿  
 肝付彦兵衛殿  
 平山對馬守殿

下屋敷六せ  
 下屋敷三せ廿二分  
 同  
 下屋敷四せ十五分  
 同  
 下屋敷四せ六分  
 同  
 下屋敷七せ  
 下屋敷三段七せ十分  
 下屋敷一段三せ十分  
 同  
 下屋敷二せ十分  
 同  
 下屋敷四せ六分  
 下屋敷五せ十八分  
 下屋敷二せ廿分  
 同  
 下屋敷三せ六分  
 同  
 下屋敷四せ六分

九郎右衛門殿  
 市来孫左衛門殿  
 嘉仙  
 蛟嶋弥左衛門殿  
 かり屋しき  
 淵邊与左衛門殿  
 間瀬田七左衛門殿  
 四本六左衛門殿  
 井上勘解由次官殿  
 紀州後室  
 福永久兵衛殿  
 肝付欽不知傳右衛門殿  
 坂元主税助殿  
 有馬民部左衛門殿  
 藤兵衛殿  
 有馬休阿ミ  
 道甫  
 有川休右衛門殿  
 五後介殿  
 奈良原源介殿

下屋敷四せ六分

前田早右衛門殿

下屋敷六せ十六分

坂元十郎右衛門殿

下屋敷四せ廿分

新左衛門殿  
長田大右衛門殿

新卒  
下屋敷九せ廿四分

平田清兵衛殿  
大山市兵衛殿

下屋敷七せ十八分

伊瀬地久兵衛殿  
竹之内与七殿

新卒  
下屋敷五せ十五分

有馬左近將殿

下屋敷一反廿四分

与右衛門殿  
丸田弥左衛門殿

下屋敷七せ六分

次右衛門殿  
肥後新左衛門殿

中屋敷九せ廿四分

与左衛門殿  
村田郷左衛門殿

中屋敷七せ廿四分

字多小左衛門殿  
佐右介殿

下屋敷六せ

向井吉左衛門殿

新卒  
下屋敷三せ廿五分

芦谷源吉殿

同  
中屋敷一反二せ五分

尾上二左衛門殿

同  
下屋敷五せ

「本ノマ、レ(限之)」  
元与七殿

下屋敷七せ廿四分

伊地知右衛門兵衛殿

下屋敷四せ廿分

伊東傳左衛門殿

下屋敷四せ六分

大重傳左衛門殿

下屋敷四せ

御小者「名前不知」四郎兵衛殿  
傳藏殿

中屋敷四せ

野崎六兵衛殿  
五左衛門殿

中屋敷五せ

らうそくや覚兵衛

「本ノマ」  
「張紙」染川か事

中屋敷五せ十分

曾木源四郎殿

下屋敷四せ廿分

一宅

新卒  
中屋敷五せ六分

鎌田勘兵衛殿

右同  
中屋敷五せ廿五分

押川善左衛門殿

中屋敷六せ十五分

いち、長兵衛殿

下屋敷四せ十分

御小者  
神宮司安右衛門殿  
桑野新左衛門殿

新卒  
中屋敷一反一せ

中屋敷五せ十二分

下屋敷四せ

中屋敷七せ十五分

中屋敷七せ十四分

新卒  
中屋敷九せ二分

右同  
中屋敷五せ十分

新卒  
中屋敷五せ十分

同  
中屋敷七せ廿八分

下屋敷四せ廿三分

下屋敷四せ六分

善右衛門殿  
鎌田權兵衛殿

山下昌左衛門殿

川畑次左衛門殿

油や金兵衛  
福嶋伴介殿

左左衛門殿  
松山六兵衛殿

坂元監物丞殿

御中間  
宮里内藏右衛門殿  
石川主水左衛門殿

美代善兵衛殿

御中間  
大川孫右衛門殿

觸兼  
案崎喜右衛門殿  
松山長左衛門殿

竹下郷左衛門殿

田尻正介殿  
正作

田中李右衛門殿

新卒  
中屋敷八せ七分

同  
中屋敷五せ廿分

同  
下屋敷五せ

中屋敷四せ廿四分

山口ノ邊

中屋敷五せ十二分

新卒  
中屋敷八せ十二分

中屋敷五せ十二分

中屋敷四せ八分

中屋敷六せ二分

新卒  
下屋敷一反一せ廿二分

同  
下屋敷七せ廿八分

同  
下屋敷五せ廿四分

同  
下屋敷五せ七分

稻津長右衛門殿

大工  
高山采女正殿

伊地知源三郎殿

田尻小右衛門殿跡  
〔朱書〕  
明屋しき

龜沢内記殿

梶原主水佐殿

九郎右衛門殿  
吉原五郎右衛門殿  
〔本ノマ、〕

時任長右衛門殿  
之允殿

御臺所付小倉監物殿

猿渡喜右衛門殿

御小者  
有馬次左衛門殿

岩下与右衛門殿  
徳齋

西郷九兵衛殿

下屋敷五せ十八分

伊地知喜左衛門殿

同  
上屋敷一反五せ廿五分

佐藤仲兵衛殿

新竿  
下屋敷九せ十九分

采女正殿  
永吉伴兵衛殿

下屋敷四せ廿分

築瀬源右衛門殿  
山元内匠丞殿  
二木種左衛門殿

同  
下屋敷四せ十五分

池上藤左衛門殿

下屋敷四せ廿分

肝付大右衛門殿

同  
中屋敷四せ廿四分

弥五助殿  
木原弥左衛門殿

下屋敷六せ十八分

外記殿

中屋敷四せ十二分

木藤助太郎殿

中屋敷五せ四分

借屋しき長瀬爲右衛門殿

中屋敷六せ

炭焼  
三五郎

中屋敷六せ廿九分

神宮司銀右衛門殿

中屋敷六せ廿分

宮下小右衛門殿  
財部傳右衛門殿

下屋敷三せ廿七分

御小者  
加世田次兵衛殿

中屋敷四せ廿四分

川野四郎左衛門殿  
伊地知久左衛門殿

新竿  
下屋敷三せ十八分

御小者  
川畑勝兵衛殿

中屋敷五せ十二分

川野二郎兵衛殿

同  
下屋敷一反四せ廿二分

少右衛門殿  
上村弥左衛門殿

中屋敷六せ

御小者

野崎七左衛門殿

下屋敷三せ廿二分

朝右衛門殿  
川口七右衛門殿

中屋敷六せ廿分

水間本左衛門殿

下屋敷六せ廿八分

井上織部佐殿

中屋敷九せ廿四分

仁礼主税介殿

下屋敷一反九せ五分

海江田仲左衛門殿

新竿  
中屋敷七せ十八分

市兵衛殿  
有川源藏殿

下屋敷八せ二分

外山弥右衛門殿



下屋敷一反廿分  
 下屋敷五せ十分  
 下屋敷一反八せ十二分  
 下屋敷六せ  
 新 中屋敷九せ十八分  
 中屋敷五せ  
 同 下一反  
 中屋敷一反二せ十分  
 中屋敷一反五せ十分  
 中屋敷一反四せ  
 中屋敷一反二せ廿分  
 新 下屋敷九せ十八分  
 中屋敷五せ十二分  
 下屋敷一反一せ廿七分  
 下野敷一反六せ廿一分  
 下屋敷五せ十分  
 平野六郎左衛門殿  
 入部勘介殿  
 澁谷与左衛門殿  
 坂元勝右衛門殿  
 丹波守殿  
 伊地知利兵衛殿  
 岡元主計助殿  
 小野甚右衛門殿  
 北原善左衛門殿  
 有馬主馬首殿  
 大山新左衛門殿  
 三嶋主計助殿  
 清水監物殿  
 隈本膳兵衛殿  
 中原傳心  
 野津安右衛門殿  
 山元五郎右衛門殿

新 下屋敷一反廿分  
 同 下屋敷一反廿二分  
 下屋敷五せ十二分  
 下屋敷六せ十八分  
 下屋敷四せ廿分  
 下屋敷四せ  
 下屋敷五せ二分  
 下屋敷四せ八分  
 下屋敷五せ十五分  
 下屋敷六せ一分  
 下屋敷八せ廿四分  
 下屋敷六せ廿八分  
 下屋敷五せ十二分  
 新 上屋敷一反二せ廿五分  
 阿多對馬守殿  
 平右衛門殿  
 伊東九兵衛殿  
 井上掃部助殿  
 井手竜藤兵衛殿  
 中山織部佐殿  
 宇都宮藤左衛門殿  
 御臺所付早稻田源右衛門殿  
 東郷二左衛門殿  
 竹下市右衛門殿  
 小川内彦左衛門殿  
 喜介殿  
 田向李兵衛殿  
 寛右衛門殿  
 松永勝作殿  
 作右衛門殿  
 窪田弥左衛門殿  
 三官  
 阿多内膳正殿

下屋敷六せ十二分  
新竿

下々屋敷五せ十分

下屋敷一反一せ六分

下屋敷六せ一分

下屋敷六せ九分

中屋敷一反二せ廿四分

新竿  
中屋敷九せ廿二分

新竿  
中屋敷二反四せ廿五分

中屋敷一反九せ十五分

下屋敷一反二せ十八分

中屋敷六せ十八分

ヒロ  
下屋敷一反一せ六分

中屋敷六せ十六分

新竿  
中屋敷九せ十分

ヒロ  
中九せ十六分

石原助兵衛殿

餅原平右衛門殿

加世田内記殿

善松助左衛門殿

長谷友右衛門殿

伊地知奎右衛門殿

伊東志广丞殿

是枝諸左衛門殿

城井三郎兵衛殿

曾木源七殿

竹内「備款」前守殿

加治木早右衛門殿  
泉齋

湯地道意

浮所

押川「六左衛門殿」  
彦左衛門殿

中屋敷九せ十分

中屋敷四せ六分

中屋敷九せ廿四分

新竿  
中屋敷三せ廿九分

同  
中屋敷四せ十二分

中屋敷四せ廿七分

中屋敷五せ十分

新竿  
中屋敷五せ十二分

中屋敷四せ廿分

中屋敷五せ十八分

新竿  
下屋敷五せ六分

同  
中屋敷五せ三分

同  
中屋敷五せ八分

「柄」深栖左衛門殿

新納右衛門兵衛殿

葛西茂右衛門殿

川上主殿助殿

柳田勘右衛門殿

伊東茂兵衛殿

伊地知喜右衛門殿

福崎勝右衛門殿

御臺所付黒不惣兵衛殿

御小者  
橋口渡右衛門殿

山本勘左衛門殿

長田与右衛門殿

中馬源太左衛門殿

郡山助左衛門殿

野崎喜之助殿

市兵衛殿  
有村二右衛門殿

壹岐勝兵衛殿

田代五郎左衛門殿

新竿ヒ  
下屋敷五せ十分

岩下長左衛門殿  
右衛門殿

仕明地  
屋敷三せ廿分

御臺所付寅年移

山口孫左衛門殿

新竿ヒ  
中屋敷五せ

川畑平左衛門殿

同  
下屋敷五せ十八分

徳田少右衛門殿

下屋敷六せ十八分

畑次兵衛殿

猪俣小左衛門殿

下屋敷六せ十八分

武三右衛門殿跡

上屋敷一反二せ廿五分

川上掃部助殿跡

下屋敷一反二せ

仁礼藤左衛門殿  
弟子丸治左衛門殿

下屋敷五睦

神宮司刑部左衛門殿  
敷根市左衛門殿

下屋敷六せ九分

本田左近將曹殿

下屋敷五せ四分

張紙

堀之内仲右衛門殿

下屋敷五せ十二分

町田五右衛門殿

下屋敷六せ七分

敷根市右衛門殿  
神宮司刑部左衛門殿

新竿  
下屋敷一反二せ八分

下屋敷一反七せ十八分

新  
下屋敷一反六分

同  
下屋敷一反八せ廿四分

同  
下屋敷一反八せ廿四分

張紙ニ而候  
屋敷上る

津曲助之丞殿

藪田助兵衛殿

法亢宇左衛門殿

新竿  
下屋敷九せ五分

中渡瀬

浮所

白尾采女正殿

同  
下屋敷七せ十四分

浮所

黒田長右衛門殿

町田掃部佐殿

新竿  
下屋敷一反六せ廿分

八右衛門殿

新竿  
下屋敷一反五せ九分

平山内匠丞殿

同  
下屋敷一反八分  
下屋敷五せ廿分

崎主水正殿  
岩下傳左衛門殿  
橋口市兵衛殿

下屋敷三せ十五分  
下屋敷三せ十五分  
下屋敷四せ

御下衆 向井九郎右衛門殿  
御下衆 湯淺但馬守殿  
御下衆 御小者林仲右衛門殿

下屋敷一反七畦

五左衛門殿  
有川吉左衛門殿

下屋敷三せ六分

御下衆 切通嘉兵衛殿  
御下衆 小倉六右衛門殿

下屋敷一反一せ十二分

川上五兵衛殿

下屋敷三せ六分

御下衆 藤兵衛殿  
御下衆 松下彦兵衛殿

下屋敷六せ七分

御小者  
中村宇右衛門殿  
川野治兵衛殿

下屋敷四せ六分

御下衆 淺田兵衛門殿

下屋敷六せ七分

大工  
和田帶刀長殿  
黒江吉兵衛殿

下屋敷一反七せ十八分

御下衆 森岡弥兵衛殿

下屋敷五せ十八分

藤左衛門殿  
寺師与右衛門殿

下屋敷四せ十分

御下衆 善右衛門殿  
御下衆 米良兵部卿殿

下屋敷六せ九分

橋口少右衛門殿  
津曲藤右衛門殿

下屋敷二せ十二分

御下衆 坂本源之允殿

下屋敷一せ廿二分

弥平太殿  
谷山官兵衛殿

下屋敷三せ十二分

右同 勝部新兵衛殿

上屋敷三段一せ

助八殿  
川上休右衛門殿

下屋敷四せ

右同 濱田金石衛門殿

下屋敷八せ

御下様  
御藏地

仲藏殿

下屋敷三せ十分

御下衆 窪田利兵衛殿

下屋敷六せ七分

肝付伴左衛門殿

下屋敷五せ六分

慶右衛門殿  
木尾助次郎殿

下屋敷五せ四分

御小者  
山口善右衛門殿

下屋敷三せ十八分

重永

下屋敷七せ十一分

〔本ノマ、〕川上攝津介殿  
磯持  
真木か山本

新竿  
下屋敷五せ十八分

田中休三郎殿

同  
下屋敷四せ廿六分  
二せ十二分

井尻四五右衛門殿  
浮所

下屋敷六せ二分

〔本ノマ、〕塩山平内殿

下屋敷八せ

堅之介殿  
伊十院長右衛門殿

新竿井尻四五右衛門殿へ付

下屋敷二せ十分

浮所

下屋敷四せ廿分

御小者  
月野内藏之丞殿

下屋敷四せ廿分

宮下主水左衛門殿  
守慶

新竿  
下屋敷四せ廿四分

小金細工衆  
小川助右衛門殿

下屋敷三せ

武五郎右入道殿

同  
下屋敷七せ廿四分

武宮内左衛門殿

新竿  
下屋敷一反四せ十二分

精松主膳正

〔張紙上向し〕  
畦廿三步

堀新三郎殿

〔右屋敷惣挙有略ス〕

久木田權右衛門尉

梶原善左衛門殿

長野助左衛門尉

津留休右衛門尉

寛永十三年九月廿日

楠元五郎右衛門尉

長瀬新兵衛

山口仲兵衛

伊十院長右衛門尉

加藤郷兵衛

平田喜左衛門尉

竿頭

田中茂左衛門尉

岩元清左衛門

判有

田尻嘉兵衛

判有

川上内膳正

下屋敷六畝廿分

下屋敷五畝

下屋敷六畝拾分

下屋敷五畝

野間勘之丞

西川權左衛門殿

甲斐權左衛門殿  
野間治兵衛殿

浮所

下屋敷三畝廿二分

浮所  
有馬老岐守殿

下屋敷五畝

浮所

下屋敷五畝

浮所

下屋敷五畝十五分

相良覺右衛門殿

下屋敷四畝

浮所

下屋敷壹畝

浮所

下屋敷四畝廿分

土持左馬權頭殿  
指宿帶刀長殿

下屋敷三畝十分

浮所

下屋敷四畝廿五分

土持左馬權頭殿  
浮所

下屋敷四畝十五分

小左部殿跡

下屋敷五畝廿分

川崎仲右衛門殿

寛永十三年子

西田

薩州鹿兒嶋衆中屋敷御檢地帳

九月廿日

田尻嘉兵衛

岩元清左衛門

西田新屋鋪

下屋敷五畝十五分

浮所

三代善兵衛殿

下屋敷五畝廿六分

浮所

下屋敷五畝

重久曾兵衛殿

下屋敷五畝五分

下屋敷四畝廿分

上屋敷四畝廿分

上屋敷五畝

中屋敷五畝

中屋敷五畝

中屋敷四畝廿分

下屋敷五畝十分

下屋敷二畝

下屋敷五畝

中屋敷五畝

中屋敷四畝廿八分

中屋敷五畝

中屋敷四畝十五分

中屋敷五畝

中屋敷五畝

瀬之口〔不知〕右衛門殿

寺尾新左衛門殿

はしもり南右衛門殿

八木源八殿

芦谷六右衛門殿  
長田九介殿

上別府甚六殿

おはる

日高新藏殿

浮所

川村貞右衛門殿

末原郷右衛門殿

有馬久右衛門殿

押川傳内左衛門殿

脇田織部佐殿

井上六郎右衛門殿

黒木藤左衛門殿

中屋敷五畝五分

中屋敷四畝十五分

上屋敷五畝十五分

上屋敷五畝十五分

上屋敷四畝廿七分

下屋敷三畝六分

御道見衆

上屋敷五畝九分

上屋敷五畝九分

上屋敷五畝二分

上屋敷五畝二分

中屋敷五畝

中屋敷四畝廿分

中屋敷四畝廿五分

中屋敷四畝廿五分

浮所

御小者

原田權左衛門殿  
牧少左衛門殿

御小者

津曲久五郎殿

御臺所付包丁小番

黒木孫兵衛殿

坂口掃部佐殿

御中間

野間口万兵衛殿

西高右衛門殿

築崎与一左衛門殿

黒江勘解由殿

宅万昌左衛門殿

山口覚左衛門殿

国府覚左衛門殿

久木村喜兵衛殿

永山孫右衛門殿  
津曲八兵衛殿

御小者

御小者

御中間

浮所

御小者

中屋敷四畝廿五分	長井市左衛門殿	下屋敷五畝四分	飛岡郷右衛門殿 <small>「江カ」</small>
中屋敷四畝廿五分	坂口善介殿	下屋敷四畝廿分	瀬戸口源右衛門殿
中屋敷五畝	野添權左衛門殿	下屋敷四畝廿七分	世渡口善介殿
下屋敷四畝十分	新穂休二郎殿	下屋敷四畝廿七分	角地慶左衛門殿
下屋敷二畝十七分	小田帶刀長殿	中屋敷五畝	長尾權之助殿
下屋敷四畝廿分	竹之下十右衛門殿	中屋敷五畝五分	坂本權右衛門殿
中屋敷四畝廿分	新穂大炊左衛門殿	上屋敷五畝	瀧間少右衛門殿
中屋敷四畝廿分	川畑四郎左衛門殿	上屋敷五畝	児玉左近將殿 <small>十兵衛殿</small>
中屋敷四畝廿分	川畑四郎左衛門殿	上屋敷五畝五分	西吉兵衛殿
中屋敷四畝廿分	<small>「本ノマ、」</small> 勝田平六兵衛殿	中屋敷五畝四分	山口六郎左衛門殿
中屋敷四畝廿分	<small>「徳次不審」</small> 中嶋喜右衛門殿	中屋敷五畝九分	吉留孫兵衛殿
中屋敷三畝廿分	北川七郎右衛門殿	中屋敷五畝十五分	國分佐左衛門殿
中屋敷四畝十五分	有馬八右衛門殿	下屋敷四畝廿分	北川佐五右衛門殿
下屋敷四畝十五分	小野彦左衛門殿	下屋敷五畝	和田伴兵衛殿
下屋敷四畝廿五分	中村五左衛門殿	下屋敷五畝五分	坂口二郎左衛門殿
下屋敷五畝	鮫嶋采女正殿	下屋敷五畝五分	藪田小藤兵衛殿
下屋敷五畝	瀧間右衛門兵衛殿	下屋敷五畝	立山小兵衛殿



下屋敷四畝廿分

國分六右衛門殿

下屋敷五畝

山口慶右衛門殿

上屋敷壹段

竹迫傳右衛門殿

下屋敷五畝

大重主水介殿  
弥右衛門殿

下屋敷五畝

長瀬監物殿

下屋敷五畝

大重七左衛門殿

下屋敷四畝廿四分

池上与三兵衛殿

下屋敷四畝廿分

餌井新三郎殿  
与左衛門殿

下屋敷五畝五分

「名字不知」  
弥七左衛門殿

下屋敷五畝

前田内藏介殿

中屋敷五畝五分

案崎甚藏殿

下屋敷四畝廿分

内藤作右衛門殿  
内藤曾左衛門殿

中屋敷五畝

傳右衛門殿  
林右衛門殿

下屋敷四畝廿分

池田源之允殿  
竹之下覚右衛門殿  
条右衛門殿

中屋敷四畝廿八分

安樂孫介殿  
藤兵衛殿

中屋敷四畝廿五分

長野五兵衛殿

中屋敷五畝

須田九郎兵衛殿  
堅右衛門殿

中屋敷五畝七分

前田彦右衛門殿  
松右衛門殿

中屋敷五畝九分

同名仲右衛門殿

中屋敷五畝

三角角右衛門殿  
曾兵衛殿

中屋敷五畝廿六分

坂口縫殿助殿

中屋敷四畝廿七分

大山善介殿  
永右衛門殿

中屋敷五畝

坂口金右衛門殿

中屋敷四畝廿七分

長尾吉次殿  
甚左衛門殿

中屋敷五畝

西孫右衛門殿

中屋敷五畝

末原左近介殿  
内藏右衛門殿

中屋敷五畝

内藤治右衛門殿  
洲村宇右衛門殿

中屋敷四畝廿分

平川長左衛門殿

下屋敷五畝

洲邊織部助殿

中屋敷四畝十五分

桐野新兵衛殿

中屋敷三畝廿一分

仲左衛門殿  
案原徳介殿

下屋敷五畝

彈右衛門殿  
種子田孫兵衛殿

中屋敷五畝

竹下友右衛門殿

下屋敷五畝

石川長右衛門殿

中屋敷五畝

案原長右衛門殿

下屋敷五畝

横山織部佐殿

下屋敷三畝六分

字都彦兵衛殿

下屋敷五畝

堀長介殿  
主馬首殿

下屋敷壹畝

右同人

下屋敷五畝

長井源藏殿

中屋敷五畝

左衛門殿  
久保新介殿

下屋敷五畝

長野助三郎殿

中屋敷五畝四分

善左衛門殿  
黒江源四郎殿

下屋敷五畝

郡山宇兵衛殿

中屋敷五畝九分

田尻吉兵衛殿

下屋敷五畝

桐野瀧右衛門殿

中屋敷五畝

竹迫仲兵衛殿

下屋敷五畝

森源三郎殿  
喜兵衛殿

中屋敷五畦

池田源之丞殿  
澗村宇右衛門殿

下屋敷四畝廿二分

桐野右近介殿

中屋敷五畝

前田大学介殿

中屋敷五畝

川邊藤左衛門殿

中屋敷五畝

立山吉左衛門殿

中屋敷四畝廿二分

四本源左衛門殿

下屋敷五畝

手塚權左衛門殿

中屋敷五畝

坂口二郎兵衛殿  
竹下吉介殿

下屋敷五畝

川野八郎右衛門殿

中屋敷四畝廿二分

坂本寛兵衛殿

下屋敷四畝廿五分

窪田重左衛門殿

「右屋敷揚有略ス」

下屋敷四畝廿五分

清左衛門殿  
西郷吉左衛門殿

下屋敷五畝

岩本清左衛門殿

下屋敷五畝

清左衛門殿  
森山宇兵衛殿

寛永拾三年九月廿日

田尻嘉兵衛

「雑録中載せ置進上ス」

伊地知季通

藏書

「家久公御譜中」

寛永十四年丁丑、家久公有不豫、公方家光公使醫師  
 久志本式部少輔下薩州、加治療、由是爲謝 高恩、使久  
 加赴江府、登 玉城述旨趣、賜單衣三・羽織一、而歸國  
 反命矣、祭主與左衛門重政從之、

「北郷久加譜中」

後  
 編 舊 記 雜 錄 卷九十一

家 久 公  
 光 久 公

寛永十四年 自正月  
 至九月

〔表紙〕

「正文在伊勢兵部貞榮」

猶以上屋敷皆々無事之由、目出度候、下屋敷へも伊  
 勢羈有之義ニ候之条、諸事心を添、可然之様ニ可被  
 申付候、

今度飛脚ニて之書狀、委令披見候、然者我等所勞、於于  
 今然々与不得驗氣ニ付、久志本殿先以可有上洛之由候つ  
 る、其趣土井大炊頭殿具被爲聞、公方様被立 御耳候  
 之處、無御心許被 思召之旨被成 御錠、久志本殿今少  
 此地へ留置、弥可致養生之旨、御奉書到來候、誠以忝次  
 第、不淺義共ニ候、御請之儀者、大坂阿部備中守殿迄指  
 上せ候、土井大炊頭殿へ之御返書之義者、此方之飛脚ニ  
 て申越候間、於其地成合候様相調心得候て、御礼可被申  
 候、煩之様子も、此比者少々快覚候、薬も次第ニ致相當  
 欵と存候之条、弥以可致療治候、かやうの煩者此方へも  
 多く有之由候、いつれも急ニはたくと致本復病ニても  
 無之由申候条、以其心得致養生事候、猶追々可申越候、  
 謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」正月四日

家久 ○ (印)

伊勢兵部少輔殿

989 「古御文書三拾卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶以寒も早明申候而、弥可被爲得御快氣と目出度奉  
存候、以上、

幸便之間一筆致啓上候、然者頃日者弥被得御快氣之由、  
別而目出度奉存候、公方様も不大形無御心元被思召候  
處、一入御機嫌共御座候、御當地相替儀無御座候、猶追  
く御吉事奉待候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

正月十一日

土井大炊頭 (花押)  
利勝 (判)

松平大隅様

人々御中

990 「古御文書三拾二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

遠路是迄尊書、殊兩種被懸御意、忝奉存候、先以御病氣  
之由、無御心許奉存候、猶御使者口上申上候之間、不能

一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

正月十四日

戸田淡路守

氏經 (花押)

中納言様

尊報

991 「兒玉利昌譜中」

寛永十四年丁丑正月、公又喉腫而猶病困、典醫留滯日  
診療治、利昌及東郷重位等恒侍左右、晨夜竭忠誠、閏三  
月二十九日、式部少輔辞還江戸、稍癒故也、四月 大家  
更命京尹板倉重宗、遣外科祐慶法印、來療所腫、於是掖  
庭多事、乃五月十九日、公使伊東仁右衛門祐昌、命利  
實等、亦爲納殿役、以供其事、二十日祐慶法印遂來療病、  
當是之時世子在江戸、貞昌等從俱深惶憂、屢獻書問病、  
輒利昌等以白于 公、故其書多賜利昌云、

992 『正本在兒玉氏』

一書令啓上候、今度飛脚參候而申候、御氣色能御座候由、

目出度奉存候、御脉も地脉ニ成候、於今御草臥計殘候、  
弥々次第ニ可爲御本腹与奉存候、奉期後首之時候、誠恐  
誠惶敬白、

『寛永十四年』

正月十二日

薩摩守

光久〔御判〕

進上

黄門様

(貼紙)  
「家久公御譜ニナシ」

993

「古御文書三拾式卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

當春之御慶目出度奉存候、相國様御機嫌御同篇ニ被成  
御座候由、於其地御氣遣ニ可被思召与奉察候、去時分久  
志本式部御藥被召上候得共、當月十三日より又玄治法印  
御藥被召上候由申來候、御吉左右承度迄ニ御座候、猶追  
而可得尊意候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「寛永十四年」

正月廿一日

松平越中守

○〔花押〕  
定綱〔判〕

994

中納言様

人々御中

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置家臣川上太郎左衛門」

返く心ちすこしよくこそ候へく、かしく、

このほどはうとく敷、あまり音つれ不申候まゝ、一筆  
をくりしんし候、此梅の花さきわけ候て候、たうねんは  
しめて見申候間、一枝手折そへ申、やかて御いて候へく  
候、又とかしく、

「朱カキ」

「寛永十四年正月」

廿七日

より

ノ

むもし

まいる

いゑ久

995

「正文在佐藤五郎右衛門」

けふの音つれのため、一ふて申候、八まんの御馬ハさか  
しく候哉、久にうけ給候ハす候、又し、おとりハまいり  
候哉、いか、と思ひ候、わか身のともおなし事にて候、

かハる事なく候、うないこハいまた御入候ハす候哉、も  
はや御さ候する事候、其おもてにハくしらハ見え不申候  
哉、此あたりにハ見まいり候へ共、いまたとり不申候、

二月にうつり申候ま、心もよく候ハん事にて候、然

くにもなくこそ候へく、又くかしく、

「朱カキ」

「寛永十四年正月」

廿八日

より

〇

そもし

まいる

いゑ久

996

『庄内高城東霧島六所権現棟札』

合奉造立東霧島六所権現宝殿一字云々、

大檀主源朝臣家久公・光久公御子孫云々、

寛永十四天丁 丑 正月二十七日

地頭三原次郎左衛門重貞

奉行伊集院備前守久望

坐主性秀法印

大工武元兵右衛門尉清方

997

〔貼紙〕  
「此書、家久公御譜ニハ無之」

葛西宗兵衛尉爲御使、今月廿五日此元江參着候、今月

六日之御日付之御狀慥相届申候、

一 黄門様御氣色、從旧冬今月六日迄之御様子慥相聞得

「光久公」

「御典醫」

薩州様達貴聞候、久志本殿其地江緩くと可有逗留様

ニとの御奉書之御請、被成御持せ候、其早打ハ今月四

日之御日付之御狀共ニ而候、其節之様子ハ、久志本殿

ガ茂細くと書狀承候間、大炊拙者讚岐守江申入候、六

日之日之御左右ハ間も無之、又別ニ新敷儀も無御座候

間、薩州様被聞召置候、

一 久志本殿其元江不被着前廉、以書狀申入候、黄門様

あなたこなた江被申請候儀、御遠慮可入候由、細くと申

入候つる、其趣も伊東仁右衛門殿を以東郷肥前殿・児

「祐昌」

「重位」

玉筑後殿江被仰達候由、定 黄門様可被聞召之与存候、

「利吉」

黄門様可被聞召之与存候、

御氣色ハ定次第ニ可爲御快氣候ヘ共、承及たる分ハ、中々當年此元ヘ御參府ハ罷成まじき御様躰之由候間、弥可爲其分候、然処ニ御心易御慰かちニ御座候なと、何方よりも此方江被達 上聞候ハ、笑止之儀ニ候、もはや久志本殿ハ此飛脚其元ヘ可致參着時分ハ、被爲上儀も可有之候得共、縦被爲上候跡ニ而も、當年中ハ萬其御心持入可申候、春ニ成候ヘハ御狩之時分ニ而候条、ちと御狩などへも御上り之様ニと被申衆も可有之候得共、狩と申儀ハ殊外御達者ニ候ハてハ不能成儀ニ候、名之高キ事候間、自然左様共候ハ、狩ニサヘ御上り候など、御取沙汰も候ヘハ、御爲可惡候、久志本殿逗留中ニハ式部殿ヘ被仰理、餘御氣屈候間、ちと何方ヘ御心易所ヘ御出候て、晝御休をも被成度之由被仰候ハ、久志本殿も定御養生之爲ニ被伸御氣儀ニ候条、一段よく候ハんと社可被仰候間、左様ニ御理候て御出候ハ、少も後々のたりに成申ましく候、此御心得内と御分別入可申候、長と之御事候間、御内

取計被成御座候而者、御氣詰り可申候間、次第ニ御氣力付申様ニ候ハ、御心安所江ハ、餘世間江響不申様ニ被伸御氣儀ハ、尤左様ニ可有候、從隣國茂其元江者、不断人を可被付置候、江戸方之御目付儀不及申候、不可有御油断候、一南部殿之儀、去年者四月參府之筈ニ而候処ニ、氣相惡候つる由にて、御理ハ二日江此地ヘ參府候ニ付、毎年四月ニ東國・西國衆被相替候様ニ与、去々年被仰出候處ニ、其儀相違曲事之由被仰出、御目見得無之、下屋敷江逼塞候、其後色々不行儀之儀共、上聞候て身上可被相果ニ相究候、黃門様御事ハ御病躰之様子を久志本殿被爲見候間、御氣遣ニ及はぬ儀とハ申ながら、其用心肝要ニ御座候、一蘇齋と申表具屋、是ハ最前三原左衛門佐内之者ニ而御座候処、表具仕候て當町ヘ罷在、此方之御細工などをも節と被仰付者にて御座候、彼者今度御本丸之御作事御座候ニ付、張付を請取申たる由候、然處張付之下張



二 黄門様之御名御座候書狀候つる間、如何様之儀欵

与存、致懷中此方へ持來候間、向後御心持之爲ニ致進

上候、薩州様へハ於此方懸御目候、是ハ先年 薩州

様・同御懷様など、皆々御同道ニて御上り被成候時之

儀と相見得候、豊後之御横目衆之狀にて候也、か様之

儀そこく、方細々御注進申上と相見得候間、被御覽置

候へハ、御心持ニ罷成事候、

一 於御國錢被爲鑄候儀弥相究候ハ、黄門様方之御狀、

御年寄衆江可被承候間、重而御注進待申候、左様ニて

此方ニて御書相調候ハ、其元よりの可致 御意次第

候、尚期後音候、恐惶、

正月廿八日

『寛永十四年』  
『三原左衛門』  
『重饒』  
『伊勢兵部少輔』  
貞昌

『四老在本藩』

鎌出雲殿

山民部少殿

下野守殿

『川上左近將監』

久國  
『三老皆在江戸』

『嶋津』  
『久慶』  
彈正殿

998 「雜抄」

覚

米拾三石者

右者當年飢饉ニ付而、申請候、當秋銀子・米之間を以、

上納可仕候間、可然様御披露奉頼候、以上、

寛永十四年

二月三日

伊地知佐渡守判  
(重順)

新納加賀守殿

町田勘解由次官殿

参

999 『真本兒玉氏藏』

歳暮之爲御使者与、税所但馬守罷上候、其之地御無事之

儀、目出度奉存候、隨而皆々巻物被下候、忝奉存候、然

者御氣色於今すきくと無之様ニ被仰候、式部殿御藥無

油断參候ハ、然々には可爲御快氣与奉存候、將又今度

1000

十月十八日家久公妾崎山氏生 翁主乃久竹妻  
 芝の繁昌被成候付、被仰遣候として、芝方被仰候、我等名  
 可付申之由、御意ニ而候と承候、我等若御座候間、時御年  
 存候へ共、餘左様ニ候得ハ、還而慮外存付申候、定而巨  
 細之通者、芝方申可被上与存候、猶追而可申上候、誠恐  
 誠惶敬白、

『寛永十四年』 薩摩守 光久(花押)

進上 黄門様

「此御書、家久公御譜ニ無之」

「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

今度以御条書被 仰聞候内、別而御念入可申儀、細々  
 口上ニ雖申達候、御病中不被聞召屈儀も有御座、又若  
 あひにて被聞召候ハ、たがひの申落承ちがへも可有  
 御座と存、以書付致言上候、  
 一けんさニ付北郷殿跡之儀ハ、 又八様へ可被仰渡処、  
 式部様へ御定之儀御恨之由、被思召との御事ニ御座候

由、是ハ、誠御女儀又ハ分別之不至人の申事を被聞召  
 ての、御あく心たるへく候、其故ハ 又八様御事ハ  
 薩州様へ御さし次にて御座候、然處北郷殿へ跡を被成  
 御次候ハ、はるく御位下可申候、適 守護之御さ  
 し次ニ御むまれ被成、過分ニ御位御さかり候ハん事ハ、  
 非御本意候、如此之儀を以、北郷殿へ跡之儀を 又八  
 様への御心あて無御座候つるよし罷成儀ニ候ハ、被  
 仰理度儀ニ御座候、萬一左様之儀御直談なども可有御  
 座時ハ、是非被仰達、御心もちもほとけ候やうニ候へ  
 ハ、どなたの御ためニもよき御事ニ御座候、北郷殿ハ  
 ちと御分限にて御座候、左様之儀を餘御うらやミ被成  
 儀も如何御座候、 惟新様ハ 龍伯様の御さし次にて  
 御座候つれとも、眞幸七か所御持被成候、北郷殿ハ從  
 前代之大分限にて、其時分之儀ハ 惟新様より二そう  
 はいほとも分限にて候つるとこそ、北郷殿ハ小身ニな  
 らせられ候へ、もとくハ於御分國、薩摩・大隅・日  
 向相そろへ御領候時、北郷殿ニ御ならひ候衆ハ無御座

候つる、惟新様ハ伊東ニ御さし合候て、久敷さかひめに御住城候て、朝夕敵ニ被成御取合、大事ニ合戦共被成、伊東之衆歴々を、殘すなく御うたせ候て、終そのいたみにて日向御手ニ入候間、日向半分をも可被進儀にて御座候つれとも、右ニ如申上候、北郷殿よりハ御少分限にて御座候つる間、左様之儀も御分別ニ入申事ニ御座候、

一又八様へ、加治木惣別被成御付たる由、世上之取沙汰ハ御座候つれ共、おもてむきよりとかく御沙汰無之候間、如何与存候處、今度被仰聞奉得其意候、先以目出度候、就其申上事ニ御座候、かちきの惣高 又八様へ被付進候、尤以御使可被成御内談候つれ共、御心持有之儀にて、先急ニ被仰渡候由、薩州様へ以御使被仰入可然候はん哉、從 又八様も御斟酌ニ思召候へ共、黄門様御意之儀御座候間、先御領掌被成候由、以御使被仰上御尤奉存候、御國之儀ハ向後 薩州様被成御存儀ニ御座候間、少ニても御兄弟様達へ御知行被進儀ハ、

御内談にて相濟申様ニ御座候而、目出度奉存候、左様ニ御慇懃ニ被成候ほと、後々たかひの御爲能可有御座と奉存候○事、

一又八様へ猶以御知行被進度候由御尤候、左様候ハ、今いかほと可被進候哉、今度加治木へ高を付被進候而、大かた二万石ニも及可申候哉、先二万石ほとニ成御申候て可然御座候はん哉、最前一万石被進候、其後加治木ニ罷居候直之衆を御付被成候、今度又高を付被進候而、いかほと御知行之高あかり申候哉、いまた二万石ニ足不申候ハ、其上を被進、先二万石ニ成御申候てハ如何可有御座候哉事、

一薩州様へ御國を被成御讓候てより、黄門様御隱居分◎二万石も御もち被成、其御跡次として、右御知行を又八様へ被成御讓、當時又八様之御跡を、寶壽院殿へつかせ御申候而ハ、いか、のよし御意候、これハよく御思案入可申候、黄門様之御跡ハ、薩州様にて御座候處、又 黄門様之御跡と可有御座儀、如何ニ奉存候、

其故ハ、御代々御家を被成御次候、御嫡子へ御ゆつり候て後、御隠居分之御知行其まゝにて、御嫡子へ參候、此儀ハ◎大身小身共ニ古今相定たる儀ニ他大身小身共ニ御座候間、御新法之様ニ御座候而◎ハ、彼是後々之御爲、如何ニ御座候間、又八様へ猶以御知行可被進と 思召候ハ、只今之御知行之高を被聞召合、二万石ニ成御申可然御座候ハん哉、二万石ニ御成候儀ハ、過分之御事にて御座候、 惟新様ハ最前ハ三万石にて御座候つれ共、かちきへ御上り候てよりハ、二万石ハ 黄門様御藏入ニ被相加、一万石にて御内外共ニ被成御調候、如御存諸事結構ニ相調申候、又八様御事も、二万石にてハ諸事可然相調申候哉之事、

一寶壽院殿へ 又八様御跡を可被進由御座候へ共、右ニ如申上候、 又八様ハ今之御知行不相替候時ハ、 又八様御跡被成御次儀ハ有御座ましく候間、是も今ちと御知行可被進と 思召候ハ、當御知行千五百石之上○ニ今千五百石被成御加、三千石ニも成御申候へハ、今之一

はいニ御成候、 御子様たち殊外御小身之御衆あまた御座候間、左様之御衆ニも御知行被進候ハん間、御知行入可申、左様候ハ、薩州様御くら入過分ニ引入可申候間、公儀御調も弥可難成候間、其御心持も可有之候哉、御袋様などハ可成ほと御知行可被成御持やうにと、可思召候へ共、それハ一かたの御分別にて御座候、又八様御事ハ御別腹にて御座候間、向後御兄弟之御間も如何可有御座哉と諸人存候、是ハ人之氣遣尤ニ御座候間、 又八様御爲をおほしめし候ハ、いかにも御身上を御引入候やうに御心もちにて、 薩州様へよく御奉公可被成との御心中を、ねてもさめても無御忘やうニとの、くれく御意見が御身のために候、御知行などの儀ニ何かと被思召、向後之儀を大形ニ思召候而ハ笑止奉存候、いきりやうなどの沙汰候ニ付ても、たかひに御うたかいおこり可申候よりなどの申分、まことニても偽ニても笑止千萬なる御事にて候、これもはや世上ニ皆申ふらし候、かやうの時分、御知行を過

分ニ被進候ハ、御分別不達様諸人可存候間、右ニ如申上候、先二万石ほどにて可然御座候ハん哉、よくく御思案尤ニ奉存候、如此御おんミつの儀を承、もより申たると 思召被仰聞候儀、あさからさるかたしけなさにて御座候、就其、近比似相申さぬ理口共申上候、ばちをあたり可申と奉存候、今度けんきに御たり候儀ハ、世上ニかくれ無御座候間、御ふくろ様よりふかくくとせしをなされ、色と取沙汰申やうに御聞付候て、御おとろき被成候、少も 薩州様などへ御あくい無之候、向後弥左様之御心もち有之ましきと御申ニてハ、いか、可有御座候哉、 又八様ハ去年諏方之於御前、皆とせし被仕候、是非ニ血判可被成よし被仰候て、各同前ニ被遊候、これも一段之御分別にて御座候、又去々年 黄門様被成御上洛候時分、我等もかちきへ參候て、從彼地致御供候、其時 又八様之御座所へ、我等をめしよせ被仰聞候ハ、先年御袋様御あく心之儀共候つる由、其沙汰候、其段ハいかやうにも候

1001

へ、 又八様ハ少も無御存儀候、向後弥被對 薩州様御別心有御座候間敷候由、委敷御念入申候儀を被仰聞かんじ奉存候、其段罷上候刻、委 薩州様へ申上候、又八様御分別ハ一段御おとなしく御座候、弥其御心もち不被成御忘様ニ、被仰候て御尤ニ奉存候、御間あしく成申候ハぬやうニ、 薩州様御前之儀ハ、委可申上候、今までハ少も左様之御心持無御座候、於其段者可御心易候、此旨可然之様可御披露候、恐と謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

二月九日

伊勢兵部少輔（花押）

貞昌判

東郷肥前守殿

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以松ふしなし之材木、當御地ニも無之候処ニ、一段之御進上、可然奉存候、以上、

一筆令啓上候、然者御氣色今程者弥可爲御快氣と、珍重奉存候、當御地相替儀も無御座候、將又御本丸御作事ニ

付、松ふしなし六寸角式千本御進上被成、御尤奉存候、

御年寄衆御披露被成候而、御材木奉行衆請取被申候処ニ、

申渡候処ニ無相違請取被申、木心も一段能御座候由被申

候条、此度御作事ニ遣申候様ニ、弥可申付候而、御心安

可被思召候、猶追而可奉得御意候条、不能詳候、恐惶謹

言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

二月十一日

神尾内記

○元勝(花押)  
【判】

松大隅守様

人々御中

1002

「家久公御譜中」

「正文在川上式部久重」

返く参候て申へく候、かしく、

このほとハ物とをく思ひまいらせ候、わか身こ、ちもち

とよくおハし候ま、やかて参候て申へく候、なにと

よしも候ハね共、とりむかい候、又とかしく、



「朱カキ」  
「寛永十四年」十三日

「在口裏」

千竊もし

まいる

中納言

いゑ久

1003

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

覚

一 國分移ニ付始末之事、

一 薩州來年下向可爲候哉、又來年者成間敷候哉、いか、

一 之事、付於下向者兵部少輔供可爲事、

一 我等隠居之事、付居所之事、

一 又八郎上洛之事、

一 來年於上洛者又八郎・玄番頭同心之事、

一 東之丸縁結之事、

一 安藝守之事、

一 又八郎かちき役人之事、

一 采俊之事、

一 芦谷權左衛門尉兄之事、

一攝津守内儀、付新八郎内儀之事、

一犬追物之事、

一万部之事、

一來年於上洛者老中供之事、

已上

〔朱力キ〕  
〔寛永十四年〕二月廿一日

1004

〔御文庫三番箱五卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一御隠居之事、付居所之事、

一一ヶ条之事、

一薩州下向時分之事、

一式部太輔へ可付人之事、

一東之丸縁結之事、

一肝付長三郎縁結之事、

一又八郎上洛之事、

一加治末役人之事、

一万部之事、

已上

〔月日ナシ〕

1005

〔光久公御譜中〕

嚴親家久去歲冬臥病在牀褥、光久以在江都之故、不得走觀其病、今茲寛永十四年二月、家久以平田盛右衛門純正、讓錫當家傳來之本尊愛染明王之像並摩利支天之像・鷹之巢之短刀ナイカガタ・眞利作之太刀・光忠作之腰刀也、就中之愛染之尊像者、忝

嵯峨天皇命弘法大師、以谷渡藤、擬一刀三拜之敬心、所彫刻之五指量之佛體也、俗呼谷渡愛染也、右大將賴朝公取恭信甚深、以讓于忠久、所延及家久者也矣、其餘亦咸所重之寶器也、光久謹受之、

1006

〔正文在文庫〕

以上

平田盛右衛門尉被差遣、御氣色之様子細々被仰聞、安

堵仕候、

一 御氣色相替儀茂無御座之由、先以目出度奉存候、乍去御喉之御痛すきく共無御座候由、御躬屈奉察候、依之御草臥之由、御尤之至候事、

一 餘く無心許奉存、致御立願兩度、願文進上候儀處、御(行カ)

懇懃之御礼忝候事、

一 愛染明王之御本尊并摩利支尊天今度被下候、是ハ谷渡之愛染与申候而、御當家代く相傳候弘法之御作名誉之尊像ニテ御座候由、別而忝頂戴仕候、永く可致秘藏候、誠御病中ニ如斯御心付、不淺奉存候事、

一 鷹之巢之ちいさ刀・眞利之御太刀・光忠之刀御持せ被成候、慥ニ受執置申候事、

一 於御城之御誕生之儀者、松平隠岐守殿へ致御内談、委承候、必定來月之由候、若御姫様にて御座候者、御産衣可有御進上之由、皆く内くニテ御用意之由候間、河上將監・伊勢兵部少輔より、京都へ申遣之由候事、  
一 久志本式部少輔殿急度可被上之由候ニ付、早打被差上

候処ニ、此方從御年寄衆御奉書被指遣、 黃門様御心

次第可有逗留之由、被 仰出候旨、相達、御祝着之由、右御奉書之御請持參候次飛脚へ、御傳之御狀、昨日從松平伊豆守殿御届候て、致拜見候、御喉之上ニんにくを御かふせ候て、最前(炎カ)炎ニハ直ニ又

炎爲被成由候、左様ニ共被成候者、御喉之痛御心安可

罷成候、殊に御食事少す、ミ申之由、被仰聞候、一段

目出度奉存候事、

一 以彥書委敷申上儀共御座候間、盛右衛門尉被召寄、直ニ被聞召上、其御心得肝要ニ奉存候、尚奉期後首候、

誠惶誠恐敬白、  
「寛永十四年」  
二月廿九日  
松平薩摩守 ○(花押)  
光久〔御判〕

進上  
黃門様

1007

〔本文書ハ一〇〇六号文書ト同文ニツキ省略ス〕



1008

「兵庫忠朗譜中」

寛永十四年三月、爲質如江府、同十五年冬、任充歸國、其後又質江府三度也、

1009

『眞本兒玉氏藏』(貼紙)  
「此御書御譜中ニナシ」

一書致啓上候、然者正月廿八日之尊書、御年寄衆江御奉書之御請被進候便ニ致到來、拜見仕候、其御書面ニ、御喉之上ニ灸を、最前者にんにくをかふせられ、其上ニ被遊、翌日ニ者にんにくを御除候て、爲被遊との御事ニ御座候、夫より已後之御左右、今日迄無之候、御食者ちと御す、ミ申候様ニ被仰聞候、定弥可爲其分与奉察候、するくと御快氣被成候様ニと申候て、今月二日〆同八日迄、愛岩之圓福寺頼入、一七日護摩被成修行候間、即御札守致進上候、目出度可被成御頂戴候、將又、久志本殿も依御奉書之趣逗留、寄特成仕合、大悦存事候、尚奉期十四年三月廿九日歸京後音候、誠恐誠惶敬白、

『寛永十四年』  
三月九日

松平薩摩守  
光久(花押)

進上  
黄門様

1010

「御文庫四拾九番箱四卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

尚以如斯書狀相認申候処ニ、昨晚以 上使、御氣色能御座候間、爲御見舞之登 城、相留可申由被 仰出候、御菓子共被下、目出度候、相替儀候ハ、追々可申上候、以上、  
追而申上候、先書ニも如申上候、公方様正月廿一日より御虫氣之由御座候て、其時分皆と毎日爲御見廻登城候處、中比早御能御座候条、毎日之登城者可爲無用之由、從御年寄衆被仰ニ付、二日ニ一度允御見廻ニて候つる款、頃者又毎日之御見舞ニ罷成、我々も其分ニ仕候、定今月三日ニ者無餘儀節句ニて候間、御目見得可有之与存候へ共、無其儀候、然時者御氣色しかとも無御座欵と申候、乍去三日ニも御能爲被 仰付由候、二月より三月迄七度

御能爲被仰付由候て、御能組大倉長右衛門尉より見せ申

候、御能ハ西丸之御山里ニて御座候由申候、表方ヘハ誰

も爲存人無御座候由申候、何も此比者御氣色よく御座被

成由申候、在國之從諸大名も使進上之由候間、御使与申

候て御書相調、御年寄衆へ指出可申内談仕候、尚相替儀

御座候者、追而可申上候、誠惶誠恐敬白、

「朱力平」  
「寛永十四年」

三月九日

松平薩摩守

光久（花押）

進上

黄門様

1011

『兒玉氏家藏』（貼紙）「家久公御譜中無之」

請取

鳥目五拾貫文

右者、東之丸御姫様御齒黒御祝ニ付、彈正奥方「嶋津」ヘ御給被

成候ニ付、慥ニ請取候而相納申候、以上、

「寛永十四年力」

丑三月十二日

鮫嶋大藏（余巻）

（花押）

兒玉筑後守殿

參

1012

『全』

請取

鳥目三拾貫文者

右者、御姫様御兄弟就御齒黒被遊候、御祝物として被進、

御妹様方慥ニ請取候早、

「寛永十四年力」

丑三月十二日

仁禮六左衛門（花押）

兒玉筑後守殿

參

1013

「古御文書三拾式卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

幸便之間令啓上候、先以 公方様御不例頃一段被爲成御

驗氣、御膳も如常被聞召候、當月者、御本丸・二之丸江

も折々 出御被成候、近日 御目見も可有御座由候、下

々迄も安堵大慶不過之御事ニ御座候、御心安可思召候、

然者尊下御所劳如何、御快然ニ御座候哉、無御心元奉存

候、折節以使札も御見廻申入度雖所存候、遠路故疎略罷

成候、久志本式部殿緩と与滞留、御藥御相應之由、追而御平復可被成与奉察存候、爰元何も相替儀無御座、薩广守殿御無爲ニ御座候、此等可御心易候、諸事追而可得尊意候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
三月十三日

中納言様

人々御中

松平越中守 ○(花押)  
定綱(判)

1014

「家久公御譜中」  
「正文在琉球國司文庫」

猶以此比病中之故、用印判候、以上

去年之夏從江戸罷下候、爲左様之祝儀、御使札、殊燒酎三壺并肴二壺贈預、大慶不少候、弥以江戸表當地之義も静謐候之間、可御心易候、尚期後首之時、不能詳候、恐惶謹言、

三月十五日

中納言家久御在印

謹上 中山國主

1015

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶と即使申候茂庭周防所へも、御太刀・馬代并御小袖被下置、是又忝存候、以上、

繼目之御札申上候、爲御祝義遠路御使者、殊更御太刀一腰・御馬一疋銀子三十枚、御小袖十贈預、誠被入御念、別而忝存候、將又御煩故御參勤御延引被成之由、無御心許存候、御養生干要存候、何茂追而可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
三月十六日

松平大隅守様

御報

(伊達)  
松平越前守  
忠宗 (花押)

松平大隅守様

御報

忠宗

□平越前守

1016

「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

越前守家督被 仰出候付而、從 家久様御使者忝被存候、就之私所へも被成御書、殊御太刀一腰・御馬壹疋・御小

袖三致拜領、冥加至極奉存候、御次而之刻被成御意得、  
宜御披露奉頼候、恐く謹言、

土井大炊頭 ○(花押)  
利勝 [判]

〔朱カキ〕  
寛永十四年

三月十六日

茂庭周防 (良總)  
○(花押)  
良 [判]

薩摩

中納言殿

御報

嶋津下野殿

〔家久公御譜中ニ在リ〕

〔此写御文庫廿三番箱十九卷中ニアリ、其末紙ニ左ノ如シ〕

寛永十四年閏三月八日自江戸當地御道具兩人持下候御奉書之写也、

御荷内衆吉田次郎兵衛殿・川崎新左衛門殿にて相渡候

1017

以上

去月二日之御狀致拜見候、今度新錢鑄候事就被 仰出、

於御領分茂新錢被申付度之由承候、以來之儀者、國々所

々にてても可被 仰付候之間、重而之御沙汰ニ可有之尤候、

委細者伊勢兵部少輔迄申入候、恐く謹言、

1018

〔家久公御譜中〕

寛永十四年丁丑、家光公御不豫故、爲奉候 御機嫌、

差使者於都、則御老中贈奉書、其后亦再遣使价、共見于

左矣、

〔朱カキ〕  
寛永十四年

三月十九日

阿部豊後守 ○(花押)  
忠秋 [判]

松平伊豆守 ○(花押)  
信綱 [判]

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝 [判]

1019

〔古御文書三十二卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

尊書致拜見候、今度御不例之儀無御心元被存、被差越使

者候、達 上聞候處、被入念之通、御機嫌思召候、然者

御氣色之義御快然御座候間、可御心安候、委曲使者可爲

演説候、恐く謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十四年

三月十九日

阿部豊後守  
◎〔花押〕  
忠秋〔判〕

松平伊豆守  
◎〔花押〕  
信綱〔判〕

酒井讃岐守  
◎〔花押〕  
忠勝〔判〕

土井大炊頭  
◎〔花押〕  
利勝〔判〕

薩

中納言殿

貴報

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津筑後忠置〕

返く春中にも御こし候へかしと思ひ候へく候、又

くくかしく、

久しくこのほとハ申うとミ候、わか身はれ物もちとつ、

よく候、やかてなをり申候へく候、此くしらす(昨日)のふと、

め申候間、はしめてにためつらしく候ま、をくり申候、

めつらしく候ま、御らんし候へく候、なたる花も御

入候哉、見申度候、五もしさまへも御心得候へく候、又

くかしく、

〔朱カキ〕  
寛永十四年  
三廿日

中納言

おふくろ

参

いゑ久

1021

〔家久公御譜中〕

〔正文在琉球國司〕

猶以折節依不例、印判押申候、已上、

新年之吉慶多幸とと、聊〔本マ、〕雖事舊候、猶以不可有際限候、

是等之御祝言爲可申入、今度相良權兵衛尉指下候、仍御

太刀一腰・馬一疋令進覽之候、誠表祝儀計候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十四年 三月廿日

中納言家久在印

謹上 中山國主

「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

急度令啓候、然者先日如御沙汰候、於御國新錢鑄させられ候儀、御年寄衆へ被仰入候処、一昨朝、從阿部豊後守殿兵部少被召寄被仰聞候者、新錢於御國可被爲鑄儀者先被相延、古錢をもと／＼のことくつかひ候て尤ニ御座候由、以御談合被仰出候条、以其心得御國へ可申遣候由、御座候つる間、爲後日ニと存、於當座豊後守殿へ申入候者、新錢御鑄させ候て可被下之由兼而申候者、下ニ錢遣不罷成、餘之迷惑さの申事ニ御座候、古錢を御つかハせ候へ者、其上者無御座由申入候、今度も永々古錢を御つかハせ候而、御國などハ新錢入間敷候との儀ハ、遮而不被仰出候、若又新錢之儀者いつにても御鑄させ候ハ、左様之御沙汰も可有之候など、被仰候、其御口引を承得候者、新錢を御國にて御鑄させ度と思召候を、即不被仰付候而、從此方如何敷可存と被思召候御口引之やうに聞得候間、右ニ如申候、古錢を向後御つかハせ候へ者、新錢之沙汰入不申候由申置候、大形永々古錢つかひニ可相

究と承得候間、下々無氣遣弥古錢つかひ候やうに可被仰渡候、左様ニ候ハ、最前從矣許被仰遣候錢替り候時之札を御ひかせ尤候、最前將監罷出、豊後守殿へ兩度錢之儀ニ付致候、得御意候時、加藤勘介殿御案内者にて、殊外被入御精、御國下ニ錢遣無之迷惑かる由、豊後守殿又松平伊豆守殿へ委被仰入候、今度如此被仰出候間、古錢つかひ可申之由被仰出、別而國許くつろきニ罷成候、忝思召之由、從薩州様勘介殿へ御頼候而、右御兩所へ御札被仰、雖而從大隅守殿御札可被仰上候由候ハ、弥古錢之落着可相究候、若又被仰様共候ハ、追々可申入候、若下々疑候て古錢つかひかね可申儀も可有之候条、御藏より古錢取やり候て、下々へも御ミせ尤候、爰許にて算用被仕候衆之被申候者、古錢すたり候へは、銀子千貫目程之御損有之由候、然時者古錢御つかハせ候儀、一段目出度御事候、委細者三日中、平田狩野介殿爲御使被罷下候間、其時分委可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

三月廿二日

三原左衛門佐○(花押)  
重饒判

伊勢兵部少輔○(花押)  
貞昌判

川上左近將監○(花押)  
久國判

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

下野守様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

下野守様

参

久國

川上左近將監

伊勢兵部少輔

江戸ヲ丑三月廿二日ニ打立候飛脚、後三月八日之朝下着候、

一新錢鑄之事、

一古錢遺之事、

1023

「眞本兒玉氏藏」

去月九日之早使同廿七日致到來、從彈正大弼久慶・下野守久元之

書狀并久志本式部少輔殿より伊勢兵部少輔之書狀、何も

披見申候、先以御氣色相替儀茂無御座候之由候、御唯之

腫物最前口明候所之側、又腫出申候之様ニ今度相聞得申

候、御痰血なども出申、御痔病も指發候之由、種々之儀

致到來、可爲御草臥与千萬無心元奉存候、頃之御様子、

近日又御左右可有之与相待申候、將又公方様御氣色も

はや御能御座候て、此頃者節々御城廻へ被爲成、御遊山

之由候、乍去、昨朝之朔日ニも、御目見得無御座候、諸

大名同前ニ、我等にも致出仕候処ニ、大炊頭殿・讚岐守

被出候て、雨降候ニ付、如何ニも緩々と被成御寢候間、

左様ニ心得候て、皆々御暇被成候、尚奉期後音候、誠恐

誠惶敬白、

「寛永十四年」

潤三月二日

松平薩摩守

光久(花押)

進上

黃門様

(貼紙)  
「家久公御譜中ニ此御書無之」

1024

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

先日已後以書狀不申入、無音所存之外候、然者御不例之由、承及候、如何御座候哉、無御心元存候、定而可爲御快氣存候、此邊別條之儀共御座候間、可被御心易候、猶

期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」閏三月五日

松平大隈守様

雅宣

松平大隈守様

雅宣

飛鳥井中納言

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

追而南部酒一樽進覽、飛札之驗計候、已上、

一筆申入候、中納言様御氣相倍、可爲御平愈と目出度申計候、乍聊尔、以飛札中納言様へ得貴意候、御取成所希候、於江戸者薩州様万端可得御指南候、猶期後音之節候条、不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

(マヤ)  
潤三月六日

嶋津彈正様

人々御中

相良壹岐守

○(花押)  
頼寛(判)

1026

「真本在愛甲藏記」

御座主様

「華林寺」

愛甲次右衛門尉

廉次

申上候、みちち參とて、安内者申請候へとも、二夜三日參籠申候御願ニ而候、左様ニ申候ハ、無理ニ御留可被成与存候而、いつわり申上候、眞平御免あるへく候、上様御定くう一參候ハ、拙者も無事ニ下向可申候、其刻彼是可申分候、恐惶謹言、

「寛永十四年」

壬三月十一日

廉次(花押)

1025



『愛甲氏文書』

尚と神火ニ合申候ハ、御生かわり可爲条、鹿兒鳴  
へ左様ニ可被仰上候、以上、

尚と其身存分之様子、大方我等迄被申遣候、後と之  
儀可爲之由候へハ、各爲各御存知候、直書御一覽之  
後、彼親所へ御遣候而御見せ可被成候、

態用飛札令啓候、仍昨日爰元江愛甲次右衛門殿參詣候、  
然者今日禪定「絶頂ニ作ベシ」參有度之由ニ而、案内者憑被申候間、即申  
付候、然處今度立願旨趣ハ、此度 黃門様長と御不例之  
儀、笑止千萬ニ奉存候、就夫、爲御生替二夜三日禪定ニ  
參籠由候而、御躰之内ニ籠被申候、前と茂取出し類、且  
又社人之類、其内ニ入候而、御幣帛など指置候事ハ有之  
由候、平人なとケ様ニ候事、無比類候、其上若神火等「廣」も  
候ハ、可爲夫迄之旨、從禪定被申下候、定三日之儀候  
間、追付成就ニ而ハ可有之候得共、當分御神火重と御座  
候条、今日茂御座候はんも不存間、前以申入候、爲御存

候、急之儘文牒大方ニ候、恐惶謹言、

『寛永十四年』

閏三月十一日

東郷肥前守殿「重位」

兒玉筑後守殿「利昌」

大久坊「平田」  
「宗如」

參人と御中

『霧島  
座主』 花林寺

秀應（花押）

『此三十七、時納殿役也』

「家久公御譜中」

「正文在頼娃左京久甫」

以上

一筆申候、定船中海道無恙、此比者可爲參 府与存候、  
我等煩も同篇ニ御坐候、腫物未愈候、乍去、次第逐日可  
致平復与存候、可心安候、恐と謹言、

閏三月廿二日

家久 ○ (印)

又八郎殿

「古御文書三十二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

去月廿九日兩通之御狀致拜見候、公方樣御不例之御様子被承度付而、重而使者被差越候、達上聞候處、度々念之入候趣、御機嫌被思召候、御氣色儀先(日)如申達候、追日御快然之御事候、將又貴殿所勞之儀、久志本藥相應之由、先以珍重候、雖然喉之痛不相止之旨、御書中之通申上候處、一段無御心許思召候、弥無油断療養肝要旨上意候、委曲使者可述口上候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」  
閏三月廿八日

堀田加賀守 ○(花押)  
正成(判)

阿部豊後守 ○(花押)  
忠秋(判)

松平伊豆守 ○(花押)  
信綱(判)

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝(判)

土井大炊頭

1030

薩摩  
中納言殿  
實報

「家久公御譜中」

自去年冬至是歲寛永十四年丁丑、家久在病床之故、遣使者於江府、稟當四月參勤延引之事、則達家光公之上聽降尊言曰、家久之病累日所被聞知也、無煩氣緩緩焉可保養云云、因投堀田正成・阿部忠秋・松平信綱・酒井忠勝・土井利勝閏三月二十八日連署之奉書、見于左矣、

1031

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御札致拜見候、御所勞之故、當四月參勤之儀難成付而、使者被差越候、右之趣達上聞候之處、煩之儀累日被知召候之間、無氣遺緩々与可被致養生之旨上意候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」  
閏三月廿八日

堀田加賀守

利勝 ○(花押)  
(判)

「古御文書三拾貳卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以羈忝羽被懸御意候、誠御病中ニ重畳入御念候段

忝奉存候、委細之段者伊勢兵部方可被申上候、以上、

尊書拜見、忝奉存候、隨而 公方様御不例ニ付、先度御

使者被爲差登候以後之御様子被聞召度、〔如〕<sup>◎思</sup>召重而使者

薩摩

中納言殿

貴報

正成<sup>○(花押)</sup>〔判〕

阿部豊後守 忠秋<sup>○(花押)</sup>〔判〕

松平伊豆守 信綱<sup>○(花押)</sup>〔判〕

酒井讚岐守 忠勝<sup>○(花押)</sup>〔判〕

土井大炊頭 利勝<sup>○(花押)</sup>〔判〕

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書致拜見候、然者當四月可被成御參府候之處、御煩故

被成御在國、御迷惑被思食之旨、奉得其意候、就夫各迄

以御使者御断被仰入候、貴殿御煩之儀、久志本式部方を

も被仰付、無疑儀ニ御座候處、爲入御念御事候、則各被

を以被仰上候、右之旨達 上聞候處ニ、重畳入念候段御  
機嫌共ニ御座候、御氣色<sup>(ツツ)</sup>逐日御本復被成候間、御心安可  
被思召候、將又當四月江戸御參難成ニ付て、是又御断之  
段、使者を以被仰上候、右之趣も御耳ニ立、勿論養生も  
半ニ被 思召候間、緩くと保養在之様ニと被仰出候間、  
上意之旨以連狀申達候条、無御氣遣御養生簡要奉存候、  
恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

閏三月廿九日

薩摩

中納言様

貴報

土井大炊頭<sup>○(花押)</sup> 利勝<sup>〔判〕</sup>

以上

「古御文書三拾二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

達上聞、緩くと養生可被仕之旨、以連狀被申入候間、可被爲得其意候、隨而久志本式部方永と逗留被申候得共、急ニ不被成御快氣候付而、余仁へ療治之儀被仰付可然候、先と可罷歸之旨、度と被申候得共、最前吐逆咽氣などの儀、右之藥を以相直候間、唯と腫物等之儀者、外科之藥をも御用候、此御痛ニ付御氣力衰候間、今少逗留候而御氣力之様をも被見合、脉脉之趣ニと、猶以藥被成御服用度被思召、被成御留之由、奉得其意候、併食事ハ自本も少成出申候由、先以珍重存候、御大病之儀ニ候之間、御心永緩くと御養生專要奉存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十四年

閏三月廿九日

松平大隅守様

尊報

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝【判】

尊書致拜見候、然者 公方様御氣色之御様躰、從薩守

殿節と被仰入候得共、遠國之儀候へハ、無御心元被思召之由、尤奉存候、頃者弥以被成御快氣、御城廻へも被爲成、折とハ牛込筋へも御慰ニ被成 出御、緩くと御養生被遊候之間、少も御氣遣被思召間敷候、度と入御念候御紙面之趣達 上聞候、隨而貴殿此中者次第御心能被思召候間、久志本式部方藥猶以御用被成候者、頓而御快氣可被成と思召之由、尤奉存候、乍去御大病と申、長くと御煩ニ付、事之外御衰被成之由、御道理至極存事候、乍此上無御退屈御養生被成、何とぞ被成御本復候様ニと、朝夕奉存候、隨而伊勢兵部方へ申談候儀被爲聞、御満足被思召之由、奉得其意候、將又御國之羈一羽饋被下候、寔遠路之所御懇情之至、別而忝奉存候、委細期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十四年

閏三月廿九日

松平大隅守様

尊報

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝【判】

「家久公御譜中」

先是典醫久志本式部少輔下于薩府、療治於家久之病、有日然以不得快驗、去年以來雖欲辭薩府數回也、或上言之、或勞之、滯在迄于此日、而少得驗氣、以故今茲閏三月二十九日、式部少輔辭薩州赴于江都、其后使北郷佐渡久加差于江府奉謝之矣、

「正文在伊勢兵部貞榮」

久志本式部少輔殿去年方此地へ被爲下、度く可被爲上由候へ共留置、煩も少得驗氣候条、今日上洛候、乍去喉之痛者前も同篇候、雖然餘永く逗留候間、任存分候、爲御禮近日北郷佐渡守差上せ候、細く其節可申遣候、謹言、

「朱方キ」  
「寛永十四年」 閏三月廿九日 家久 ○ (印)

伊勢兵部少輔殿

「正本兒玉氏家藏」

國分民部少輔爲御使被差上候刻、御書辱致頂戴候、仍又

「加治木主忠平」

八郎始被罷上候間、諸事可爲無案内候之条、添心可申候

由蒙仰候、疎意を存間敷候間、可易御心候、將又公

方様御氣色能御座候ニ付、各御見舞も先く可被相止之由

被仰出候、乍去先二日三日ニ一度宛可有登城之由被仰衆

も候間、各之様子見合申、惣様并ニ可仕与存事候、隨而

御氣色之御様子、國分民部少輔へ申聞候間、委可申上候、

然者半弓二張并尻籠矢迄被相揃致拜領候、誠ニ忝奉存候、

不斷側ニ召置申事候、頃者相續御左右承候、上井仲左衛

門も近日此元へ着候而、御氣色之御様子細く承候、御喉

之腫物最前之ハ口明申候て、又傍江腫出申之由候、如何

御坐候哉、無心元奉存候、從公義外科者被仰付之由候

間、目出度存候、猶追く御吉左右奉待候、誠惶誠恐敬白、

「寛永十四年」

卯月朔日

松平薩摩守  
光久 (花押)

進上「家久公」

黃門様

(貼紙)  
「此書、家久公御譜中ニ無之」

1038

〔本文書ハ一〇四〇号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1039

〔北郷忠直譜中〕

寛永十四年依 家久公御不例、久志本式部少輔下向鹿兒島、時忠直在江戸、家久公賜御書於忠直、

1040

其後者無首相過候、弥以其方可爲無事と存候、此比者漸又八郎事其地へ可爲參着候、於其義者、貴所事ハ定而被相替、可有歸國と存候、吾等氣色之儀も、于今同篇之躰候、從腫物毎日膿なかれ、未致平愈候之条、弥養生之義無油断候、久志本殿被指下候爲御礼、今度北郷佐渡守差上せ候間、一書令啓候、尚用口上不能委候、謹言、

四月十二日

家久

○〔御墨印〕

北郷式部太輔殿

〔七五〕  
北郷式部太輔殿

家久

1041

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津筑後忠置〕

返く式部殿もいづもしもなく御め見え候ハてハにて候、いかと思ひ候、とても今ほとにてハ有まし候、かハリ候事候ハ、申候へく候、かしく、

おりくのみつきき、あさからす詠めに入候、仰のやうに、わか身こ、ちもちとハよく候へとも、然くともなく共こそる申候、この比ハあつきおりふしにて候哉、心ならず御入候事候、五もしへも御心得まいらせ候、庭の花もちり、草花はかりにて候へとも、それも残らすさひしくこそ御入候へ、よろつ又とかしく、

〔朱カキ〕  
四月十六日

中納言

おふくろ

いゑ久

御返事

1042

〔古御文書三拾二卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

四月朔日之貴札同廿三日相届、拜見忝存候、上様御氣

色五日六日ニ御本復可被成御様躰与ハ聞え不申候、更共、  
少茂御氣遣ニ御座有儀ニ而ハ無之候由、承候間、可御心  
安候、貴様御氣分子于今然々共無御座候由、無御心元存事  
候、久志本殿も 公方様御不例ニ付而、其元御立之由、  
就其、此後之御養生如何可被成哉与、被思召通、御尤存  
候、相替儀○茂も御座候ハ、可被仰下候、我等儀も爰元下  
着仕、無事ニ罷在候、猶追而可得御意候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」  
四月廿三日

松大隈様  
御報

細越中  
忠利○花押判

1043  
『正本兒玉氏藏』

勝軍院、爲大山參此地江被罷越候ニ付、尊書謹而致拜見  
候、御氣色之御様子、此頃茂節々相聞得申候、弥次第ニ  
可爲御快氣候、雖不及申上候、無御油断御養生肝要候、  
仍 公方様御氣色も頃者御能御座候由、其沙汰候、乍去  
御目見得者于今無御座候、當時珍敷儀無之候、猶奉期後

音候、誠恐誠惶敬白、

「寛永十四年」  
卯月廿四日

松平薩摩守  
光久（花押）

進上  
黄門様

（貼紙）  
「此御書、家久公御譜中ニ無之」

1044  
「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

其後者以書狀も不得貴意、所存之外ニ奉存候、拙者儀後  
之三月ニ江戸致參上候、仍此御地無相替儀、上様御不  
例被爲成御快然、弥 御機嫌能被成御座候之由候条、御  
心安可被思召候、乍然爲御養生、未御表江不被爲成 御  
成ニ付而、惣様御目見致延引候、然者貴殿様旧冬方御煩  
氣ニ被成御座之由承、無御心元奉存候、此中努々不承付  
候て于今申後、迷惑仕候、今程御氣色如何御坐候哉、被  
仰聞度存候、久々致御無音候付而、旁爲可申述捧使札候、  
隨而御太刀一腰・御馬代・金子一枚并越前綿二百把・蠟  
燭千挺・南部酒三荷・白鳥二羽致進獻候、誠書中之印迄

ニ御座候、何も此者可申上候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

卯月廿五日

鍋嶋信濃守

○勝茂(花押)  
〔判〕

松平大隅守様

人々御中

1045

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

雖未申通候、令啓達候、仍中納言殿旧冬方御煩氣ニ被成御座候由承、無御心元存候、此中努々不承付候て、早々以書狀も御見舞不申入、本意之外ニ御座候、今程御氣色如何被成御座候哉、此段爲可申展使者致進入候条、可然様ニ御取成所仰候、隨而貴殿へ御太刀一腰・馬一疋并越前綿五十把・南部酒一荷・塩鷹廿令進入候、誠書中之印迄ニ候、何も此者可申伸候間、不克具候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

卯月廿五日

鍋嶋信濃守

○勝茂(花押)  
〔判〕

嶋津彈正殿

御宿所

1046

「雜抄」

覚

一人之賣買御法度之札、元和五年極月廿六日大橋に立申候、それより以前人賣買出入有之共、さばきハ無之候、其後之出入者被仰出、御出度之ことくたるへき事、

寛永十四年丑五月 日

1047

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以右馬頭殿御下ニ付而、御煩之様子委敷承知仕候、先以次第ニ被得御驗候段、玆重奉存候、以上、

一書致啓上候、其後者久以書狀も不申上、御無沙汰背本意奉存候、然者 公方様御不例、何も氣遣奉存候處、此節者次第ニ御機嫌好被成御座候、公私之大慶此事ニ御座候、隨而貴公様御所勞茂大形御驗被成ニ付而、久志本式部少輔被指上、玆重奉存候、不及申上候得共、御養生之



段、乍恐肝要奉存候、此表之儀、薩摩守様より節可被

仰上候、將亦御留守折節御見廻申上、川上將監殿申談候、

猶御吉更可被仰下候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

五月九日

高山主水正

盛明〔花押〕

大隅守様

人々御中

1048

〔家久公御譜中〕

家久之病未快、且喉生腫物而痛焉、因請外典醫於京師、

則御老中告諸司代板倉重宗之故、寛永十四年丁丑五月二

十日、慶祐法印來于薩府、詳見阿部忠秋・松平信綱・酒

井忠勝・土井利勝之奉書矣、

1049

〔古御文書三拾三卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

已上

貴札致拜見候、貴様腫物御煩ニ付、慶祐法印早速下着被

申、被治療治候之由、頓而可被成御平愈と奉存候、弥無

御油断御養生專要奉存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十四年〕

五月十一日

板倉周防守 ○〔花押〕

重宗〔判〕

松平大隅守様

貴報

1050

〔眞本見玉四郎兵衛家藏〕

一書致啓上候、然者慶祐被罷下候ニ付、則爲御禮御年寄

衆へ御狀被進候、兵部少輔致持參候、御氣色相替儀無御

座候由、一段目出度奉存候、仍細川越中守殿・松平越中

守殿從御兩所、於京都御養生可然之由、以書狀被仰入候

之由候、御返書如何被成候哉、定當時者可難成与被仰候

半与奉察候、先日兵部少輔へ松平隱岐守殿被成御達、御

上洛候て於京都御養生候て可然被思召候、尤江戸迄も可

有御參候得共、陸地遠路難成候間、船にて京迄被成御上

候而、公方様御氣色之御様子、從御國者餘程遠候之間、

於京都被成御養生候由被仰上、一段御爲能候ハんと被思

召候、乍去御上洛可成ほと御氣色にて候哉、難御計候

間、久志本式部殿此地へ被着次第御尋候て、其上を以

黃門様へ可被仰入之由候つる間、弥其通ニ被思召、久志

本殿へ御尋候哉、久志本殿返事之様子も承御心持ニ可成

儀共、可有之与存、兵部少輔を遣候て、式部殿之被仰様

委承候処、五日已前隱岐守式部殿へ御出候而御尋候間、

中々今時分御上洛者罷成間敷候、三日共旅共被成候御

氣色ニ而無之由、委申達候間、弥其御心得尤候、就夫巨

細口上にて被申候儀共御座候、書中ニ者難申達候条、是

枝喜右衛門「快道」へ申含候、細く可被聞召候、從御兩所書狀共

參候ハ、いかやうの子細ニて候哉と、御心遣可有之候

間、早々以早使可申候由、久志本殿被申候間、尤ニ存、

幸喜右衛門歸國仕候間、路次急候様にと申付候、將又

公方様御氣色も頃者少御能御座候由申候得共、諸大名へ

之御對面ハ無御座候、先日如申上候、東之衆御暇被給候

時ハ、七八人被召出、御目見得之由候、昨日も酒井讚

岐守殿下屋敷うしこみと申所へ、江戸より一里余御座候、  
被成御遊山之由候、尚奉期後日候、誠惶誠恐敬白、

寛永十四年 五月廿一日 松平薩摩守 光久（花押）

進上 黃門様

（貼紙）  
此御書、家久公御譜中ニ無之

1051 「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

▽◎以上 △

一書令啓候、仍志岐小左衛門尉方之儀、今度於 薩州様

御前、知行三百斛落着候、就其申事候、去年自此方其許

へ申下候者、於肥後知行四百石余ニ而候つる由被申候間、

本國へ之聞得ニ而も御座候間、四百石被給可然候ハん哉、

於其許 黃門様へ被伺御意、其通ニ相濟候者御支配尤之

由申下候、如其 黃門様へ被仰上、四百石ニ相究候ハ、

必く四百斛ニ被成、目錄可被遣候、其元ニ而も未相究儀

候者、先く此度如被仰出候、三百石之賦ニ可被仰渡、去

年者彈正大弼殿我等罷居候而御談合申候、彈正殿御事者、

小左衛門尉殿御親類之由候而、就御遠慮、御内談者候つ

れ共、表むきの狀ニ御連判無之候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

五月廿九日

伊勢兵部少輔○〔花押〕  
貞昌〔判〕

川上左近將監様

山田民部少輔様

三原左衛門佐様

参人々御中

川左近將監様

山民部少輔様

三左衛門佐様

参

貞昌

伊勢兵部少輔

伊東二右衛門殿持下候、

志岐小左衛門知行之事、

六月廿八日

1052

〔古御文書三拾三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

御札致拜見候、外科慶祐、當月廿日其地江到着、則腫物

療治有之由承届候、最前久志本式部被差遣之、其上又於  
京都可然外科罷越候様ニ与、板倉周防守迄相違候付、慶  
祐下候義重疊忝之由、得其意存候、被入念蒙仰之趣可達  
上聞候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

五月廿九日

阿部豊後守○〔花押〕  
忠秋〔判〕

松平伊豆守○〔花押〕  
信綱〔判〕

酒井讚岐守○〔花押〕  
忠勝〔判〕

土井大炊頭○〔花押〕  
利勝〔判〕

薩摩

中納言殿

貴報

1053

〔御文庫拾八番箱廿九卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

1054

去夏、爲御專使野村大学助殿御下向之節、尊翰到來、謹  
○(ナシ)〔而〕致拜見候、被仰下條々、逐一得尊意候、就夫唐船未  
歸朝申候、定近日歸帆可申候間、其節御吉左右可申上候、  
誠惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

六月七日

金武

朝貞

嶋津彈正大弼様  
尊報

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

返々御めしへも同前申候々、かしく、

あまり々音るん不申候間、一筆とりむかい候、たひ  
くむすめへ御あんしんとも御れい不申候よし候、わか  
身心ちの事もかハる事なく候、ゑとよりもたうらい、夕  
へ御入候、式部とのへ御いとまの事もきこえ不申候、御  
め見え御さなく候て、いつれもうちつめみられ候よし候、  
いかさまやかて又きこえ可申候、まつ々又々かしく、

1055

「朱カキ」  
「寛永十四年」六月八日

中納言

おふくろ  
まいる

いゑ久

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御札令拜見候、然者當四月中可有參勤之處、所勞故難成  
付而、最前示預候之通達 上聞、無氣遣緩々可被致養  
生之旨、被仰出候段、忝之由得其意候、依之爲御札使者  
被差上、殊孺子三十端進上之趣、遂披露候之處、念之入  
候通御機嫌被思召候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

六月十一日

阿部豊後守 ○(花押)  
忠秋〔判〕

松平伊豆守 ○(花押)  
信綱〔判〕

酒井讚岐守 ○(花押)  
忠勝〔判〕

土井大炊頭 ○(花押)  
利勝〔判〕

薩摩

中納言殿

御報

1056

〔右馬頭忠興譜中〕

寛永十四年丁丑六月十一日、於武州江戸卒、享年三十九、

法名青蓮院宗譽原隆居士、於新知  
恩寺葬、

1057

〔古御文書三拾三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

返々焼物二種給候、近比見事候而令祝着候、御病中

別而懇情候、

爲去月之返答、委細之書狀遂披閱候、御所勞久志本依療  
治、少々彼得驗氣候旨、先以珎重候、乍去喉ニ腫物出來  
候由、是又無心許候、養保專一候、猶吉左右相待候、か  
しく、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕六月十五日  
〔近衛信尋〕  
〔花押〕

薩摩中納言

とのへ

1058

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

去廿一日之御狀令拜見候、仍今廿五日於嶋原被仰渡之旨  
御座候處ニ、三原左衛門佐殿時分能出合被申候、様子之  
儀ハ三原殿可被相違候之条、不能具候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

六月廿五日

馬場三郎左衛門尉〇〔花押〕  
利重〔判〕

嶋津彈正忠殿

鎌田治部少輔殿

1059

〔光久公御譜中〕

從國司爲御使、其地へ渡楫之由、辛勞令察候、仍爲音信  
香餅二箱・綿子廿把・太平布廿疋・焼酒二甕到來珎重候、  
仍太刀一腰・馬一疋、表書中之驗計候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕六月廿八日  
光久〔御判〕  
〇〔花押〕

具志川

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」  
 一上様御煩御おこり候時者、御手足ひへ、扱御頭おもく候て、御熱氣一動、又ハ一動半も御平脉ニ増候由候、

松大隅様  
 人々御中

「朱力キ」  
 「寛永十四年」

六月廿八日

細越中  
 忠利判 花押

以使者申入候、猶期後音之時候、恐惶謹言、  
 「樽令進入候、差儀も無御座候得共、御氣色之程爲可承、拙者儀茂無事ニ罷有事候、次當所之肴三種・御酒色と十茂涼敷成候間、御氣分も能在御座与存候、此表相替儀も無御座、薩广守殿一段御無事ニ御座候間、可御心易候、

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」  
 以上

御熱氣之間、一時・二時程も御座候、物もあかりかね申候、加様之事五日・十日ニ一度つ、御座候、此前之十分一程かるき分ニ而御座候事、  
 一御酒をあかり不申候故、御食者常ニあかり候、一ぱいも其上も上り申候、おこり候時者、常ほともあかり不申候事、  
 一御手足之御し、も少御こへ被成候、御手足之御本御座候と聞え申候事、  
 一常ニ少之物音も御胸ニひ、き申候、物に御おとろき被成候由、此段者おこり不申候時も、同時と承候事、  
 一おこり申候時者、事之外御心よハく、はや御煩もおもり候哉と思食様ニ御座候而、さめ候へハ常のことくに御座候由候事、  
 一今も御裕を召、時々呉服を御すそへかけ申由候事、  
 一夜ルハ大方七ツ迄御寢成候事成不申候、又ハ夜明まで御座候而、夜明候てより御しつまり、五ツ過四ツ時まで御寢成候、それもとくと御寢なり候へハ、其日者御

心よき由候事、

一御養生者事之外つよく御座候、然共此程迄大ふとん四五ツ御しき被成、夜もあつき物を召候由候事、

一御姫様此比ちと御煩被成候處ニ、木下右衛門太夫殿龍虎圓と申藥妙藥之由被聞召、右之御藥あけられ候へとの儀ニ而、被上候處ニ、御用被成候へ者御相應ニ而、御大小便共に通シ、すきくと御快氣被遊、其後おこらせられず、上下目出度存候事、

以上

〔朱力キ〕  
〔寛永十四年〕六月廿八日

松大隅様

参

細越中

〔御譜中ニ八月日マテニテ、宛書モ名モ無之〕

〔雜抄〕

任幸便申入候、仍御妹様御跡之儀ニ付、〔家久公、御下様ニテ御書頭久通ノ嫡母トモ可申候、慈母也〕黃門様江被仰上候ハ、我等ニ御知行御附屬被遊候ハんと哉らん、〔筑後守〕兒玉

殿〔利昌〕ニて御申、其上貴老〔貞昌〕ニ茂從御妹様御狀ニ而被仰入候様

ニ承候、扱々無存懸仕合ニ候、就夫多々申分御座候、先

第一、〔久通伯父也、久元ノ兄、久通妻〕河内守息女ニ夫婦ニ罷成候を、惟新様被聞召上候

而、當家連續致決定候儀御存之前ニ候、ケ様に相定事相

違申候へハ、御靈威も如何ニ奉存候、且又前ニ有増申候

キ、〔久通母、彌太右衛門忠増女也、久近ハ御下様所生也、寛永十三年十二月廿六日卒、年十五才〕愚母怨靈故、又五郎殿煩爲出合様ニ取沙汰爲有之事、

無其紛候、古ニ者不語怪力乱神と承候へ共、御當代ハ奇

怪御取持欵と見得申候間、是計ニ而成共、越義重利我ニ

而も御受難申上候、若御受申上、不輕之兩家を、親子ニ

而兼領候へハ、孟子ニ所謂、季孫子曰、異哉、子叔疑有

私竜断之語と不吳、慚愧々々、請我雖不敏慕君子道者、

乃忘秉彝、儀理之良心爲所識窮之、〔者脱カ〕豈欲得之乎、光久

様ニ茂御内證被仰上、御兄弟様之中ニ御附屬被遊候様〔今ノ在司ヲ立ラシ以前久通預〕

御取成奉頼候、何レ、光久様ニ社御奉公可仕我ニ而候間、

更不慮之讓ニてハ、往々心中不潔ニ候すると存候、下野

守ニも存分書物ニて細々申入候、其地ニ迄被仰下候儀、

少茂不被申聞候つまま、多分怨慕之諫言ニて候、可被

成御察候、返く右之事頼存候、猶期後首之時候、恐惶、

島津圖書頭

〔寛永十四年〕

六月廿九日

久通

伊勢兵部少輔様

猶と此儀少し合点不仕候間、不通ニ可申切内存ニ候、

新加州老前江〔忠清ハ久通母ノ弟也〕茂被仰入候而可預由申候間、定彼方江

茂可被申通候間、被聞召屈候する儀頼存候、乍重言

聊輕薄之儀ニて無之候、其御心得尤ニ候、態一人差

登せ申入度候へ共、下野守存分如何ニ存候故、無其

儀御報奉存候、

〔戴兒玉利昌譜中〕「家久公御譜中ニ在リ、正文在島津圖書久見トア

リ

覺

一 永く病氣ニ候故、万事を指置一方ニ養生候間、各諸事

可被入念事、

一 評定所之諸沙汰延々ニ候而、不事濟由候、近年ハ事も

多候ニ付、年寄兼使者なども餘多相加候処、或誰之留

主、或誰之煩など、候て押移、傍輩中之挨拶を專ニ、

私かましき儀第一にて、國之評儀者第二第三ニ候かと、

諸人沙汰候由、不可然候事、

一 借銀方之儀者無案内之事ニ候、爲其國を預置候条、各

一 途可有談合候事、

一 藏入之被申付やう緩とある由候、百姓おしつかれ入候

由聞及、無心元候、一途可有談合候事、

一 口事沙汰之儀、人ニより人之存分早と相達、小身之者

共ハ兼くと不申達、いつまでも其分ニ候由、風聞候事、

一 番緩候由聞通候事、

一 何事茂老中衆用捨かちニ而候由、相聞得候事、

以上

〔御譜中ニハ朱カキ〕

七月二日

右兒玉筑後守殿・東郷肥前守殿ニて被仰出候由ニて、比方ハ新納右

衛門佐殿を以、彈正殿・民部殿・左衛門佐殿より承候事、



「寛永十四年」  
丑七月三日之晚

1064 「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以每度御心付、御礼難申達奉存候、以上、

尊書致拜見候、然者 公方様へ琉球布御進上被成候、阿

部豊後守當番ニ付、具被遂披露候處、御機嫌被思召、一

段之御仕合御座候、隨而私へ同三端被懸御意候、寔以每

度色々被入御念之段、忝次第奉存候、將亦「又」貴殿御所勞、

弥御本復被成候哉、承度存候、炎天之時分ニ候間、御養

生之儀專要奉存候、猶期後喜之節候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

七月三日

酒井讚岐守○(花押)

忠勝判

松平大隅守様

尊報

1065 「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

薩摩中納言様爲御祈禱、小百味三座蒙仰候、則奉備御札

供物被進入候、弥於宝前本マ、早速御快氣被遊候様、御懇念可

抽精誠候、其段可御心安候、御百味料銀子三拾六匁榎相  
届申候、猶期後慶之時候、恐惶謹言、

「本マ、」  
かつら念山

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
七月四日

長床坊

○忠(花押)  
「判」

「宛ナシ切ル、」

1066 「在宮内社司澤氏」

敬白

御立願

一大隅正八幡宮無言并断酒而七日參籠

一一千堂參

已上

右奉爲 大檀主家久様、患御平愈、御息災長命、尊體

御堅固、吉祥不退故也、仍狀如斯、

寛永十三年(四)文月七日 立願主白敬

1067 「古御文書三拾三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尊書忝拜見仕候、隨而 公方様へ琉球布被成御進上候、先月者阿部豊後守當番ニ付披露之处ニ、一段御仕合共御座候、御前之様躰豊後方々可被申達候、將又私へ同布三端被下置候、爰許玠御座候間、忝着仕候、誠御病中与申、遠路御懇志之至、別而忝奉存候、恐惶謹言、

「朱力斗」  
「寛永十四年」  
七月十四日 土井大炊頭○(花押)  
利勝判

松平大隅守様 尊報

1068

「御文庫拾八番箱廿九卷中」(貼紙)  
「家久公御譜中ニ無之」

御狀拜見并御使者口上之通、具承届候、去年之夏琉球之内唐船罷通候刻、南蛮人四人・日本人式人、以上六人陸へ上置候ニ付、右之者とも於彼地不殘被捕之由候而、南蛮人式人・日本人壹人御越、海上無吳儀昨廿五日到長崎罷着候、則彼者共ニ相尋候処、南蛮人・日本人共ニ伴天

連之由申候、相殘者共、今一艘之船來着次第、可被指越之旨得其意候、遠嶋迄も連々堅被仰付、其上琉球人被差添御越候段、重疊被入御念之通承届候、近日江戸へ具ニ可申上候、委曲御使者口上可被申候、恐々謹言、

七月廿六日 榊原飛彈守○(花押)  
職直判  
馬場三郎左衛門 利重○(花押)  
利重判

嶋津下野守殿

嶋津彈正殿

山田民部少輔殿

三原左衛門佐殿

御報

▽  
嶋津下野守殿

嶋津彈正殿

山田民部少輔殿

三原左衛門佐殿

馬場三郎左衛門

榊原飛彈守

「御文庫拾八番箱廿九卷中」(貼紙)「家久公御譜中無之」

已上

七月十六日之御札、昨廿五日拜見仕候、然者從疏嶋參候南蛮人式人・日本人壹人、今度此地へ御越之由、得其意存候、相殘者之乘候船、未參着無之候間、參次第此地へ可被差遣之旨、御紙面之通無御油断旨、兩御奉行衆へ委細申達候、右之者とも伴天連之由、此地ニ而白狀仕候、御領分御法度稠敷被仰付候故、右之者共御捕被成候由、兩御奉行衆も被申候、右之通兩御奉行衆方江戸へ御注進可在之与存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

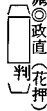
七月廿六日

鳴津彈正様

鳴津下野守様

三原左衛門佐様

末次平藏(花押)



5  
△

「圖書頭久通譜中」

山田民部少様  
御報

寛永十四年丁丑七月廿六日、奉 家久卿使价、此日自口授命、辱賜白銀三十葉・道服一領、錢行云余、同八月廿九日、到武州 幕下、入土井大炊頭忠利館、演 太守命曰、足下所知負薪之憂逾年未快、故雖有詣 幕下之志、未果是我憂也、亡父義弘往昔臨不意之變、不得已遂與逆徒、(〇々々)「逆徒」敗北、而後蒙 家康公之慈恩、我家門至今日也、嗚呼以身命欲報重恩無物、太山不高、大洋不深、今也病苦甚而顔色憔悴形容枯槁、而起居動靜亦不易、以此慮彼、再不能拜謁 幕下、臨言涕滂沱兮、幸在長子忠元之際指南云云、丁此時携進獻之伽羅十斤、登幕府、而後不經數日、又徵我於 幕府、則大老出、而傳 台命曰、太守疾病不快、故呈使价者、欣然々々、只汝保養不怠服湯藥、逐日得快愈必矣、齡亦未謂老弱、猶期再會之禎祥、以臨附與 內書、大老詞曰、有 內書自書判者、近年少

也、於是賜自書之判者、偏爲慰 太守之病床也云云、欲辭去之時、拜受衣服三領并道服二領、辭 幕府、則九月十九日發江戸、十月上旬下着鹿兒島、登城而聞達 幕下之台命也、

1071 「雜抄中」

一筆致啓上候、然者 相國様如當春御寸白差出、御煩敷御坐候、御灸など被遊、近日者一段被爲得御快氣候、就其、各無御心元思召、若御參可有之乎与被思召、左様之儀必無用之旨被仰出付而、以書狀申達候、委細者伊勢兵部少可被申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

寛永十四年八月三日

土井大炊頭

利勝

家久様

人々御中

(貼紙) 「家久公御譜中ニ無之」

1072

「御文書拾八番箱廿九卷中」(貼紙) 「家久公御譜中ニ無之」  
七月十七日之御狀令披見候、從琉球跡船參候、南蛮人兩人・日本人一人昨三日參着、請取申候、遂穿鑿、於當地死罪可申付候、何茂被入御念候段、得其意候、則江戸へ右之趣言上可申候、前後南蛮人四人・日本人式人之雜物共、此御使江相渡申候、恐々謹言、

八月四日

馬場三郎左衛門尉

利重(花押)

榊原飛彈守(花押)

職直(判)

嶋津彈正殿

嶋津下野守殿

山田民部少殿

三原左衛門佐殿

1073

「御文庫拾八番箱廿九卷中」(貼紙) 「家久公御譜中ニ無之」  
猶々秋月殿方のかからめ物ハ未參候、以上、

一書令啓上候、拙者も今月三日之晩ニ長崎へ着津申候、八人之搦物共之様子、爰元御奉行様へ則申上、夜入候て搦物御請取候間渡申候、彼者共荷物等者、昨朝相渡申、何も口能無御座相濟申候、八人之者昨日もかうもんにて、色々御問爲被成由候へ共、其元ニ而之申分不相替由傳承候、定御返事今明日之間ニ可被仰聞与存候条、急度罷歸、万々可申上候、此等趣爲御心得候、恐惶謹言、

八月五日

鎌田源左様

新納加賀守様

人々御中

甲斐右京亮◎(花押)

重政判

「御文庫拾八番箱三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以大隅守殿へ可申入候へとも、御病中之義候間、

各迄如此候、以上、

急度申入候、今度日向之内秋月長門守殿領分ニ而捕申候

者之内八人、其元方頃被差越候者共ニ様子相尋候處ニ、

從呂宋、伴天連并吳國住宅之日本人、唐舟ニ而乘渡、七

嶋之沖ニ而獵舟ニ約諾仕、其浦ニ而日本舟を買乗移候由、

白狀申候、就夫沖ニ而舟之商買古來無之由候間、弥堅被

致停止、於浦々不審成もの舟賣買仕候者、被入念候様ニ、

九州衆へ申入候、御領分中へも被仰付尤候、右八人之者

とも弥遂穿鑿、委細之段者御使者へ可申入候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

八月七日

馬場三郎左衛門尉

利重◎(花押)

職直判

榊原飛彈守

嶋津彈正殿

山田民部少殿

嶋津下野守殿

三原左衛門佐殿

「末紙ニ」

嶋津彈正殿

山田民部少殿

榊原飛彈守

嶋津下野守殿

馬場三郎左衛門尉

三原左衛門佐殿

長崎方

丑八月十二日、甲斐右京長崎より遣候狀、但諸浦へ被仰渡候興（沖）にて、商賣法度之儀也、

「御文庫拾八番箱三十卷中」（貼紙）「家久公御請中ニナシ」

猶と最前參候南蛮伴天連壹人者、一昨日せめられ果

爲申由候、彼者共申候ハ、日本へ渡へき与談合申候

伴天連、未四五人も有之など、爲申由、取沙汰承候、

以上、

乍恐捧愚札候、昨（曉）此元從御奉行衆被仰聞候ハ、此御

狀九州内諸大名衆へ被仰渡儀候間、飛脚を以早と進上可

申由被仰候条、拙者同心申候御道具衆之内兩人申付、態

舟仕立候て指上申候、我等事ハ今少滯留可申由被仰聞候、

秋月殿搦者未參候間、左様成を御待合せ、福嶋にて之様

子を可被聞召合儀と推量申候、八人之搦者も、兩日がう

もんにて、色と被成御問候へ共、別ニ申分茂無之由承候、

然ハ七嶋ニ而八人之者共ニ大形成吟味ニ而舟を賣候与、

此元御奉行中之被思召様子かと、年行司衆之物語を承と

かめ候、是又爲御心得申上候、將又右馬頭殿家老衆ニ被

遣候御狀、此元にて可被仰渡方無之候間、其元より早と

可被成御届由、拙者前より可申上之由候条、同前ニ持せ

申候、御返事次第ニ臆而罷歸、萬と可申上候、恐惶謹言、

八月八日

甲斐右京亮（花押）重政（判）

進上

左衛門佑様

民部少輔様

下野守様

彈正大弼様

進上

彈正大弼様

下野守様

重政

山田民部少輔様

三原左衛門佐様

甲斐右京亮△

「末ニ長崎ヨリトアリ」

『伊勢氏藏書』

一書令啓候、然者貴老如御存、去年巧工 黃門様御歸國  
前ニ、野州老・川嶋津・川久元上將監殿江御承候者、御老中衆被仰  
談、我等儀をあしきさまに仰可被成との御たくミのよし、

黃門様被聞召付、先野州老江御尋候処、曾以野州老無御  
存儀候、御驚候由被仰、即靈社之起請を御進上候、其後  
又川上將監殿江右野州へ如御尋候被仰出候処、是も又野  
州老御同然之御返事被仰上、即靈社之起請御進上候、左  
様之段我等ハ不存候つる処、町田駿河守殿・兒玉筑後守久利  
殿を以、野州老へ將監殿へ被成御承候、御兩所之御神文  
見可申由、芝之於御屋形被仰出候間、見申候而驚申候、

我等御内事申上候にも、ケ様之儀夢ニも不存候つる、於  
身上悪きさまに仰可被成儀少も有之間敷と存候間、御兩  
所御神文之趣、案中ニ存候、本付、(147)近曾トク從 黃門様以兒玉筑後  
守被仰聞ニ者、彈正殿守様久慶方御文御進上候て被成御申ニ  
者、彈正殿兵部少事も、あしきさまに仰被成候由、兵部  
少承由聞せられ、彈正殿殊外御迷惑かり之由被仰上候、  
少も彈正殿ハ兵部事被仰聞敷候間、其心得候様ニと被  
仰聞候間、其御返事ニ申上候者、扱者左様ニ而御坐候欵、  
委細承置候、鎌田出雲守母所より申越候ニ者、御評定所  
ニて我等儀を色々御沙汰共候と承付候間、江戸ニ而諸事  
念を仕申、尤之由注進申候、又彈正殿被召仕候相良志广  
守、有川右近所へ被參候て被申候者、兵部少儀も彈正殿  
あしきさまに被仰候由、出雲守母へ、何方より欵注進之  
由、御聞付候而、御迷惑がり不大形候、是者彈正殿方申  
候様ニとハ無之候得共、殊外御咲止がり被成候を承候間、  
右近ニかたり申候由、爲被申旨、右近此元へ使ニ參候時  
分、我等へ物語候を承置候、扱者、ケ様之取沙汰共候而

之儀等仕たる哉「本ノマ」と申候、孰与御評定所まで之取沙汰ニ、御物など多入候、兵部少手前など御沙汰之由者、去方よりも又承候つる、出雲母口迄ニてハ無之候つれ共、何ぞ我等氣遣ニ及へき儀、不存奇候間、及御沙汰候ハ、其時可申達と存、不及氣遣、爲承置迄にて候キ、扨右之出合ニ付御意之由ニ而、伊東二右衛門殿「詰言」を以被仰出候者、ケ様之儀ハ御つくりひてこそ可被召置候へ共、御つくりひ被成たる儀ハ、後日悪物にて候間、是非共御歸國被成候ハ、御沙汰可被成候由、御意候との儀ニて、野州老・將監殿・澁谷四郎左衛門尉殿「重將」・我等、一所にて御沙汰被成様を談合候様ニと被仰出、各何とて如此儀爲申人可相知哉と、色く被仰候つれとも、其段ハ難究候、とかく黄門様こそ、可被成御存との出合にて、遮而究者無御座候つる、御存之前方其時分皆と被思召候者、彈正殿内衆有川右近へ物語候趣と、我等妹より注進候趣茂、三原左衛門殿「重將」と爲被申候と、皆と被思召たる様子ニ御坐候つれとも、如御存、我等申ニも、いもと所より申越候にも、

1077

誰より爲承とハ無之、世上其取沙汰ニ候と爲申旨を、皆くより御たをしなされんとて、其儀及沙汰、むつかしく被成在候など、世上之取沙汰成可申事、先以迷惑存候間、とかく御沙汰なき上者有之間敷と存候、其上野州老・將監殿誠被入御念、ふかく敷誓紙を被遊候上ハ、殘所無御座候、惣別人之間を悪申成候ハんとのたくミを仕候人ハ相知候様ニ、稠御沙汰候へハ、きさんくにも候、向後之御爲ニも候得共、大事成物沙汰ニ成て、大六ツ敷事ニ成候ハん事ハ、むねを御押へて成共、御こらへ候ハん儀可然候、存奇候段事候、尚期後首候、恐惶、

「疑覽永十四年」

八月十四日

「白旨」  
「案文故名無之」

川上將監様

伊東二右様

「貼紙」  
「御譜中ニ無之」

「家久公御譜中」

「正文在琉球國司」



一於洋中吳國人江船賣渡儀、從古來稠法度にて候、曾致商買間敷候、就中南蛮人へ舟其外不依何色、賣買堅可爲停止事、付南蛮船不可致許容事、

一吳國他國之破損舟可有之時者、荷物等不散様申付置、早と三司官へ可申通事、付從前と如相定、他國へ舟賣候儀可爲停止事、

一分國中□者互船致商買候者、其所之役人承届、三司官へ可申断事、

右條と□可相守、若於緩者、其所之五人与者共、可處嚴科者也、

寛永十四年八月十五日

『兒玉四郎兵衛家藏』

猶以加治木之御懷様爲御養生、御歸ニ其御地江被成御越、臆而御歸宅之由、委曲國分十右衛門尉申達候

間承届、薩州様江茂其段申上候、以上、

國分十右衛門尉爲御使被指遣刻、從 黃門様被成下御書

被成下、謹而致頂戴候、抑御氣色從去月五日之時分十二日迄之御左右に者、御痢病共指発、彼是大事之御氣色之由、不聞得申候間、如何可被成御座哉と、日夜重而之御左右相待申候処、其地去月十七日ニ打立申候早打、今日五日致參着、御氣色頃者能被成御座、御食も參申、御脉も直り申候由、相聞得申、千秋萬歳目出度奉存候、弥此時分之御養生肝要ニ御坐候間、不可有御油断候由、可然之様ニ可預御披露候、恐と謹言、

『寛永十四年』

八月十六日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

兒玉筑後守殿

(貼紙)

『御譜中ニナシ』

『家久公御譜中』

『正文在島津筑後忠置』

返く御もしへも文して申候、御こ、ろへ候へく候

く、かしく、

その、ちハあまり御うとく敷おもひまいらせ候間、一  
ふてとりむかい候、我等ものどけ然くともなく候て、  
いまに候事候、おりく御見(衍字)見(〇ナシ)まい候て、まんそく  
申候、其元何等之事共御入候哉、此方ハあやつりしけ  
くおはし候てこそ、なくさミ申事候、はやく御めに  
かけ申度候、よろつこの人可申候、又かしく、

「朱カキ」  
「寛永十四年」八月廿二日

中納言

おふくろ

まいる

い忍久

1080

以上

一書令啓候、仍伊地知周防守殿へ吉松之地頭被仰付候、  
定而從周防守殿可被申上候、川田殿も男子無之由候間、  
地頭早く被相定候ハてと御坐候而、如此候、川田殿内  
儀へも、此由可被仰渡候、恐惶謹言、

「寛永十四年比カ」  
八月廿四日

伊勢兵部少輔  
貞昌

下野守  
久元

三原左衛門佐様  
山田民部少輔様  
鎌田出雲守様  
川上左近將監様  
彈正大弼様  
人々御中

1081

「家久公御譜中」  
「正文在中原四郎兵衛」

其後者令無音候、氣色於于今すきくとも無之候、併祈  
念立願數く申付候条、無程可爲本腹候之間、可心安候、  
將又其地爲何新布義共候之哉、後便ニ委可示預候、恐々  
謹言、

「寛永十四年」

九月四日

家久(花押)  
「御判」

薩摩守殿

「正文在鎌田出雲政純」

煩爲見廻、到遠路使者、殊立願文令祝着候、色々致養生

候間、次第可得快氣与存候条、可心安候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

九月五日

家久 ○ 「朱イン」

鎌田出雲守殿

〔本文書ハ一〇七〇号記録ト大略同文ナリ〕

「正文在文庫」

所劳然与無之由、無心元候、長々之煩候之間、能々保養  
肝要候、將又爲見廻差越使者、并伽羅十斤到來、念之入  
候段欣悦候、猶土井大炊頭可述候也、謹言、

九月七日 家光 (花押)

薩摩

中納言殿

「正文在文庫 御文書三拾  
三卷中」

以上

御札致拜見候、公方様頃御氣色之御様子、無御心元之

由、得其意存候、依之以嶋津圖書頭被申上、殊伽羅十斤

被差上候、右之通遂披露、并所劳之儀示預之趣、達上

聞候之处、長々之煩候間、無油断療養肝要之旨、被仰

出、病中被入念候段、御機嫌 思召、則被遣 御内書候、

御不例之儀、弥追日御快然候間、可御心安候、委曲圖書

頭可爲演說候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

九月八日

阿部豊後守 ○ (花押)

忠秋 [判]

松平伊豆守 ○ (花押)

信綱 [判]

酒井讚岐守 ○ (花押)

忠勝 [判]

土井大炊頭 ○ (花押)

利勝 [判]

薩摩

中納言殿

御報

1086

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以御手前御所勞如何御座候哉、一入無御心元奉存候、以上、

尊書忝致拜見候、隨而御手前御所勞少く御快氣ニ候者、御當地被成御參府、公方様御不例之御様躰をも、被成御窺度思召候へ共、未然与無御座付、御延引之所御迷惑之旨、奉得其意候、依之嶋津圖書方を以被仰上、伽羅拾斤被成進上候、今月者酒井讚岐守御番故、右之趣披露之節御前ニ罷在、御手前御内存之通、具御耳立候處、遠路之儀每事入御念候旨、御機嫌好御坐候、其上責公御煩、一段無御心許被爲思召、旁以被遣御内書候、公方様御病中ニ御座候へ共、御氣色之御様子、於其元安堵被仕候様ニ与思召、以御直判被仰遣候、一入可爲御満足与奉察候、將又御國ニ而被仰付候醜之にとり一壺并諸白又雙輪被下置候、寔遠路与申、御病中御心入之段、御礼難申上候、委細ハ圖書方可爲演說候間、不能詳候、恐惶謹言、

土井大炊頭

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
九月十二日

松平大隅守様  
貴報

1087  
（本文書ハ一〇八九号文書ト同文ニツキ省略ス）

1088  
「北郷忠直譜中」

寛永十四年七月忠直下國、家久公移忠直宅、可有御養生旨、依命造營修補矣、此時又賜御書於忠直、

1089  
歸國已後爲見廻、高田橋甚左衛門尉被指遣、令祝着候、

氣色無尔ニ付、居所一節相替、養生申度候、其方之假屋家新敷候之条、少く普請申付、近日可移覚悟候、庄内へも彈正・下野より申遣、北郷次右衛門指越、此方之衆と普請之相談共候間、可相調候、可心安候、猶期後喜候、謹言、

九月十五日

家久〔花押〕（北郷氏譜ニヨル）  
御判

北郷式部大輔殿

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆申入候、長崎ニ罷居候南蛮人之子・同母、右之子共之内養子之父母等、今度天川戻船ニ遣候、自然浦々舟を出、此者共乘下不申様ニ可被仰付候、來ル廿日ニ長崎出船申付候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

九月十五日

榊原飛彈守○(花押)  
職直判

馬場三郎左衛門尉

利重○(花押)  
判

松平大隅守様

人々御中

「光久公御譜中」

覚

一御兩殿様より兩三度御給之御條書之趣、萬事御守可然

存候事、

一御家中諸士・民百姓ニ至迄、御一人を守罷居候、何篇  
龜相ニ無之様ニ、連々御覚悟尤ニ存候事、

一三原次郎左衛門尉爲御後見之被付置候条、諸事御談合  
肝要ニ存候事、

一何事も三原次郎左衛門尉并御家老衆へ被仰出、其下之  
小役人々ニ者、家老衆より被申付候様、御分別尤候  
事、

一北郷殿家者御内儀方より御續候間、御憐愍之御心持可  
然存候事、

一御懷へ御無沙汰有間敷事、

一外城御預置候衆并其所々之下役人心持よく被聞召  
通可被召仕候、付他領之山境可入御念事、

一神社佛閣從上古御崇敬之所々、於于今御無沙汰有間敷  
事、

一御心安被思召、或者若輩之御小姓衆、或者女房衆など  
にて、聊之儀も不被仰出様ニ御分別可被成候事、

一諸士之嗜をも可被成御覽候間、御狩者被仰付、武具御覽候而尤ニ存候事、

一御借銀過分ニ罷成候ニ付、諸士上地爲仕由候、一廉之御奉公ニ而候間、御礼被仰聞候てハ可有如何候哉之事、

一六十騎御役儀之馬御油断有間敷事、

一御兵具奉行衆頭三人、馬乘衆へ被仰付、連々玉藥等用意被仕可然存候事、

一當時御扶持人之内ニ御氣ニ入、被召仕人も可有之候、

其衆之前々之作法をよく御尋候而、御扶持方など被下尤ニ候事、

一何事も被思召立儀を急ニ無御沙汰様ニ御校量肝要ニ候事、

一御借銀百八拾一貫目有之由候、此御返弁無之内者、人ニ知行を被下儀、又者たいさう成御作事、上方より御下物等一節可入御用捨事、

一爰元之様子承及候ハ、專以御談合物定無之候ハてハと存候条、前々之儀當時之儀、次郎左衛門尉被承合、鹿

兒嶋へ罷越、いつれも家老衆承候ハてハと存候事、

一御使衆無之と承及候、一兩人も被仰付候而ハ可有如何哉、但次郎左衛門尉家老衆へ御談合尤候事、

以上

〔朱力キ〕  
寛永十四年 丑九月十九日

下野守

1092

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

大隅殿方此前ちいさき瓢單被下候間、于今私秘藏にて候、此中へ入申山椒、此方ニ無御座候、其地ニ御座候ちいさき山椒所望ニ存候間、御肝煎候而、少可

被下候、頼存候、已上、

先度従大隅守殿預御音問、満足仕候、御喉氣御煩ニ付、江戸へ典藥衆之儀被仰遣由、能々之儀と無心元存候、使者ハ御六ヶ敷可在之と、態以飛札申入候、此比之御様躰具ニ被仰越候者、可致満足候、先書ニも如申入、久々御在江戸、御氣之困ニても可有御座候哉、又ハ御歸國路次

之海陸御下着候而も、御國廻など候て不被成御覺、御風を被引、御ひへ被成候故かと存候、其上久敷御墳にて、御せき被成候つる上ニ、御ひへ被成候わけたるへきと推量仕候、不及申御喉之御痛ハ大事之儀候間、御養性無御油断様ニ、能と可被仰入候、私自筆ニ申入度候へ共、左候者、若又そなた方も御筆を被染候而ハ、何方の御病中御とくにて候を、我等能覚申候間、無其儀候、此由も可被仰入候、恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
九月廿二日

(細川忠興)  
三齋  
宗立 ○ 「本マ、」  
「印」

嶋彈正様  
御宿所

(表紙)

家久公  
光久公

寛永十四年自十月  
至十二月

後  
編 舊 記 雜 錄 卷九十二

「古御文書三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

(以)上

鎌田出雲被罷歸候間、令啓上候、相國様(關字)御氣色追  
日被成(關字)御快氣、御見廻(關字)ニ登、城之儀も日を間ぬき可  
申候旨、御年寄衆被仰、何も其通ニ御座候、薩摩守殿  
朔日・十五日之外ニハ、一日ませニ登 城被成候間、  
御供仕候、

一 八月十日ニ伊勢兵部少輔かたへ之便宜ニ被下之御書拜  
見申候、御見廻ニ御参用意被成候へ共、大炊殿方仰ニ  
付而、御やめ被成之由御尤ニ候、何も中途迄参上之衆  
も被罷歸候、

一 加藤左馬助去月十二日之夜五ツ時分ニ被相果候、跡之  
儀子息式部少輔ニ被仰付、今朝被罷下候、

一 八州之大水大風何共可申躰も無御座候、于今栗橋通道  
ハ成不申候、東海道も濱松迄大雨にて御座候、京都近  
郷近國ハさほと無御座様ニ申なし候、酒井雅樂殿屋敷、  
去月廿五日之夜、夜半時分火事參不殘焼申候、類火ハ  
別之所へ無御座候、此御見廻ニも薩摩守殿御供仕候、  
何も爰元之様子鎌田出雲可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十月三日

松平大隅守様

人々御中

「守御譜ニアリ」  
寺澤志(花押)  
廣高(判)

「家久公御譜中」



「正文在琉球國司文庫」

吾等所勞爲見舞、具志川按司被爲指上、去春已來逗留共

候、頃者少得快氣候之条、可御心安候、仍爰許焼之茶入

茶碗雖無然候、令進覽之候、尚期後音候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」十月八日

琉球國主

中納言家久御在印

1095

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

八月廿四日之貴札致拜見候、殊沈香三斤被懸御意、忝奉

存候、先以御氣色夏之比方少能様ニ被成御覺之由、以於

何目出度存候、爰許 上様御氣嫌、弥能被成御座候、乍

去、御目見え未無御坐候、薩广守殿一段御無事御座候、

節々以書狀可申入儀ニ御坐候へ共、御病中之砌、御報ニ

て御六ヶ敷可有御座候と存、無其儀御座候、隨而越中守

方方以使者申入候、御禮被仰聞、餘御慰懃之儀共御座候、

猶御使者彈正大弼方可被申候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

十月十七日

松平大隅守様

貴報

細川肥後守〇(花押)  
光利「判」

1096

「御文庫拾八番箱三十卷中」家久公御譜中ニ在リ」

猶以此儀いかにもく御隱密肝要候、こゝもとにて

も殊外おんミつ仕候、薩州様聞召御おとろき不整形

候、雖不及申候 黄門様へ被仰上候時、奥方にて女

房衆など被聞候ハぬ様ニ可被入御念候、又申候、於

御屋形御沙汰候儀ハ、よくもれ候間、野州老御宿所

にてか將監殿にてか、可有御内談候、御談合衆あま

たハ不入儀候、大学殿ハ被罷出候ハてたるへく候、

以上、

急度令啓達候、然者從琉球進貢船就渡唐、積荷之内ニ大

事之儀候、今度彈正此方へ參候て、右積荷之帳共、鎌雲

・伊兵・顯娃長左など寄合見申候処、以之外笑止千萬之

儀共候、就其委爲可被仰入、今日岩切縫殿助爲御使被遣

候間、彼人にて具可申達候、とかく琉球之儀よく被存たる人被參候ハてハ難成候間、野村大学殿早と可有御上成候、彈正其元罷立候時分、殊外草臥被申候つる間、若難成跡ニも候ハ、町勘解由殿被罷上尤候、同者ちかき比之儀を、大学殿よく被存候間、被參候様可被仰渡候、けにハ難成候ハ、委大学殿之口をも被聞候て、勘解由殿早と御のほせ可被成候、岩縫殿助殿も今日被打立儀ニ候へ共、右之上衆一刻も早と被仰付可然存、先此早打差下申候、不可有御油断候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛本十四年〕

十月十九日

伊勢兵部少輔○(花押)  
貞昌〔判〕

鎌田出雲守○(花押)  
政統〔判〕

彈正大弼  
久慶○(花押)  
〔判〕

三原左衛門佐様  
山田民部少輔様

川上左近將監様

野州様  
人と御中

〔本紙左ノ如シ〕  
野州様

川左將様

参

久慶

彈正大弼

伊勢兵部少

去月十九日之狀、野村大学助殿上落ニ付、今朝七ツノ未參候、  
丑十月十九日

1097

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

遠路御使札、殊卷物一箱之内五被懸御意、忝奉存候、如仰其以來者以書狀も不得御意候、御氣色此比者少宛御快氣候由、珍重ニ奉存候、拙者儀も去年以來相煩、于今すきとも無御座故、何方へも罷出養生仕事御座候、何様

爰元御參府之刻、相積儀共可得御意候、薩厂守殿御無事

御座候、可易高意候、猶奉期後音候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十四年〕

十月廿一日

稻葉民部少輔〇〔花押〕  
〔判〕

大隅様

尊報

1098

〔御文庫拾八番箱廿九卷中〕  
〔張紙〕  
〔家久公御譜中ニ無之〕

御願文

一 法花嶽藥師江御知行合百石可被爲寄附事、付藥師之法

三万座之事、

一 二之宮へ爲御名代、又八郎殿御參候、御馬御寄進之事、

一 鵜戸へ御名代參之事、

一 曾木へ有之賴朝之御墓へ御再興之事、

一 清水之御墓所へ御守可被立之事、

已上

十月廿三日

〔寛永十四年欽跋考〕

1099  
〔家久公御譜中〕

同年十月二十九日、家光公爲問家久病床之安否、降

御内書、使 上使新莊右近太夫遙下于薩州、辱賜御鷹之

鶴、且副以于阿部忠秋・松平信綱・酒井忠勝・土井利勝

十月二十九日連署之奉書、既而后 上使發薩府赴江戸、

故令仁禮主計頼充護送之矣、

1100  
〔家久公御譜中ニ在リ〕

長々所勞如何、無心許候、及寒氣候間、能々保養專一候、

依之爲見廻新庄右近差遣之、并鷹之鶴相送候、猶土井大

炊頭可述候、謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十四年〕十月廿九日 家光〔花押〕

薩摩

中納言殿

1101  
〔古御文書三拾三卷中〕  
〔家久公御譜中ニ在リ〕

所勞如何無御心元被思召候、漸及寒氣其上長々之煩候之

1102

間、能く療養肝要之旨御意候、依之爲 上使新庄右近被  
仰付、御内書并御鷹之羈被遣之候、委曲可被述口上候、  
恐く謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕  
十月廿九日

阿部豊後守 忠秋〔判〕  
○〔花押〕

松平伊豆守 信綱〔判〕  
○〔花押〕

酒井讃岐守 忠勝〔判〕  
○〔花押〕

土井大炊頭 利勝〔判〕  
○〔花押〕

薩摩

中納言殿

人々御中

〔古御文書三拾三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆致啓達候、貴殿御所勞無御心許被爲思召、新庄右近

方以御内書被遣候、委曲御上使可爲演説候間、不能審候、  
恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕  
十月晦日

土井大炊頭 利勝〔判〕  
○〔花押〕

松平大隅様 人々御中

▽  
松平大隅様 人々御中

利勝  
土井大炊頭

△

1103

〔御文庫三番箱六卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

急度申遣候、然ハ從 公方様中納言殿へ爲御見廻、新庄  
右近殿 上使ニ御下候、委細者彈正・伊勢兵部少輔・鎌  
田出雲守所より可申越候、不成大方儀ニ候間、能く可被  
入精候、少シ 黄門様御氣ニ違候共、存寄之義無用捨可  
被申上候、爲其如此候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕 十月晦日

光久〔判〕  
○〔花押〕

三原左衛門佐殿

山田民部少輔殿

川上將監殿

下野守殿

▽  
◎  
下野守殿

川上將監殿

山田民部少輔殿

光久

三原左衛門佐殿

1104 「北郷久加譜中」

寛永十四年十月下旬、肥之前州高來郡有馬島原城主松倉長門守勝家之領内之郷人等起一揆、同比同國唐津城主寺澤兵庫守堅尚領内肥後天草、亦兇徒蜂起、是皆南蠻之切支丹之門徒也、勝家・堅尚在江戸、留主之家老攻撃之、失勝利、兇徒弥振逆威矣、兩家家老（北郷久加譜ニヨリ補フ）請援兵於近國、告

急於武城、此時 家久公在病牀、欲催國中兵、使仁禮主

計介頼充徵島津豊後久賀・喜入攝津忠政・新納加賀忠清

・入來院伯耆重國・山田民部有榮、久加傳 貴命曰、宜

指揮領土之衆軍、屯國境待 嚴命焉、故翌年正月三日、

發平佐渡海于天草、從 上使之下知、驅所所殘黨、且勤

使節島原城陷、而後與三原左衛門重饒到富岡、謁見于

上使松平伊豆守信綱、而歸國、此行亦祭主重政、河野通

昭從之、

1105 「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以是ハ貴殿迄内言申候、大坂ニ大隅殿舟有之ニ付  
而ハ、右近殿乘被申候様ニ被申越可然存候、以上、  
昨朝者種々得御意候、仍内々申候松平大隅殿へ御上使之儀、新庄右近方昨日被 仰付、御内書并御鷹之鶴迄被遣候、右近方今朝未明ニ被罷立候、併路次をハ緩くと被參候、此由薩广守殿へも可被申達候、恐々謹言、  
〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕霜月朔日 忠勝〔判〕  
◎〔花押〕

1107

『兒玉氏家藏』

伊勢兵部様

在口裏

酒井讃岐守

まいる

忠勝

▽◎(印) 〇〇 讃岐く殿よりの御状

▽◎(印) 〇〇 丑十一月廿五日薬丸大炊守(可)持下候、  
△ 寛永十四年丑也

1106

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

我等所勞之義ニ付、使被差越候、一段懇念之条、祝着不  
勘候、殊醬一桶是又珍重之至候、氣色之様子も次第少つ  
、得快氣候へとも、喉之内之いたミ共相殘、難義之躰候  
之条、折角致養生事ニ候、逐日可得驗氣候之間、心遣有  
間鋪候、尚期後喜之時候、謹言、

霜月一日

家久(花押)御判

種子嶋左近大夫殿

1108

(本文書ハ一一一九号文書ト同文ニツキ省略ス)

一度々御狀辱令拜見候、

一御上使御下着被成候て、御仕合能此頃御打立被成候事、  
寛永十四年冬 家光公遣新庄右近大夫來訪公候、疑是也

目出度申上候事、

一安藝守様右之爲御禮御上洛被成候、定而其地御仕合可  
馬津、久雄

然可有御座と存知候事、

一先度御上様御氣相いか、ニ御座候得共、早々御能候而  
目出度候事、

目出度候事、

一黄門様御氣色之儀、意徳打立前ニ者十之物が五六ツ程  
寛永十四年六月廿七日意徳法服至覽府

御能候処、其後又々最發仕候て、本之御腫物上五分至

候而、御はれ被成、左様成ニ付、殊外御いたく御入候

由 御意被成候、定而口明可申と安心・道益なども被

申候事、

一「同年十一月五日意徳歸洛」伊地知安心重商以醫事、公兼領右筆事云。  
一意徳打立候時分、安心迄被仰置候様子者

「以下闕文」

『疑寛永十四年十一月、兒玉利昌報國老伊勢貞昌等書稿也』

「家久公御譜中」

同年十月下旬、肥之前州高來郡有馬島原城主松○倉〔平〕長門守勝家之領内之郷人等起一揆結黨起兵、俗稱一揆、同比同國唐津城主寺澤兵庫頭堅尚高領内肥後天草亦凶徒蜂起、是皆南蠻吉利支丹宗之門徒也、勝家・堅尚在江戸、留守之家老等攻撃之失勝利、凶徒彌振逆威矣、兩家之家老等請援兵于近國、告急於武城、此時家久在病床、催國中兵衆、屯國境、待嚴命矣、於茲板倉内膳正重昌・石谷十藏爲成、奉 嚴命、下向肥州、且松倉勝家・寺澤堅尚及近國之國主郡主等皆、賜暇下向比コソライ及、天草賊徒航海、加有馬凶徒、築原城守之、近國之諸將各著陣、而十二月二十日攻之、凶賊強拒之矣、其後松平伊豆守信綱・戸田左門氏鉄重奉 嚴命下著有馬矣、家久奉 高命、渡軍衆于天草、警固焉、有馬亦遣援兵、故翌年正月朔日之攻城及二月二十八日落城之時、勞軍務或被傷或戰死者多矣、此役也自今茲至翌十五年二月、故老中之奉書及候伯往返之簡牘共備于左方矣、

「御文庫廿三番箱十九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御廻文之写

一筆令啓上候、然者松倉長門守領分於肥前、きりしたん宗門を取立、城下在令放火、城方四五里有之有江家有馬と申所へ、人數四五千引籠罷在之由申來候、爲差儀ニて無之候へ共、其元へハ定実正聞得申間敷と存申入候、不  
及申候へ共、宗旨之者何方ニ可有之も不知儀ニ候間、武具・道具など持下不申様ニ、爲御心得内證申入、恐候脱カ、  
「朱カキ」寛永十四年十一月八日 曾又左衛門

稻攝津守

阿備中守

板周防守

如右四國・中國・九州諸大明衆家老中へ參候事、

1111 「家久公御譜中写正文在文庫トアリ」

御案文之写

一書申入候、

一肥前之國於有馬表、松倉知行之百姓令一揆之由、從肥

後表注進候間、其趣先日申入候、肥後之内寺澤兵庫頭

知行天草江茂、右之黨類共令蜂起之由◎候ニ付、近所之

儀候間、先堺目迄人數少と遣置、御下知次第天草へ可

致加勢之由、豊後之御目付榮江去三日以早打申断候、

彼表之儀色と世上取沙汰共候へ共、正儀不相知候間、

爲可承達、去朔日天草◎江使◎指差遣候、彼者罷歸り慥

成趣承◎ナシり、可致其心得候事、

一此中節と注進雖可申入候、天草◎江右之使遣候者、未

罷歸候ニ付押移候、先々只今之様躰爲可申入如此候、

天草へ遣候者、定而、一揆之居所又何程之人數ニ候哉、

能と爲可承届、遅候と令推量候、將又我等分國中、貴

理師且宗之法度弥稱申付候、若又一揆之者共落來候者、

不遁様ニと堅申付事ニ候、尚追々可申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕十一月八日

家久◎ナシ御判  
御譜ニハナシ

土井大炊頭殿

酒井讃岐守殿

松平伊豆守殿

阿部豊後守殿

堀田加賀守殿

人々御中

1112 讚良善助貞資自譜云、寛永十四丁丑年、島原一揆起、爲

御使者竹内備前守ト同伴、足輕餘多相添被遣申候云と、

善助時年六十六歳トアリ、老功ノ人間合被遣シトミへ



1113

『兒玉利昌譜中』

寛永十四年丑十月、耶蘇妖賊俗謂切支丹也起於有馬前肥及天草肥、

攻其君松倉長門守勝家時在江戶於島原城、二十八日出水地頭

山田民部少輔有榮、使遽告于 府城、時利昌侍 公疾、

内外勞心力焉、十一月三日 公乃使山田有榮成獅子島、

以待令、不敢擅發兵救之、守關東約也、七日伊集院地頭

三原左衛門佐重庸、致利昌書、求亦行之、十四日唐津師

及賊戰於本砥、唐津師敗績、乃寺澤兵庫頭堅高唐津城主、乞



1114

『正本児玉四郎兵衛家藏』

援於公、十七日 公乃遣國老川上久國・三原重庸等、如出水・阿久根之間、徵諸邑兵、指揮救之、先是 大家使板倉内膳正重昌・石谷十藏等、來有馬、以諸候師討賊徒、十九日三原重庸徑至島原、勞 官使營、乃陣待令、當是時也、賊徒等既修原城之墟、據以拒 官軍、

嶋原表實理師旦一揆ニ付、當國方人衆被遣候ハ、山民少出水より之むより能候間、衆中被召列可被遣之由候、近頃尤之儀ニ候、雖然民少者前ニも一戦ニあハせられ候、我等事いま、て終に一戦おも見不申候、か様成仕合之儀候ハす候間、伊集院も大方むよりにて、其上今日之事を今日申渡候而も、衆中七八拾人罷立事ハやすかるへく候、ケ様之俄事ニ御奉公申候而、御用ニ可罷立と連く我等内存候間、今度人衆罷立事候ハ、我等を被遣候様ニ御立合願存候、とかく一戦をも見不申候得ハ、諸人之上おも下知成かたく候、江戸より人衆可被遣と被仰出候ハ、

1115

『御文庫拾八番箱廿卷中』「家久公御譜中ニ在リ」

俄之事たるべく候、内と用意仕置候条、只今被仰付候而も、我等者可罷立候、民少ニ遣候而も、我等も參候様ニ御取合萬と頼存候、恐と謹言、

十一月七日

『寛永十四年』

『時以國老居地頭於伊集院』  
三原左衛門佐「重庸」  
重庸（花押）

児玉筑州様

人々御中

尚以江戸より海道筋所と之物主、中國豊前・豊後之衆來年之歸國前にて候処、如何候哉、去ル十一日御暇にて急ニ被爲上候、何も御譜代衆にて御座候、其書立遣申候、以上、  
急度令啓候、  
一先書ニ如申候、松倉殿於家中、きりしたん之者共取集り、城廻焼拂たる由、最前到来ニ付、松倉殿即御暇被遣被爲被上候、板倉内膳殿・石ケ谷十藏殿爲 上使被遣候、從御國人衆をも可被仰付候と、大炊頭・讚岐

殿へ被得御内意候へ共、此節者先可爲無用候由被仰出候間、其段申遣候、然處、昨日豊後衆など小身之御衆へも、以御奉書自然人衆入候者、可被申付候由被仰出候、然時者薩摩之儀者近所之事候間、豊後衆などよりハ御國へ社可被仰渡候間、内々其御用意ニ而、人衆船兵糧等之儀被調置、從此方之御左右候ハ、即其日被打立候様ニ可有談合候事、

一 黃門様御病中之儀ニ候之条、細く被得御意儀共可難成候、左様候而延くと候ハ、何事も御をくれ被成事、果てより人衆も参様ニ候ハ、公儀之御仕合可爲笑止候間、物頭衆少く從此方被仰遣候、以書立之趣可有御談合候事、

一 先書ニも如申候、上使へ無御油断早くと御使被進、縦從此方不被仰出候共、人衆之儀自 上使被仰候ハ、早く可被指遣候事、

一 昨晚細川越中守殿方、兵部少御用候間可参候由、被仰候間、即参候処、今月二日ニ肥後を打立候早打、昨日

参着候間、其趣御年寄衆へ被仰入候、其様子者、天草へもきりしたん宗之者共誇出候ニ付、三宅藤右衛門尉方之儀ハ、越中守殿御親類之儀候付、肥後之家老衆より藤右衛門尉方へ使を遣、人衆など入候ハ、可得其意候由、被申候へ者、先と誇候者共之内、十七八人程被打果候、別所へ一揆之者共集り候て居候間、成敗之人衆遣候処、皆と方とへ逃散、きりしたんのかしらを

打留候、先當時者此躰候由、返事爲被申由候、天草之儀一揆共弥はびこり候ハ、肥後之内にて候間、越中殿へ定人衆之儀可被仰付候間、薩摩も近邊之儀候条、人衆を可被遣候由御申候而、可然候ハん哉、爲御心得被仰候由候間、其段 薩州様へ申上候、猶以越中殿へ被仰出様被聞召合、從 薩州様茂可被仰上候由候、若く御人衆可被遣由候ハ、即御注進可有之候、天草にて候ハ、程近儀ニ御座候間、被成安儀候、又御人衆も餘多者入間敷と存候、御用心之儀候間、有馬へ可被遣御用意にて尤候事、

一有馬之儀ハ松倉殿城下迄焼拂、城之近所ニ松山御座候

ニ、百姓共五百人程罷居、夜るくハ城之下へ取懸り、時之聲をあげなといたし候ニ付、城よりも鉄炮を萬事打候躰候、城中よハリたる躰候間、肥後より鉄炮衆を少く遣候へ共、豊後之御横目衆より不被仰付儀ニ者、加勢可爲無用之由候間、鉄炮なども船ニ取籠候而有之由、肥後より注進候、惣様之一探共ハ、城より二三里程引退、古城ニ罷居之由候事、

一越中殿御家中より、芦北表之海邊を、檢者を以ミせさせられ候処、不審成小船ニ人六人乗候而相着候間、とらへさせ候へ者、きりしたん之本尊を頸ニかけ、彼宗弟之數珠を持候而居候間、如何候而ケ様之躰ニ候哉と、當座ニ問懸候へ者、何を隠し候ハニ、我等天草大矢野之庄屋ニ而御座候、不紛大うす宗にて候、肥後へ火を付ニ參候と爲申由候、今度有馬へきりしたん宗誇之儀者、彼宗御法度之時分より、本尊之表具を仕儀、世上ニ恐て不罷成候処、一夜之間ニいかにも結構ニ表具

出來候、是者でいうすの御作にて候、難有之由申渡、それより前ころびたる者共も、皆くもとのやうニ宗を直したる由候、如此候時者、御國なども程近儀候条、色く之才覚を可致候間、被入御念在と所と浦くニ至迄、不審成者候者、其沙汰可有之候事、

一肥後よりハ有馬へ一探起候ニ付、はや四度注進御座候、其許よりハ未兎角不被成御申候、定早打御使致可有御進上候へ共、船中にて運物ニて候哉と申事候、將又九州諸國より〔ハ〕<sup>◎者</sup>、豊後之横目衆へ別而被入念使など皆く被進候、其趣早と爰許へ披露候由、其沙汰候事、

一當時者 黃門様御在國之儀候間、御病中とハ有なから、左様之儀共御油断有間數候、尚期後音候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
寛永十四年  
霜月十三日

鎌田出雲守<sup>◎</sup>〔花押〕  
政統〔判〕

伊勢兵部少輔<sup>◎</sup>〔花押〕  
貞昌〔判〕

彈正大弼<sup>◎</sup>〔花押〕  
久慶〔判〕

1117

「正文在島津左衛門久道」

かもし  
まいる

「本ママ」  
こゝ

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
めつらしき事共にて候く、かしく、  
い申候よし、くハしき事いかさまやかてちうしん候する、  
との外なるいつきおこり候て、しろのうちまでやきハラ  
れより申候へく候、又ひこをもてへ松くらとの、内、こ  
おかたへあまりく無音申候間、一ふてとりむかひ、そ

1116

「家久公御譜中」

「正文在島津市之助忠起」

下野守様  
川左近將様  
山民部少様  
三左衛門〔佑〕様  
佐  
人と御中

1118

「御文庫拾八番箱三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一嶋原于今籠城仕居申候、去ル十三日、城之壱里わきミ  
へと申在所ニ米藏御座候、此米取ニ侍拾貳人・鉄炮貳  
百丁差遣候処ニ、千本と申村方一揆共出候て、高橋弥  
次右衛門・入江与右衛門・高島次郎太夫と申鉄炮頭參  
人、其外四五人討死仕、這々之仕合ニて城へ取込申候、  
城近邊焼殘候在所をも、一揆共焼拂申由承及候、其外  
相替儀無御座由ニ候事、

嶋津彈正殿爲御使被罷越候之處、貴札殊更善物壹箱被懸  
御意候、寔被思召出別而忝奉存候、御氣色少御快氣之由  
目出度存上候、拙者与風御暇被下罷上候、在所可奉得  
貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
霜月十六日

伊東大和守  
○(花押)  
祐久〔判〕

松平大隅守様  
貴報

## 御案文之写

「写御文庫廿三番箱十九卷中ニアリ」「家久公御譜中ニ在リ」

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕十一月十七日

一 唐津之人數去十日、天草本戸と申所へ參着仕候、先手四五百計嶋子村と申所迄參居申候所ニ、一揆共三千計ニテ取懸申候を、少くふせき見申候へ共不叶、本戸へ引取、本戸之惣人數と壹ツニ成申候、一揆共直ニ本戸へ取懸、本戸ニても一揆之方勝軍ニテ、本戸之在家不殘焼申候ニ付、侍方之人數、三宅藤兵衛居申富岡と申所へ引取申候、一揆共ハ本戸之わきニ陳取仕居申由申候、右之儀共定説ハ不存候、天草方申來候沙汰、右之分ニテ御座候夏、

一 上使之衆御下向之儀も、自隣國加勢之儀も、其後何共不申來候、苐内御横目衆、此比當國高瀬へ御越之由申候、此外相替義無御座候事、

以上

一 書申入候、然者先書ニ如申候、天草〔江〕一揆之働様みせに遣候者罷歸候、定其許〔江〕者〔最早〕とくニ從肥後表注進可被申上候間、遮而雖不及申入候、國堺之儀候間、乍同事爲申來趣を申入候事、

一 去十四日之朝、天草之内大嶋子・小嶋子と申所を、一揆之者共就致放火、唐津方之衆本砥之渡を越押寄候処、從敵方大勢にて仕懸、唐津衆討負及〔廢〕軍、〔廢〕衆四五人討死候、其内黒具足之武者、本砥之渡口にて討死申たるを見申たる由候、一揆之者共者惣別白出立之由候、此方より遣候者共〔ハ〕者、鉄炮之者六人にて御座候、其内兩人先ニ罷歸、右之趣申事候、殊之外唐津衆〔廢〕軍にて候つる由申候、扱々殘多次第、腹之立申事〔ニ〕候、

一 右合戦之日、放火之跡を見及候哉、口之津よりも彼宗旨之者共、小船余多にて天草へ來たる由申〔事候〕、一當時之跡を承候分〔ハ〕者、一揆之者共大略百姓共之由候、若其内〔ニ〕自然罕人之者共〔茂〕少く可有之候哉、其列之

者共或五千三千雖有之候、大將かましき者有之間敷候間、中く臆意之行不可有之候間、少く人數被指遣候ハ、相濟可申候と存候、唐津衆定若者共不圖仕懸手合ニ崩立候而、惣崩ニ成たる物欵と存候、我等國之者共計〔に〕被仰付候共、無吳儀可申付、事、

一先書ニ如申入候、天草近所之者共へ先申付、獅子嶋へ遣置候、今度合戦之儀相聞〔え〕候而より、追く人數申付、如長崎表遣候、尤御下知於無之者、龜相ニ不罷渡御左右可相待、由申付候事、

一天草へ隣國之衆〔より〕人數可遣之由、若被仰出候ハ、當國〔江〕者三日〔茂〕遅可相聞得候間、筈〔口〕合申間敷欵と、是耳心遣存候、將又先日〔茂〕如申候、一揆之者共次第〔ハ〕わけもなく成行、方くへ可落散欵と存候間、分國中之儀、左様之者不遁様ニ堅申付候、尚相替儀御座候ハ、追く可申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕十一月十七日  
家久〔御判〕  
御譜ニハ御判ナシ

堀田加賀守殿

阿部豊後守殿  
松平伊豆守殿  
酒井讚岐守殿  
土井大炊頭殿

1120

〔家久公御譜中〕  
〔正文在川上式部久重〕

うけ給候やうに、久しくきやうたいけさんにいらす候、のと氣もちとよく候、久しく今のことくにて候ハ、やかてよく候ハんと思ひ候へく候、ことさら見事なるツきんしほけさは大しもにて候、かやうのしもハまれなる事にて候、一たんとまんそく申候、いづれもことつてのよし、こゝろへ申度候、此三日ハ者もしかいけこゝろのよし候、いかと思ひ候、あねもしさまへも思ひ候とく、又とかしく、

「朱カキ」 「口裏ニアリ」  
「寛永十四年」 廿日

千鶴もし  
まいる返事  
いゑ久

土井大炊頭  
利勝〔判〕  
〔花押〕

1121

「全御譜中」  
同年依家久之病、醫師半井琢庵來于薩府、見左之奉書矣、

薩府  
中納言殿

1122

「古御文書三拾三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
御札令拝見候、今度就御所勞被遣 御内書、殊御不例之  
御御直判重疊忝之旨得其意候、今程半井琢庵其國へ相越、  
被加療養之由尤之事情、示給候趣、達 上聞候之處、長  
く之煩候之間、無油断養生肝要之旨 上意候、委曲期後  
音之時候、恐く謹言、

1123

「正文在古御文書三十三卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」  
以上  
御札令拝見候、今度松倉長門守領内嶋原之百姓きりした  
んの宗門令蜂起候之儀、其元へ相達候付而、示預之趣得  
其意候、御念之入候通達 上聞候之處、御機嫌被 思召  
候、彼表御仕置之様子、最前自是も以書狀申入候、委曲  
期後音之時候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十一月廿二日

阿部豊後守  
忠秋〔判〕  
〔花押〕

松平伊豆守  
信綱〔判〕  
〔花押〕

酒井讚岐守  
忠勝〔判〕  
〔花押〕

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十一月廿三日

阿部豊後守  
忠秋〔判〕  
〔花押〕

松平伊豆守  
信綱〔判〕  
〔花押〕

酒井讚岐守  
忠勝〔判〕  
〔花押〕

土井大炊頭  
利勝(花押)

薩摩  
中納言殿  
御報

「御文庫拾八番箱三十卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以新庄右近殿急ニ御下着にて候ハん間、其元御仕  
合之儀、くれく氣遣奉存候、踏次之送夫馬以下上  
方之法ニあひ不申候而、さそく下々機嫌あしく候

ハんと存事候、已上、

急度令啓候、然者圖書頭殿歸國之時分被成◎候 御内書之

御請之儀ニ付、今月十五日山田平左衛門尉來着候、又有  
馬儀、從肥後表到來之由候而、御注進之飛脚同十八日參  
着候間、即御年寄衆へ被仰入候ニ付、右之御返書共昨日  
御持せ候間、以此早打致進上候、將又先日和田乗介・有  
川与左衛門尉を以被仰遣候趣共、定相達可申候、三日中  
新納勘解由殿可被致歸國候間、其節細く可申入候、從方  
々者豊後之御横目衆へ被得御意之由候、定從其元も御油

断有間敷候、一昨日も其元へ御奉書被遣候間、次飛脚ニ  
而大坂迄被遣候、此方御藏元よりハ、右之御奉書請取候  
而、早々其元へ相届候様ニ与、我々書狀可相付之由候間、  
相認候而致進覽之候、定相届可申候、猶期後音候、恐惶  
謹言、

「朱カキ」  
寛永十四年

十一月廿四日

鎌田出雲守◎(花押)  
政統判

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌判

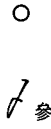
彈正大弼◎(花押)  
久慶判

下野守様  
川將監様  
三左衛門佐様  
山民部少様  
人々御中

「末紙ニアリ」  
下野守様



川上將監様



久慶

彈正大弼

伊勢兵部少輔

鎌田出雲守

丑十二月十四日ノ朝、木佐貫半右衛門尉持下

「御文庫拾八番箱三拾卷中」家久公御譜中ニ在リ

尚々彈正・兵部少々長岡佐渡守殿へ遣候書狀、今度

被參候使被相渡候様、被仰付候而可被下候、以上、

細川肥後守殿、今度始而御暇ニて御歸國候、爲御祝儀從

薩州様御使可被進候間、鎌田源左衛門尉欵河田内膳正欵、

兩人間ニ可被仰付之由 御意候、然者御進物之儀御小袖

十、御馬代金壹枚被進候由、御狀ニ被遊入候間、可有其

御心得候、即此早打へ從京都右之御小袖表裏綿迄被相調、

御馬代金子同前ニ可被差下由申渡候間、定此御道具衆可

持下候条、御小袖早々御仕立させ候而尤候、將又御使之

人肥後守殿へ之進物者、御太刀ニ馬代銀子可爲壹枚候、  
松平河内守殿茂、今度初而御國へ御下候ニ付、爲御祝儀、  
新納勘解由次官殿被進候、自分之進物右同前ニ申渡候、  
爲御心得候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十四年」

十一月廿四日

鎌田出雲守 政統判 花押

伊勢兵部少輔 貞昌判 花押

彈正大弼 久慶判 花押

三原左衛門様

山田民部少様

川上將監様

下野守様

人々御中

下野守様

川上將監様

參

久慶

彈正大弼

伊勢兵部少輔

鎌田出雲守

丑十二月十四日ノ朝、土佐殿半右衛門被持下候、

1126

「光久公御譜中」

「正文在文庫」

猶以有馬表之儀如何相濟候哉、承度候、其元御家老  
衆方大隅守所へも御注進候承付たる由申候て、此方  
御年寄衆へも以早打申入候、新儀共候ハ、、弥御隣  
方之儀ニ候間、可被仰通儀頼入候、以上、

今度者俄ニ御暇出申、御國之御下向御満足察入候、誠目  
出度存候、此等之段爲可申入用使札候、仍御太刀一腰・  
馬代黄金一枚・小袖十令進入候、聊表御祝儀計候、恐惶  
謹言、

「朱力者」  
寛永十四年

霜月廿五日

松平薩摩守

光久〔御判〕  
◎〔花押〕

細川肥後守様

人々御中

1127

「家久公御譜中」

覚

一 毎朝出仕日出時分ニ可被罷出候、役人其外御用之人者  
可被相詰候、出仕衆者、被致 御目見得候者、可被罷  
歸事、

一式部太輔様へ、御吳見可被申上儀於有之者、年寄衆談  
合候而、三原次郎左衛門尉殿へ以相談之上可被申上事、  
一 前代よりの失衆餘多有之由候間、依何之科、何年逼塞  
被申候通、細く以書立可有披露事、

一口事沙汰入念年寄衆・口事聞衆被聞届候而、早く事濟  
候様ニ可有談合事、  
一 武具事々敷無之様ニ、無油断可被相調事、  
寛永十四年十一月廿六日

1128

「古御文庫三拾式卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆致啓上候、然者御國之楯柑 公方様江御進上被成候、披露之處一段御仕合共ニ御座候、將又私へ同五百入式籠被下置候、誠遠路と申御病中御心入之至、別而忝奉存候、猶奉期後喜之節候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

極月二日

松平大隅様  
人々御中

土井大炊頭〔花押〕  
利勝〔判〕

▽◎  
松平大隅様  
人々御中  
封

利勝  
土井大炊頭  
△

1129 「家久公御譜中」「正文在文庫トアリ」

▽◎ 尚々御少苦無心元奉存候、以上  
△

被入御念御飛札拜見、忝奉存候、拙者義肥前嶋原一揆起申候付而、爲〔關字〕上使今日嶋原之内到神代參着仕候、貴様

御人數天草近所へ御出シ被置之由、御目附牧野傳藏・林丹波守方〔茂〕被申越候付而、早々天草之加勢ニ御越候様ニと申遣候、萬事傳藏・丹波指圖次第候様ニと被仰付、尤ニ奉存候、猶追而可得御意候条、不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕  
極月三日

松平大隅守様  
御報

板倉内膳正  
◎重昌〔花押〕

▽◎  
松平大隅守様  
御報  
重昌  
内膳正  
△

1130 「家久公御譜中正文在文庫トアリ」

被入御念御飛札忝致拜見候、御紙面之通肥前於島原、貴利支丹致徒黨候付而、彼地爲御仕置板倉内膳參着仕候、然者天草寺沢兵庫頭領分之内ニ茂、右之徒黨御座候故、兵庫頭家老之方御加勢候様ニと被申入之段、奉得其意

候、先日肥後高勢ニ被罷在候、牧傳藏・林丹波方々、御人數被出置候之由、被申越承候、則兩人の方迄、天草表ニ人數入申儀候ハ、差遣被申候様ニと、内膳私方々申遣候、猶板倉内膳方々御報委可被申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕極月三日

石谷十藏貞清

爲成花押

松平大隅守様  
貴報

▽◎ 松平大隅守様  
貴報  
爲成

〔全御譜中正文在文庫トアリ〕

猶と不慮ニ吉利支丹起候て、九州定而騒敷可有御座候、此表者一段静ニ御座候間、御氣遣被成間敷候、將亦〔又〕同名河内守御暇被下、先月与州へ罷上候、我々于今爰許在府仕候間、御用等も御座候者可被仰付候、

急度令啓上候、然者九州甘草并於嶋原ニ、吉利支丹等結徒盜企一揆申ニ付而、當地へ切と御注進御座候、依其許薩ノ御人數をも可被差向旨、御奉書被遣候由承候、定而最早甘草表へ御人數被指越ニ而可有御座候、其地之儀無御心元奉存候条、早と捧愚札候、寺沢兵庫殿甘草ニ召置候家來三宅藤兵衛と申者、先月十三日ニ一揆等討取候て、頃者少致蜂起之様ニ相聞候条、不及申候得共、早速御人數を被指遣御尤ニ奉存候、御手前様御病中ニ而、萬事御氣遣ニ可被思召候、併各様御加〔勢被遣候ハ、〕、無相違可被仰付と存事候、甘草・嶋原兩所之爲御仕置、松平伊豆守殿・戸田左門殿被仰付、當三日ニ此地被罷立候、近日九州へ着岸可被申候条、諸事可被仰談候、先以公方様寒中〔茂〕〔弥御氣色〕被成御座、切と御城廻〔江〕出御被遊、御機嫌無殘所候条、御心安可思召候、此表一段静謐ニ御座候、御氣遣被成間〔鋪〕候、我等儀、西國村寄々儀ニ御座候条、様子ニ被仰付、罷越儀も可有御座候間、〔自然〕下向仕候者、萬と可得御意候、委細者

從薩尸守殿可被仰遣候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱力字〕  
寛永十四年

極月三日

松平隱岐守

定〔傳〕〔花押〕

松平大隅守様

人々御中

▽  
◎ 松平大隅守様

人々御中

定行

松平隱岐守

△

〔家久公御譜中、正文在文庫トアリ〕

覚書

一 御檢使之御下知急度可被爲相守事、

一 吉利支丹之在家之外於在々所々亂妨狼籍并被爲致放火

間敷事、

一 吉利支丹御成敗被成候砌、一揆等妻子亂妨ニ被爲捕置

間〔鋪〕事、

一 甘草・島原之様子、無油断切々豊後府内之御横目中

〔江〕可被成御注進事、

一 甘草并嶋原之吉利支丹無相違被成御退治候ハ、可然

仁早々被指上、様子被仰上可然奉存候事、

一 吉利支丹自然滞〔茂〕御座候者、定而重而御人數可被遣

候、左候ハ、米・大豆并舟等不自由ニ可有御座候間、

薩尸從御領分肥後表〔江〕届被爲置、御用ニ被立可然候

事、

一 薩尸御人數被指向候者、一揆等無相違靜可申様ニ、爰

元ニ而何も被存候条、無油断早速御人數被遣御尤ニ存

候事、

一 薩尸之御人數、從仕合自然手首尾ニ乘不申候者、子細

懇ニ被仰上可然奉存候事、

一 薩尸惣御人數集被遣候者、遅々可仕候条、甘草村寄々

御人數迄、先々早々被指向可然候事、

〔朱力字〕  
寛永十四年

極月三日

松平隱岐守

伊勢兵部少輔殿

○印

松平隱岐守

○印

伊勢兵部少輔殿  
まいる

〇印

恐々謹言、

松隱岐守  
定行判

1133

〔北郷久直譜中〕

寛永十四年十一月、耶蘇宗門之族企一揆、楯籠肥前國高來郡有馬城、從江戸上使下向、近國之兵馳集、依是從

太守公、爲先勢島津下野久元發向于肥前、久直集兵器待出陣命、

同十二月三日、依島原一揆之企、松平隱岐守贈書於久直、有正文左記之、

極月三日

嶋津式部少輔様

人々御中

1135

〔正文在御文庫〕「家久公御譜中ニアリ」

〔已〕上

嶋原・天草一揆之儀ニ付、御國出水之内獅子島迄、山田民部少輔殿ニ御人數少々被差添被遣置由、尤可然儀ニ候、

此儀并尻理左衛門殿被罷下刻、我等も卒度申入候間、貴様者御病中と申程遠き事ニ御座候間、御養性一篇無御油断儀、肝要ニ存候、將又山田民部少輔殿ニ御人數少々被

差添、獅子嶋へ被遣置由、江戸へ被仰遣ても可然儀かと存候、御國遠候故、御觸ハ無御座候へ共、嶋原・天草之

儀被及聞召、御人數天草近所御國之内之嶋迄被遣候得者、無御油断儀候条、伊〔勢〕兵部殿迄此由被仰遣、江戸之様

子ニと御奉行衆迄被申上候得と、可被仰遣候哉、御分別

1134

態令啓達候、然者此度、肥州甘草并於嶋原、吉利支丹結徒黨一揆を起申ニ付而、其許薩厂之御人數とも可被指向旨、御奉書被遣之由承候、定而早速御勢可被指越と存事候、其元之儀無御心元奉存候、中納言殿御病中之儀ニ御座候条、貴様御陳勢可被召連と存候、不及申候へ共、御指引肝要ニ奉存候、爰元一段静謐ニ御座候条、御氣遣被成間敷候、委細者薩厂守殿方も可被仰入候間、不能具候、

「家久公御譜中 正文在文庫トアリ」

猶以從傳藏殿・丹波守殿書狀之写爲御一覽候、令進  
入候、以上、

▽◎ 松大隅守様

參

三齋



△ 〆

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十二月四日  
松大隅守様  
人と御中  
（細川忠興）  
三齋  
宗立  
○（印）

次第ニ候、御心安さのま、存寄通申入候、但無御下知以  
前ニ敵地へ御人數被遣候儀者、堅御無用ニ候、一揆共の  
近き國之衆も、無御下知以前ハ、一切人數遣不申、御法  
度之由候間、可被成其御心得候、玆敷儀候ハ、追々注  
進可申進由、八代留守居共所へ<sup>◎</sup>度々申遣候間、可被成  
其御心得候、恐惶謹言、

「正文在御文庫十八番箱三拾卷中糺合誤ナシ」  
家久公御譜中ニ在リ

一肥後・薩ノ之衆を以、天草之一揆之儀可有退治之由、  
去月廿六日之御日付ニ而御奉書爲被遣由候、定早々其

堀田加賀守殿  
阿部豊後守殿  
松平伊豆守殿  
酒井讚岐守殿  
土井大炊頭殿  
人と御中

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十二月五日  
家久

急度申入候、然者天草之儀ニ付、近所迄人數差遣、御下  
〔知〕<sup>◎</sup>次第天草〔江〕<sup>◎</sup>可罷渡之由申付候處、從牧野傳藏殿・  
林丹波守殿、先々此方之人數可引入之由、被仰出候間、  
任其旨候、天草之徒黨共、彼地<sup>◎</sup>爲明退様ニ申候、巨細  
之段ハ、定從肥後可被申上候間、可被聞召達候、恐惶謹  
言、

元〔江〕可相達候事、

一有馬表〔江〕一揆起り候由、其沙汰候時分即申入候つる

御人數可入儀も候はん間、内々其御用意候而被 仰出

候ハ、即打立候様ニ被仰付置、肝要之由申候事、

一後日着到ニも可付候間、人數壹萬之内者、いか、可有之哉と申候つる事、

一肥後之人數者、皆々川尻迄うち出、從 公儀之御左右

被相待候つる由にて候間、今度之 御奉書到來候ハ、

定即可被押渡候事、

一御國之人數被乘候はん船、いか、被成候哉之事、

一爰元於 御城之御沙汰ニ者、薩〔江〕衆參候ハ、即時

ニ可相濟との儀ニ候由、皆々被仰候、然處肥後衆など

より手後ニ御座候而者、御外聞如何ニ候間、其御心得

肝要ニ候事、

一天草之儀即相濟候者、其様子を早々此方〔江〕御注進被

仰入尤ニ候、惣別此中、從其元御注進、一度も無御座

候間、黃門様御狀を御調させ候而、兩度被差出候事、

一天草之一揆共被打取候者、其首共御目付衆之被爲見儀も候はん間、むさと不捨様ニ可被仰渡候事、

一松平隱岐守殿より其元爲御心得、以御奉書被仰候、兵

部少致拜見可然存候者、可致進上之由候而被下候間、

致拜見 薩州様へ申上候而、只今差下申候、 黃門様被成 上覽、重而御礼可被仰候事、

一松平伊豆守殿・戸田左門殿・松倉内膳殿・石ヶ谷十藏

殿へ兵糧御音信可然候はん〔よし〕、隱岐守殿御内意に

て候事、但當時者船差合可申候間、先人數天草へ渡之

儀を肝要ニ被成、船之隙於有之者、右之御心得可有之

哉之事、

一今度澁谷如兵衛尉被遣候ニ付、從 黃門様、土井大炊

頭殿・酒井讚岐守殿へ之御書相調、兵部少持參仕候、

讚岐守殿被仰候御内意之事、

一黃門様來春早々御上洛之儀、天草之依様子可申哉と出

合候、其段口上ニ申含候、天草之儀若急ニ不相濟、御

上洛於御延引者、其由此方〔江〕可被仰上候、幸松平伊



豆守殿御下候間、彼御方へも可被仰入候事、

〔以〕上

寛永十四年十二月五日

「口裏ニアリ」  
使 吉利織部祐

川越三右衛門尉

「正文在御文庫十八番箱三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以民部少輔殿之儀者、留守ニて可有御座候間、連

署ニ書不申候、三原左衛門佐殿も定可被遣と存候間、

御兩所〔江〕如此候、以上、

天草表之儀ニ付、於此方薩州様御意之趣度と申進候つる、

如何被仰付候哉と、此中日夜上下致氣遣候處、澁谷如兵

衛尉方一昨三日此許へ被致參着、天草表へ先出水・大口

之衆被參候様ニと被仰渡、山民少はや如出水爲被參由候

間、弥御人數之儀被仰付可被差遣と、目出度存候、若御

國より之人數之儀被仰付候ハ、遠國之儀候間、早と被

仰付候様ニと、御年寄衆迄從 薩州様被仰入候へ共、被

聞召置と計ニ而、終ニ此方へ者無御承、去月廿六日之御

日付ニ而、肥後・薩ノ衆〔候〕ニて、天草之儀可被申付と

之〔關字〕御奉書爲被遣由候、定其元〔江茂〕早と相聞得、もは

や御人數も天草へ可被押渡と存候、先日此方申入候御

人數者、後日ニ着到ニも御目付衆可被付置儀ニ候ハん間、

壹萬之内ニて者いか、候ハん哉と申入候、其上天草之一

揆共、殊之外大勢ニ而驕申之由候間、無人數など被遣、

手餘ニ候て〔ハ〕、可被失御外聞候、ケ様之儀も、はや跡

ニ成可申候間、先日申候儀同事ながら、又と申事候、若

と天草相支候ハ、弥其御心得肝要ニ候、將又松平隠岐

守殿より以御條書被仰候、被入御念候間、被懸御目重而

御禮可被仰候、尚期後音候、恐惶謹言、

「カキ入也」

「寛永十四年」

十二月五日

伊勢兵部少輔〔花押〕

貞昌〔判〕

鎌田出雲守

政統〔判〕〔花押〕

彈正大弼

久慶◎(花押)  
久慶〔判〕

下野守様

川上將監様

人々御中

下野守様

川上左近將監様

參

久慶

彈正大弼

伊勢兵部少輔

鎌田出雲守

丑十二月五日狀、寅ノ正月五日ニ吉利織部殿・川越三右衛門□□參也、



『正文兒玉四郎兵衛家藏』

1139 態以飛札令啓上候、鳴原・天草兩所之責理師端一揆ニ付、御領分境目ニ、貴老様御詰被成之由承候、此邊ニも加勢

之儀可被仰付哉と、其心懸仕奉待 御下知候得共、於于

今御觸も無御座候、何方之御人數被仰付候哉、承度候、

其元へ相聞申候ハ、被仰聞候て可被下候、然者爲御上

使板倉内膳正様・石谷十藏様、肥前諫早へ御下向被成之

由承及候、早速一揆御退治之到來御座候哉承度、若未相

聞候ハ、此飛脚を被留置、一着之御左右、被仰越候而

可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

『寛永十四年』

十二月七日

『蓋紙肥前守伊東大和守祐久家老』

松岡八郎右衛門

真信(花押)

渡邊半右衛門

覚(花押)

伊東傳左衛門

祐忠(花押)

『出水地頭時成獅子嶋』、『有榮』

山田民部少輔様

人々御中

1140 『写在御文庫廿三番箱十九卷中』、『家久公御譜中ニ在リ』

以上

去月八日之御札致拜見候、今度肥前國松倉長門守知行

之百姓、きりしたん宗門蜂起之儀ニ付而、重而示預候  
之通得其意候、

一 肥後之内寺澤兵庫頭知行天草ニも、右之黨類令蜂起付

而、彼地者御領分近所候間、〔境〕<sup>◎塙</sup>目迄人數を被差越、

御下知次第可有加勢之段、豊後御目附衆へ被相達之由

承届候、然者彼表之儀、兵庫頭一分ニ而難計候ハ、

細川越中守人數可致加勢之由、最前申越候、其上入

〔茂〕<sup>◎も</sup>入候〔ハ、〕<sup>◎者</sup>、從貴殿人數被差越、越中守家來と相

談之上加勢有之様〔に〕<sup>◎二</sup>と、先月廿六日〔關字〕<sup>◎</sup>上使板倉内膳

正・石谷十藏方迄申遣候間、被得其意、右兩人被任差

圖尤候、

一天草之儀爲可被聞届、從其元使を被差遣候之〔処〕<sup>◎處</sup>、右

之使其地へ未罷歸付而、御注進延引之由得其意候、

一 御分國中きりしたん宗旨之法度堅被仰付、若又落來き

りしたん者不遁之様被申付之由、尤之儀候、被入念示

給之趣達 上聞候、恐々謹言、

「朱カキ」  
寛永十四年十二月七日

堀田加賀守〔花押〕<sup>◎</sup>  
正成〔判〕<sup>◎</sup>

阿部豊後守〔花押〕<sup>◎</sup>  
忠秋〔判〕<sup>◎</sup>

酒井讃岐守〔花押〕<sup>◎</sup>  
忠勝〔判〕<sup>◎</sup>

土井大炊頭〔花押〕<sup>◎</sup>  
利勝〔判〕<sup>◎</sup>

薩摩

中納言殿

御報

1141 「家久公御譜中、正文在文庫トアリ」

尚以日限之儀〔者〕<sup>◎ハ</sup>、彼地落着次第候間、當地〔より〕<sup>◎カ</sup>

難計候、近國之儀候条、其元方被相計小倉〔江〕<sup>◎ハ</sup>出合

◎甲  
候様ニ可然候、馬舟〔茂〕<sup>◎も</sup>相應ニ可被申付候、

一 筆令啓候、然者今度九州渡海之 上使衆被罷上候刻、

大隅殿関船不殘、豊前小倉〔江〕<sup>◎ハ</sup>廻候様ニ可被申付候、船

之儀爰元々可申遣之旨、御年寄衆方御内證候間、如此候、  
船數致目錄江戸〔江〕差上候間、可被得其意候、大隅殿へ  
以書狀可申入候得〔とも〕<sup>◎共</sup>、御病中候間、各迄申達候、  
恐々謹言、

〔朱力キ〕

寛永十四年

極月八日

小濱民部丞

〔光陰〕

〔花押〕

曾我又左衛門尉

古祐〔花押〕

稲垣攝津守

重綱〔花押〕

阿部備中守

正次〔花押〕

松平大隅守殿

家老中

〔正文在御文庫〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

去月十七日之御札致拜見候、天草表之様子爲見及、從其  
元被差越者罷歸候付而、彼口上之通示預候、然者一揆之

徒黨蜂起付而、自唐津出向候者共無仕合之由、不及是非

事候、最前も如承候、家來之衆獅子嶋〔江〕被出置、追々

人數被相加、御下知被相待之由、被入念たる儀〔候〕も、先

書も如申入候、上使板倉内膳正・石谷十藏被差遣候

間、早速可相濟候、随而天草表加勢之儀、細川越中守其

上人入候者、從貴殿被申付候様にとの儀候間、兩人可被

任差圖候、將又被兩所跡以下爲御仕置、重而松平伊豆守

・戸田左門被仰付、當月三日爰〔許〕<sup>◎元</sup>被相立候、可被得其

意候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

寛永十四年

十二月十三日

堀田加賀守

正成〔花押〕

阿部豊後守

忠秋〔花押〕

酒井讀岐守

忠勝〔花押〕

土井大炊頭

利勝〔花押〕

薩摩

中納言

御報

薩摩

中納言殿

御報

土井大炊頭

酒井讚岐守

封

お

△

「正文在御文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲御見廻以飛脚致啓上候、御氣色如何御座候哉承度存候、拙者事天草表一揆之儀ニ付、越中領分爲仕置被下御暇、俄罷下候、然者天草表へ越中守人數被差向候ニ付、我等茂渡海仕候之處、彼地之一揆共悉明退事、埒濟申候之故、昨日領内川尻と申所◎まて罷歸候、右之趣ニ付、御見廻ニ以使者茂不申入、無首所存之外ニ御座候、何様熊本へ罷歸候刻、以使者可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」

極月十五日

細川肥後守

光利(花押)

松平大隅守様

人々御中

「御文庫拾八番箱三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以右ニ如申候、從 黃門様御年寄衆へ被進之候、

兩度之御狀之御返書致進上候、可被成御上候、已上、

去月廿二日之飛札、今月十五日到來、細々令披閱候、

一天草表之儀ニ付、御國之御人數長嶋迄被遣置之由候而、

已ニ三原左衛門佐殿へ被仰付、去月十九日ニ可被打立

之由、 黃門様御意候由、先書ニ被仰越候、御人數も

八千之賦にて、圖書頭殿・喜入攝津守殿・澁谷石見守

殿・北郷佐渡守殿・山田民部少殿・新納加賀守殿・澁

谷四郎左衛門尉殿・仁礼左近殿など物頭ニ爲被仰定由

候つる間、一段其元之被仰付様、爲存計よりハ急ニ被

仰付、一段目出度存、即御書中之趣 薩州様へ致披露

候処、御國之法にて治定、緩々くと可有之と 思召、

御氣遣候つるに、思召外急ニ被仰付候儀、 黃門様御

在國故ニ候と之御意にて、 黃門様御年寄衆へ被進

候御狀ニ、獅子嶋・長嶋へ御人數被遣置候間、何時ニ

而も御下地次第、天草へ人數可罷渡之由、御座候而、

御年寄衆へ之御狀御調させ候而、被進之候事、

一右之御狀、御城にて各被成御披見、於御前御披露

候而、黃門様御書面一段尤之由被仰、御功者之故如

此候と於御城御沙汰之<sup>⑤由</sup>、委<sup>⑥(關字)</sup>御城にての様從御

存知之方御注進候、是者去月十七日之日付にて參候早

打持參候、黃門様御狀ニ成合候様ニ致談合、相調申

候、又其前去月七日之日付之御狀、澁谷如兵衛尉持參

被申候時も、以御狀之趣、御年寄衆へ自黃門様被進

候御狀之文躰致談合相調、御年寄衆へ被進之候、兩度

なから御文躰尤之由、殊外於御城御褒美之由、慥ニ相

知申候、其御案文各御披見候て、黃門様へ可被懸御

目之由御意候間、差下申候、兩度共ニ其元よりの趣を

以黃門様之御書之御案調させ候事、

一如右黃門様之御書相調候處、今度之御左右ニ者、最

前長嶋迄人數可被遣之由候而、三原左衛門佐殿去月十

九日ニ可被打立之由被仰出候つれ共、御下地無之ニ御

國之御人數長嶋迄被遣候而者、他國之取沙汰一大事之

由、被仰上被相延之由、薩州様聞召、笑止千萬ニ候

と之御意にて、被成御驚候、肥後之人數者、はやと

く方川尻へ打詰、御左右被相待之由候間、薩广之人數

も長嶋へ被遣置、御左右御待せ候而社、筈ニも合可申

候處ニ、在所くニ罷居候ハ、御觸候而も三日者可

相延候、又長嶋迄も四日程ニ社鹿兒島・大隅などの衆者

可被參着候、左様ニ候ハ、肥後之衆へ殊外おくれに可

罷成候、長嶋・獅子嶋へ御人數皆と被召置、公儀之御

下地次第ニ、天草へ即可罷渡様ニと候而社、他國之聞

得もよく候ハハニ、其元之御談合、被對公儀候而之御

遠慮者、一段々と御尤ニ候へ共、天草へ渡り候而社御

下地を爲被背様ニ可有之候、近所へ押寄候而被相待躰

者、一段世上之聞得、以後く迄も御爲可然候、其上

兩度黃門様よりの御狀にも、最前從其元爲仰越趣之

ことく相調、御年寄衆へ差出候處、是も相違之様ニ成

行候事、

一爰元ニ而世上之取沙汰、御城にての御沙汰ニも薩广衆

參候ハ、廳而可相濟由にて御座候、何方ヲ申觸シ候哉、はや御國より首取千人・鉄炮衆千人・馬乘三騎天草へ被遣候、黃門様被仰候者、一揆之者共皆百姓之由候処、侍衆を被遣候へハ不成合候間、爲物頭乘馬三人計被仰遣たるとの取沙汰ニ付、己ニ從細川越中殿尋ニ、兵部所へ預御使候つる、其後薩州様越州御見廻候時、右之趣直ニ御尋ニて候間、薩州様左様之儀者無御存知由候而、被成御笑候、世上ニハ皆如斯社申散候處、肥後之衆被押渡、若事濟候而右、御國之衆ぼとづき候而者、向後被失御外聞事ニ候、くれく人數之打立御延引候て、いか、相調候哉、今更此方より遠路へ被仰候而も、用ニ不立儀ニ候、もはや天草之儀落着可有之候間、不及被仰遣候儀ニ候へ共、若天草相支儀も候て長ひき候ハ、何とそ一涯被入精候様ニ、後日之爲ニ候間、急度可申遣之由御意候間、如此候事、一惣別天草之儀ニ付、黃門様より御年寄衆へ一度も御狀不參候而、公儀不可然之様ニ御沙汰之由候つる間、

大形相心得、御狀調可申欵など、談合申候へ共、從其元之到來無之内ニ、はたと相違候儀も可有之候、其上使此儀最中其元へ御座候つる、又琢庵なども被罷居儀ニ候間、御書之趣相違候而ハと存、御左右を相待候而、ちと後方ニ者候つれとも、當末之御爲よきやうに、又御城方にて内と取沙汰之儀承及候趣を以、御案文仕候、右ニ如申、兩度共ニ御狀之趣、一段於御城皆と御感之由候、今度天草表之御仕合如何候ハん哉、日夜是而已氣遣申事候、雖不及申入候、天草へ御人數可被遣之由、御下地相聞得候、日限被聞召届、即御人數被遣候との御注進、此方へ早く可被仰上事肝要ニ候、黃門様よりの御狀者、兵部少兩度共ニ持參仕候、去月ハ土井大炊頭殿御取次御番ニ而候間、御狀致進獻之候、今月者酒井讚岐守殿御番前ニ而候間、是も直ニ進獻之申候、讚州へ持參候御狀者、今月十一日ニ而御座候つる、即兵部少讚州へ罷居候内、自大坂次飛脚之文箱餘多參候を、小姓衆持參被申候へハ、肥後之衆今月三日

ニ三角之瀬戸へ押寄たる由、只今注進候、定翌日天草へ押詰候はん、薩厂衆者如何候はん哉と御尋ニ而候つる間、御下地さへ候ハ、即天草へ可罷渡候、肥後へ被仰渡候而右ハ、薩厂へ三日も遅相聞得可申由申入候、御念之爲と存、致談合、黄門様御狀ニも、御國へ者余國より遅可相聞得候、是而已御氣遣ニ思召、との御文牒ニ而御座候つる、写差下申候間、委可有御覽候、返すく、天草へ人數被遣候様ニとの御觸、相聞得候日限并御人數、天草へ罷渡候日限、早くと可被仰上候事、一山民少・新納賀州・仁礼左將此三人者、獅子嶋へ爲番手爲被遣由候、是者定しかと獅子嶋へ可被罷居候、乍去人數可爲少勢候間、急ニ被罷渡候而も、肥後衆と押合候而之儀者、罷成間敷欵と存候事、一此書面餘ニ不致流布様ニ御心得尤ニ候、其故者其元へも上方衆被罷居候、黄門様御書なども、此方にて作り文之様ニ有之たるなど、候へハ、いか、ニ御座候、其御心得可爲肝要候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
十二月十六日

鎌田出雲守 ◎〔花押〕  
政統〔判〕

伊勢兵部少輔 ◎〔花押〕  
貞昌〔判〕  
彈正大弼 久慶 □〔印〕

三原左衛門佐様

川上左將監様

下野守様

御報

1145

「御文庫拾八番箱卅卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、今度其地へ御下向候 上使方早打被仰付候哉、其早打ニ御傳之御狀、先月廿三日之日付にて今月十一日之晚、酒井讚岐守殿方兵部少へ御届候て披見申候、先以上使其御地へ廿二日之夜半時分ニ御着被成、翌朝御奥にて 上使へ御對面被成、雜煮御寄合候て、黄門様御胸御手などの様子を被爲見、殊之外之御草臥之由被仰候つ



る哉、一段懇ニ被爲見候而、目出度候、左様候而於御表  
七五三之御振廻、北郷式部太輔殿琢庵御相伴にて御座候  
つる哉、彼是御仕合能候由目出度候、御振廻過廿三日之  
晩色ニ御留御申候へ共、無御留御打立之由、時分からと  
申有繫◎(關字)上使之御行儀感入申候、爰許御打立候時分者、  
御先ニ注進申候衆も、海道にて被追後候つる間迎、先へ  
者被參着間敷と存候、何篇其許不調ニ可有之と氣遣申候  
処、船中ニ黒葛原周右衛門・松田七左衛門被罷通、五日  
前ニ被致參着候由、奇特千萬、是者 御家御信心之奇特  
にて、神仏之可爲御謀候、御仕合能候而目出度候由、  
黄門様へ能く可被仰上事所仰候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十四年」  
極月十七日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌判

鎌田出雲守  
政統判◎(花押)

彈正大弼  
久慶印

三原左衛門佐様  
山田民部少様

川上左近將様

下野守様  
人へ御中

彈正大弼

鎌田出雲守

伊勢兵部少

丑ノ十二月十七日ノ狀、寅ノ正月八日ニ山田平左衛門尉被持下候、此  
方へ上使御下之儀也、

下野守様

川上左近將様  
參

久慶

1146 「正文在御文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

態致啓上候、今度有馬之古貴利支丹立歸候ニ付、天草之

内十ヶ村余之者共立歸候儀、御耳相立御暇被下罷越申

候、然者天草之様子被聞召届、御懇御使者被下候由、爰

〔許〕<sup>◎元</sup>召置候者共爲申聞候、別而忝奉存候、立歸候者共、

我等不罷着已前、去ル九日嶋原へ逃越、老人も居不申候

間、不及是非候、爰〔元〕<sup>◎許</sup>仕置之儀堅申付候、〔尚〕<sup>◎猶</sup>重而可

申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕

極月十七日

寺沢兵庫頭

〔高〕  
〔花押〕

松平大隅様

参入と御中

1147 「全」家久公御譜中ニ在リ

以上

預御使札忝致拝見候、先以御病氣いまた然共無御座候由

承、御苦勞奉察候、如被仰越候、今度嶋原・天草兩〔度〕<sup>◎所</sup>

之一揆之儀〔ニ〕<sup>◎ナシ</sup>付、爲御使急罷越候、先日者山田民部少

輔殿肥後之内三角と申所迄御越、天草之加勢被成度由被

仰候、早々御届被成候儀尤奉存候、併肥後人數多御座候

付、加勢ニ不及候由、民部方へも申渡候、於江戸御年寄

中へも右之通可申上候、先可申上者道〔眼〕<sup>◎服</sup>式ッ被懸御意、

是又忝奉存候、慮外千萬迷惑御座候得共、我等共同類と

して申合、從何方被下候物をも返進仕候間、其通ニ御座

候、委細者御使者江申入候、恐〔惶〕<sup>◎</sup>謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十四年〕十二月十八日

松平甚三郎

〔行隆〕<sup>◎</sup>寛政重修諸家譜ニヨル

〔恒〕<sup>◎</sup>〔花押〕

松平大隅守様

御報

▽<sup>◎</sup>  
松平大隅守様



〔行隆〕<sup>◎</sup>寛政重修諸家譜ニヨル

〔恒〕<sup>◎</sup>

松平甚三郎

△

1148 「全」家久公御譜中ニ在リ

一筆申入候、今度天草吉利支丹之徒黨共彼地立退候由申

來候、定而舟にて方々江逃可申候、御領分などへ参儀も

可有之候間、不及申候得共、弥被入念堅穿鑿候而、参候

者擲 上使兼〔江〕御越尤候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十四年

十二月十八日

曾我又左衛門尉  
古祐〔花押〕

久貝因幡守  
正俊〔花押〕

稻垣攝津守  
重綱〔花押〕

阿部備中守  
正次〔花押〕

松平大隅守殿

家老中

1149 「正文在文庫」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御使札忝致拜見候、如御意之天草表〔江者〕細川越中守人數被仰付候而、天草表獅子嶋迄被差出候御人數、御國端迄御引取被成候様ニと、澁谷四郎左衛門殿・平田狩野介殿御理申入候、拙者共肥後勢同道申彼表へ罷越候處、徒黨共在々を明島原方々へ落散、一人茂不罷有候、肥後勢者十三日川尻迄引取被申候、拙者共者此表〔江〕渡海仕、

上使板倉内膳正・石谷十藏申談、是ニ罷在候、猶御使者御兩人〔江〕申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十四年

十二月十八日

林丹波守〔勝正〕  
〔吉政〕〔花押〕

牧野傳藏  
成純〔花押〕

松平大隅守様

貴報

1150 「正文在文庫」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚以遠路思召寄御〔支〕札忝次第奉存候、別紙ニ御報

可申上候得共、乍慮如此御座候、已上、

重而御使札忝奉存候、殊御道服二宛被懸御意候、被入御念之段過分至極ニ存候、天草之儀者先書ニ如申上候、此表未相替儀無御座候、委曲三原左衛門殿〔江〕申達候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十四年

十二月十八日

林丹波守

吉政〔花押〕

牧野傳藏

成純(花押)

松平大隅守様  
貴報

∇◎

松平大隅守様

牧野傳藏

林丹波守

嶋原方

△

1151

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

去ル十二日之貴札昨十八日ニ參着、致拝見候、然者御手  
前之御人數獅子之嶋迄出し被置候處、牧野傳藏・林丹波  
所方、御國境迄御引取被成候様ニ、申遣候由、得其意存  
候、天草之儀きりしたんとも壹人も不罷居候付而、細川  
越中人數も彼地ニ少と殘置、川尻迄打入申候、當地きり  
したん共古城ニ取籠罷在候、頓而押詰打殺可申と存候、  
將又御道服ニ送被下候、尤受用可仕候得共、何方◎へも〔江茂〕  
御理申候間、不能其儀候、猶三原左衛門佐方可爲演說候、  
恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十四年

極月十九日

板倉内膳正  
重昌(花押)

松平大隅守様

貴報

∇◎

松平大隅守様

貴報

重昌

板倉内膳正

△

1152

「全」家久公御譜中ニあり

去十二日之尊書昨十八日參着、致拝見候、殊御道服ニ被  
送下忝奉存候、嶋原切支丹之義付而、長崎へ罷越候得  
送下◎とも〔共〕、彼地相替義無御座候間、頓嶋原表へ見舞罷在候、  
當地切支丹とも有馬之古城ニ取籠罷居候、近日責殺可申  
候、天草ニ者切支丹壹人も無之由申來候、用所之義茂御  
座候ハ、自是可申入候、被入御念辱存候、猶御使者可  
爲演說候、恐惶謹言、  
「朱力キ」  
寛永十四年  
馬場三郎左衛門  
利重(花押)

極月十九日

馬場三郎左衛門

利重(花押)

薩摩  
中納言様  
参尊報

1153

「全」家久公御譜中ニ在リ

尚々未御病中故、御印判被成候由被仰下候、御氣色之程無御心元奉存候、以上、

遠路思召寄御使札、殊御道服ニ被懸御意忝奉存候、如仰嶋原きりしたん之儀ニ付、俄罷下候、長崎相替儀無御座候、此表之様子三原左衛門佐方可被申上候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十四年

極月十九日

榑原飛彈守

職直(花押)

松平大隅守様

尊報

1154

「正文在文庫」家久公御譜中ニ在リ

去十二日之貴札昨十八日ニ参着、拜見仕候、然者御手前之御人數獅子島(迄)出し被置候處ニ、牧野傳藏・林丹波所方御國境(迄)御引取被成候様ニ申遣候由、得其意存候、天草之切支丹共啗人も不罷在候付而、細川越中人數

1155

「家久公御譜中」

「正文在大野正右衛門」

覚

一所中ニ貴理師且宗無之由、先年之御改ニ相究候へ共、

も彼地へ少シ殘置、川尻まで打入申候、當地切支丹共古

城ニ取籠罷在候、頓而押詰打殺可申と存候、將又御道服

ニ送被下候、尤受用可仕候(得)共、何方(江茂)御理申候

間、不能其儀候、猶三原左衛門佐方可爲演說候、恐惶謹

言、

「朱力キ」  
寛永十四年

極月十九日

松平大隅様

貴報

石谷十藏  
(貞清)

爲成(花押)

▽  
松平大隅守様

石谷十藏

有馬方

△

自然前より貴理師且宗隱居候而、不相知事茂可有之

間、如何にも入念可被相改候、不審成者ハ俄ニさかし

など被仰付、道具なども可被見せ候、天下之御法度ニ

而候を、地頭噉衆大形ニ心得、改も不念ニ候者、向後

可及御沙汰候間、聊緩有間鋪事、付他方ニも貴理師且

有之由被及聞候者、無用捨可被申出事、

一今度有馬・天草貴理師且之落人、或方かくを替商買人

などの躰ニ而入來、或出家山伏はかせなどに紛可參候

間、ケ様成者茂稠改究、此方へ可被申出事、

一久敷居住之旅人ニ而茂、能く淵底を脇の者共ニ問究、

又者家さかしなどニて被見届、稠可被入念事、

一御國中之貴理師且ころひ候者共方々、有之、彼者共も

所ニ被置間○補敷事、

一鹿兒嶋町中ニころひ候貴理師且多候、此者共爲居住貴

所へ參候共、曾而許容有間敷事、

右貴理師且宗天下稱御法度ニ而候間、能く相守其旨入

念可有沙汰候、前ニ茂度く申越候へ共、猶爲心得如此

候、已上、

寛永十四年

十二月廿二日

市來八左衛門尉□ （印）

川上左近將監□ （印）

入來院石見守□ （印）

下野守□ （印）

豊後守

大野將右衛門殿

綾噉衆

1156 「古御文書三拾四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以江戸表一段御無事ニ御坐候、爲何相易様子茂不

承候、以上、

尊書致拜見候、如被仰下候、今度嶋原貴理師且之出入ニ

付、何茂在所遠國ニ候之条、無心元可存哉之由 上意ニ

而、某式茂被下御暇、今月十五日爰元へ罷着候、從是社

早々此由可申上之処、遮而被仰下忝奉存候、重々從是可  
奉得尊意候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
寛永十四年

十二月廿三日

秋月長門守  
種隣(花押)

松平隅州様

尊報

1157

「家久公御譜中」「北郷久直譜中ニ在リ」

「正文在島津筑後忠置」

嶋原表へ松平伊豆守殿・戸田左門殿御下ニ付、爲御使可  
被成御越之旨被 仰出候、其段三原次郎左衛門尉迄就申  
入候、尊札拜見仕候、今度者公界之儀候間、御若輩如何  
ニ被 思召候得共、先被應 御意之由尤存候、松平伊豆  
守殿も去五日ニ江戸御立之由申來候条、九州内ニ御着候  
ハ、追付可被成御立候間、其御用意肝要ニ候、委者御  
使ニ申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
寛永十四年

十二月廿三日

川上左近將監(花押)  
久國(判)

1158

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

北郷式部太輔様

参尊報

下野守

久元(判)  
(花押)

尚々式部様并御兄弟様へ以書狀可申上候得共、御前  
宜被成御心得候様可申上候、以上、

一筆致啓上候、今度ハ遠路之処、仁礼主計殿同道仕候、  
誠ニ重疊被爲入御念候段、忝次第ニ存候、海上道中無事  
ニ今廿一日至江戸下着、則致登 城、御請之通言上仕候、  
首尾相調候間、御心安可被思召候、隨而去朔日之御懇札  
伊勢兵部殿方之届拜見忝候、弥中納言様御氣色可被成御  
快氣と奉存候、御次而之刻、御前可然様ニ奉頼候、爰許  
之様子主計殿可有御雜談候間、不能細筆候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
寛永十四年

極月廿七日

新庄右近助

◎直綱(花押)  
(判)

嶋津下野守様

参人々御中

▽ 嶋津下野守様

參

直綱

新庄右近

〔張紙〕此狀御子様達へ被懸御目可被下候、

將監様

下野守

1159

〔正文在嶋津左衛門久道〕「家久公御譜中ニ在リ」

○猶〔尚〕に在所世倅藏人〔江〕御使者被下候由、忝奉存候、〔以〕上、

嶋津彈正大弼殿便宜之尊書、殊御小袖五ツ被懸貴意、誠遠路被思召出不淺忝次第、書中ニ不得申上候、將〔又〕御氣色弥能御座被爲成候哉、承度奉存候、就中薩〔〕守様別而御無事ニ御座候、早々〔歸〕報可申上候〔得〕共、彈正殿歸宅之節と存、其〔〕無御座候、餘及延引候之条、如此ニ御座候、猶重而可奉得貴意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕寛永十四年

十二月廿八日

有馬左衛門佐

直純〔花押〕

松平大隅守様

尊報

1160

〔正文在文庫〕「家久公御譜中ニ在リ」

追而松平伊豆守殿・戸田佐門殿御下向之由候、筑後榎津方御出船、有馬〔江〕御渡候由、路次ニて承候、如何御座可有候哉、別条相替儀承候者、幾度もく捧飛札可申上候、〔以〕上、

急度致啓上候、御氣相如何被成御座候哉、寒中之儀ニ候間、御養性專ニ奉存候、拙者も御暇被下、漸唯今在所ニ下着申候、於江戸薩州様〔江〕も御暇乞得貴意候、一段と御堅識ニ被成御座候、可安貴慮候、有馬表きりしたん籠城、于今不致落去候、懸而被滅可申と承及候、尤捧使札可申上を、只今下着申ニ付て、先々如斯ニ御座候、〔尚〕明春早々御慶可申上候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕寛永十四年

十二月廿九日

相良〔頼寛〕

頼〔花押〕

松平大隅守様

人々御中



『児玉家藏』

覺

一 御膳所衆之事、

一 御食いれ之事但老人罷居候者、差合御座候而不罷出候、

一 鳥目三貫文者平山對馬守殿取替被申候、

但鬼塚源太左衛門殿内儀へ被給候、

一 鳥目貳貫文者大坊存堯坊へ取替之事、

一 御曹子様御たひ、御袋御たひ之事、

『疑寛永十四年』

十二月廿九日

臺所御書院

東郷肥前守殿『重位』

児玉筑後守殿『利昌』

参

(本文書八九八二号文書ト同文ニツキ省略ス)